

西横手遺跡群

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

2001

日 本 道 路 公 団
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第274集

西横手遺跡群

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

2001

日 本 道 路 公 団
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

北関東自動車道は、本県高崎市の関越自動車道から分岐し、茨城県那珂港にいたる延長約150kmの高速自動車国道であります。その間、群馬・栃木・茨城各県の主要都市及び東北自動車道・常磐自動車道を結び、地域社会の発展に大きな役割を果たすものと期待されております。

この北関東自動車道の高崎～伊勢崎間約15kmの建設に先立って、平成7年6月から36の遺跡で発掘調査が行われておりますが、当事業団ではその内、31の遺跡の発掘調査を担当しております。本書は、その遺跡の一つ、高崎市宿横手町に所在する「西横手遺跡群」の発掘調査報告書です。

本遺跡は、近世・中世・古代・古墳時代の火山灰や洪水層に覆われたそれぞれの水田跡等が確認され、当時の農業経営や火山の噴火という自然災害と人間との関わりを知る上で、また、古代の群馬県平野部の土地利用を知る上で貴重な遺跡であると確信しております。さらに東に延びる北関東自動車道地域の各遺跡で発見されている水田跡研究の出発点となる遺跡でもあります。

この報告書は、考古学研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様の研究にも大いに役立つものと確信しております。

最後になりますが、日本道路公団東京建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、高崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成13年1月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は北関東自動車道路建設に伴い事前調査された西横手遺跡群（遺跡略号KT-030）の発掘調査報告書である。
2. 西横手遺跡群は、群馬県高崎市宿横手町277-1、355-5・7・10・11、357-1・5、358-2、371-2・3・5に所在する。
3. 発掘調査及び平成10年度の整理事業は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に再委託して実施されたものである。平成11・12年度の整理事業は、日本道路公団から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託を受け実施されたものである。

4. 発掘調査期間、整理事業期間は以下のとおりである。

発掘調査 平成8年度 平成8年12月5日～平成9年1月27日

平成9年度 平成9年4月1日～平成10年3月31日

平成10年度 平成10年4月1日～平成10年5月31日

整理事業 平成10年4月1日～平成13年3月31日

5. 発掘調査・整理事業の体制は以下のとおりである。

事務担当 菅野 清・小野宇三郎・原田恒弘・赤山容造・蜂巣 実・渡辺 健・住谷 進・神保信史・水田 稔・小淵 淳・坂本敏夫・中東耕志・西田健彦・井上 剛・小山建夫・笠原秀樹・園定 均・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・岡島伸昌・森下弘美・宮崎忠司・片岡徳雄・大澤友治・吉田恵子・並木綾子・今井もと子・松井美智代・内山佳子・星野美智子・羽鳥京子・菅原淑子・山口陽子・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・本地友美・狩野真子・若田 誠・松下次男・浅見宣記・山本正司・吉田 茂・蘆原正義

発掘調査担当 平成8年度 高井佳弘・廣津英一・岩崎琢郎

平成9年度 木村 収・勢藤(旧姓瀧野)晚美・高井佳弘・今泉 晃・岩崎琢郎

平成10年度 麻生敏隆・勢藤(旧姓瀧野)晚美・小宮山達雄(発掘嘱託員)

整理担当 平成10～11年度 岩崎琢郎 平成12年度 熊谷 健

6. 本書作成の担当は以下のとおりである。

編 集 岩崎琢郎

本文執筆 第1章第1節 中東耕志 その他 岩崎琢郎(第4章の自然科学分析結果を除く。)

遺物観察 綿貫邦男・大西雅広・松村和男・平成10～11年度整理担当、嘱託員、補助員

写真撮影 遺構：各発掘調査担当 遺物：佐藤元彦

遺物保存処理 関 邦一・土橋まり子・小村浩一・高橋初美・伊東博子・田中のぶ子

整理嘱託員 平成10～12年度 鹿沼敏子

整理補助員 平成10～11年度 茂木範子・馬場信子・儘田澄子・横板英実・石関富美代・萩原妙子
平成12年度 儘田澄子・猪野熊洋子・堀米弘美・勅使川原操子・石関富美代・萩原妙子

7. 自然科学分析は、株式会社 古環境研究所に業務委託をして行った。
8. 出土遺物、記録資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管されている。
9. 発掘調査及び報告書作成には、以下の方々にご協力頂いた。記して感謝の意を表する。(敬称略)

岡村道雄・坂井秀弥・高崎市教育委員会・高崎市土木事務所・地元関係者各位

凡 例

- 調査面の名称は、その面の遺構の時代名を用いた。同時代の面が複数ある場合、時代名の後に上位より「第1面」、「第2面」…を付した。また、特別な場合は名称の付け方を本文中に明記した。
- 遺構名称は、調査区名・番号・種類の順で表記した。この名称は調査時のものと異なるため、「遺構名称対照表」を付した。
- 挿図の方位記号は、国家座標上の北を基準としている。
- 遺構全体図および遺構配置図は、1/400の縮尺で掲載した。
- 遺構図の縮尺は、原則的に以下の通りとする。その他、各遺構に適した縮尺を用いているので、各図のスケールを参照されたい。
 - 住居・掘立柱建物 1:60 ○土坑 1:60/1:40 ○墓塚 1:60 ○溝断面 1:40
- 遺物実測図の縮尺は、原則的に以下の通りとする。各図にスケールを付してあるので参照されたい。
 - 土器(陶磁器等含む) 1:3/1:4/断面実測 1:2 ○銭貨 1:1 ○木製品 1:6
 - 土製品 1:1 ○金属製品 1:2 ○石製品 1:2/1:6
 - 施釉のある遺物のうち陶器・青磁は、施釉の範囲にスクリーンを貼付した。
- 等高線、断面基準線の数値は海拔高度で示した。
- 遺構の方位は、北を基準とした傾きを計測した。表記は、東に傾く場合をN-○○°-E、西に傾く場合をN-△△°-Wと表した。この角度は90°を越えない。また、方位が南北方向の場合はN-0°、東西方向の場合はN-90°と表した。なお、これらは溝底面等が傾斜する方向を示すものではない。
- 位置の表示は、国家座標第IV系に従った。本遺跡の位置は、X=35,000番台、Y=-67,000番台の範囲であり、その下3桁の数値をそのまま用いて以下のように表示した。
 - ①X軸、Y軸の座標を表記する場合、それぞれ「X=○○○」、「Y=△△△」となるが、調査区設定図や遺構全体図等では3桁の数値のみを表示した。
 - ②各地点の座標は、「(X軸座標) — (Y軸座標)」と表記した。
 - ③各遺構の位置は、5mピッチのグリッドを用いて表示した。グリッド名は南東隅の座標で示し、末尾に「G」を付した。また、より正確な位置が必要となる場合は1m単位の座標を用いた。
- 水田区画の面積は畦畔下端、則ち「耕作面積」で求め、プランメータで3回計測し、平均値を記した。
- 各テフラ等は以下のように表記した。

主なテフラ等の名称	年代	表記
浅間A軽石	1783 (天明三) 年	As-A
浅間Bテフラ	1108 (天仁元) 年	As-B
榛名二ツ岳洗川テフラに伴う泥流	6世紀中葉?	Hr-FP泥流
榛名二ツ岳洗川テフラ	6世紀中葉	Hr-FP
榛名二ツ岳伊香保テフラ	6世紀初頭	Hr-FA
浅間C軽石	4世紀初頭	As-C

- その他、本報告書では以下のような表現や記述を行ったので、参考にされたい。
 - ①遺構図のうち、断面図のみのもののセクションポイント位置は、各全体図(付図1~4)に対応する。
 - ②出土遺物のうち水田面や耕土中から採取したものは、実際にその水田に投棄されたりしたものであるのか、他から混入したものであるのか判断できない。そのため、「遺構外出土」として扱った。

目 次

序

例言

凡例

目次

挿図等目次

写真図版目次

第1章 調査の経緯・方法・経過

第1節 調査に至る経緯 ————— 1

第2節 調査区の設定と調査の方法 ————— 2

第3節 調査の経過 ————— 3

第2章 遺跡の位置・周辺の遺跡・基本層序

第1節 遺跡の位置 ————— 5

第2節 周辺の遺跡 ————— 5

第3節 基本層序の設定 ————— 9

第3章 各時代の調査

第1節 調査概要 ————— 11

第2節 近世以降の遺構と遺物 ————— 12

第3節 中世の遺構と遺物 ————— 52

第4節 古代の遺構と遺物 ————— 63

第5節 古墳時代の遺構と遺物 ————— 80

第6節 古墳時代以前その他の遺構と遺物 ————— 89

第4章 自然化学分析 ————— 93

第5章 まとめ ————— 114

西横手遺跡群・遺構名称対照表

発掘調査報告書抄録

写真図版

挿図等目次

第1図	西横手遺跡群位置図 1	第61図	「古墳時代以前面」遺構配置図 89
第2図	西横手遺跡群調査区設定図 2	第62図	A-57土坑 91
第3図	周辺遺跡位置図 6	第63図	「古墳時代以前面」遺構断面 91
第4図	西横手遺跡群基本土層概念図 10	第64図	「古墳時代以前面」抗列 91
第5図	近世遺構配置図 12	第65図	古墳時代以前の遺物 92
第6図	A-1 屋敷 13	第66図	西横手遺跡群自然科學分析ポイント図 94
第7図	A-1・2 溝 14			
第8図	「近世面」土坑 18	図表1	西横手遺跡群土層柱状図 105
第9図	「近世面」墓壇群配置図 19	図表2	西横手遺跡群植物柱状体分析結果(1) 106
第10図	「近世面」墓壇(1) 19	図表3	西横手遺跡群植物柱状体分析結果(2) 107
第11図	「近世面」墓壇(2) 20	図表4	西横手遺跡群微遺体(花粉)分析結果 109
第12図	「近世面」墓壇(3) 21	図表5	西横手遺跡群花粉分析結果 111
第13図	「近世面」桶埋設土坑(1) 21			
第14図	「近世面」桶埋設土坑(2) 22	写真1	西横手遺跡群植物柱状体写真 108
第15図	「近世面」溝断面 23	写真2	西横手遺跡群花粉・胞子遺体写真(1) 110
第16図	近世以降の遺物(1) 33	写真3	西横手遺跡群花粉・胞子遺体写真(2) 112
第17図	近世以降の遺物(2) 34	写真4	西横手遺跡群植物層(?)写真 113
第18図	近世以降の遺物(3) 35			
第19図	近世以降の遺物(4) 36	付図1	西横手遺跡群 近世・中世全体図	
第20図	近世以降の遺物(5) 37	付図2	西横手遺跡群 古代全体図	
第21図	近世以降の遺物(6) 38	付図3	西横手遺跡群 古墳時代全体図	
第22図	近世以降の遺物(7) 39	付図4	西横手遺跡群 古墳時代以前全体図	
第23図	近世以降の遺物(8) 40			
第24図	近世以降の遺物(9) 41			
第25図	近世以降の遺物(10) 42			
第26図	近世以降の遺物(11) 43			
第27図	近世以降の遺物(12) 44			
第28図	近世以降の遺物(13) 45			
第29図	近世以降の遺物(14) 46			
第30図	近世以降の遺物(15) 47			
第31図	近世以降の遺物(16) 48			
第32図	近世以降の遺物(17) 49			
第33図	近世以降の遺物(18) 50			
第34図	近世以降の遺物(19) 51			
第35図	中世遺構配置図 52			
第36図	「中世面」井戸 57			
第37図	「中世面」土坑(1) 57			
第38図	「中世面」土坑(2) 58			
第39図	「中世面」A-19墓壇 58			
第40図	「中世面」溝断面(1) 59			
第41図	「中世面」溝断面(2) 60			
第42図	中世の遺物(1) 61			
第43図	中世の遺物(2) 62			
第44図	古代遺構配置図 63			
第45図	A-1 掘立柱建物 66			
第46図	A-3 井戸 66			
第47図	「古代A-1・2面」土坑(1) 67			
第48図	「古代A-1・2面」土坑(2) 68			
第49図	「古代A-1・2面」溝断面 69			
第50図	「古代B C面」竪穴式住居 75			
第51図	「古代B C面」掘立柱建物 76			
第52図	「古代B C面」土坑 76			
第53図	「古代B C面」全体図 77			
第54図	古代の遺物 79			
第55図	「古墳時代第1面」遺構配置図 80			
第56図	「古墳時代第2・3面」遺構配置図 81			
第57図	「古墳時代第4面」遺構配置図 82			
第58図	古墳時代水田畦畔断面 85			
第59図	「古墳時代面」溝断面 85			
第60図	古墳時代の遺物 88			

写真図版目次

PL. 1	1	西横手遺跡群全景 (南より)	6	A-25土坑 (西より)
	2	西横手遺跡群全景 (東より)	7	A-26土坑 (南より)
PL. 2	1	近世面A区西半 (東より)	8	A-27土坑 (北より)
	2	近世面A区東半 (北より)	P.L.11	1 A-28土坑 (南より)
	3	近世面A区東半 (東より)	2	A-29土坑 (南より)
	4	A-1 屋敷、A-1・2溝 (上が北)	3	A-31・32土坑 (東より)
PL. 3	1	A-1 屋敷石組 (西より)	4	A-30土坑 (東より)
	2	A-1・2溝 (南より)	5	A-19基壇 (東より)
	3	A-1・2溝石組 (東より)	6	A-19基壇人骨等出土状態 (東より)
	4	A-1・2溝面形 (南より)	P.L.12	1 A-30溝 (東より)
	5	A-5土坑 (西より)	2	A-30溝 (北西より)
	6	A-6土坑 (南より)	3	A-12溝西半 (東より)
	7	A-7土坑 (西より)	4	A-12溝東半 (東より)
	8	A-7土坑断面 (南東より)	5	A-35溝 (北東より)
PL. 4	1	A-9土坑 (南より)	6	A-36溝 (南西より)
	2	A-10土坑 (南より)	7	中世面調群b (北より)
	3	A-14~18土坑 (東より)	8	A-25~27溝 (南より)
	4	A-17土坑 (南東より)	P.L.13	1 A-27・31溝 (西より)
	5	A-19土坑 (南より)	2	A-28溝 (北東より)
	6	A-20土坑 (東より)	3	A-29溝 (北より)
	7	近世面A区東半基壇群 (南より)	4	A-32溝 (南東より)
	8	A-1・8基壇 (東より)	5	A-33溝 (北東より)
PL. 5	1	A-2・3・6基壇 (東より)	6	A-34溝 (北より)
	2	A-6基壇 (東より)	7	中世面調群c・a西半 (東より)
	3	A-4・5基壇 (東より)	8	中世面調群c・a東半 (右が北)
	4	A-4・5基壇遺物出土状態 (北より)	P.L.14	1 A-13・14溝西半 (南東より)
	5	A-7基壇 (東より)	2	A-13・14溝東半 (南東より)
	6	A-10基壇 (南より)	3	A-15~20溝西半 (南東より)
	7	A-9基壇 (南より)	4	A-15・17~19溝東半 (南東より)
	8	A-9基壇木箱出土状態 (東より)	5	中世面調群d (西より)
PL. 6	1	A-11基壇 (東より)	6	A-22溝 (南より)
	2	A-11基壇確論出土状態 (北より)	7	A-23・24溝 (南より)
	3	A-12・13基壇 (南より)	P.L.15	1 古代A-1面 (東より)
	4	A-14・15基壇 (東より)	2	A-34土坑 (南より)
	5	A-16・17基壇 (北より)	3	A-35土坑 (東より)
	6	A-18基壇 (南より)	4	A-36土坑 (南西より)
	7	A-18基壇木箱?確認状態 (南より)	5	A-37土坑 (東より)
PL. 7	1	A-8土坑 (南より)	P.L.16	1 A-38土坑 (南より)
	2	A-8土坑木片出土状態 (南より)	2	A-39土坑 (南より)
	3	A-11・12土坑 (西より)	3	A-40土坑 (南より)
	4	A-11・12土坑木桶等出土状態 (西より)	4	A-41土坑 (南西より)
	5	A-18土坑 (西より)	5	A-42土坑 (南より)
	6	A-18土坑木桶出土状態 (南より)	6	A-43土坑 (南より)
	7	A-1土坑 (南より)	7	A-44土坑 (南東より)
	8	A-2土坑 (南より)	8	As-B下水田A区南西部 (南東より)
PL. 8	1	A-21土坑 (北より)	P.L.17	1 古代A-2面西半 (東より)
	2	A-3土坑 (南より)	2	古代A-2面東半 (下が北)
	3	A-4土坑 (南より)	P.L.18	1 A-1 観立柱建物 (上が北)
	4	A-4土坑埋没物?確認状態 (南より)	2	A-3井戸 (南より)
	5	近世面A区農具痕 (南より)	3	A-45土坑 (西より)
	6	A-3溝 (西より)	4	A-46土坑 (南より)
	7	A-4溝 (南より)	5	A-47土坑 (南より)
	8	A-7・8溝 (北より)	6	A-48土坑 (南より)
PL. 9	1	中世面A区西半 (東より)	7	A-49土坑 (南より)
	2	中世面A区東半 (東より)	8	A-50・51土坑 (南より)
PL.10	1	A-1井戸 (西より)	P.L.19	1 A-52土坑 (南より)
	2	A-2井戸 (南東より)	2	A-53土坑 (南より)
	3	A-22土坑 (東より)	3	A-54土坑 (南より)
	4	A-23土坑 (西より)	4	A-55土坑 (南より)
	5	A-24土坑 (南より)	5	A-37・38溝 (東より)

	6 A-39・40溝 (東より)		6 Hr-F A下水田A区南部 (南西より)
	7 A-41溝 (南東より)	P.L. 31	1 古墳時代第3面A区西半 (東より)
	8 A-42溝 (南東より)		2 古墳時代第3面A区東半 (北東より)
P.L. 20	1 A-43・44溝 (南西より)	P.L. 32	1 A-7大甕 (南東より)
	2 A-45溝 (南西より)		2 古墳時代第3面A区ヒト足跡 (南より)
	3 A-46溝 (南西より)		3 As-C混土上水田A区中央部 (東北より)
	4 A-47・48溝、56土坑 (南より)		4 As-C混土上水田A区東部 (北より)
	5 A-49溝 (西より)		5 A-51溝 (南東より)
	6 A-50溝 (北西より)		6 A-51溝南端 (南東より)
P.L. 21	1 古代BC面-1 (B区) (西より)		7 A-52溝 (南より)
	2 古代BC面-1 (C区) (北西より)	P.L. 33	1 古墳時代第4面B区 (南東より)
P.L. 22	1 BC-1住居 (北東より)		2 古墳時代第4面C区 (南より)
	2 BC-1住居遺物出土状態 (西より)	P.L. 34	1 古墳時代以前第1面A区西半 (東より)
	3 BC-1住居離付近 (西より)		2 A-53溝 (東より)
	4 BC-1住居廻り形 (北東より)		3 A-1枕列木杭出土状態 (南より)
	5 BC-2住居 (東より)		4 A-1枕列木杭出土状態 (西より)
	6 BC-2住居炭化物確認状態 (南より)		5 A-2枕列 (東より)
	7 BC-2住居炭化物除去状態 (北より)	P.L. 35	1 古墳時代以前第2面A区西半 (南より)
	8 BC-2住居廻り形 (東より)		2 古墳時代以前第2面A区東半 (東より)
P.L. 23	1 BC-1掘立柱建物 (北より)		3 A-57土坑 (南より)
	2 BC-2土坑 (西より)		4 A-54溝 (東より)
	3 BC-2土坑遺物出土状態 (東より)		5 A-55溝 (南東より)
	4 BC-3土坑 (西より)	P.L. 36	近世以降の遺物
	5 BC-4土坑 (東より)	P.L. 37	近世以降の遺物
	6 BC-5土坑 (南より)	P.L. 38	近世以降の遺物
	7 BC-5土坑遺物出土状態 (南より)	P.L. 39	近世以降の遺物
P.L. 24	1 BC-1溝 (南より)	P.L. 40	近世以降の遺物
	2 BC-1・2・4溝 (東より)	P.L. 41	近世以降の遺物
	3 BC-3溝 (南東より)	P.L. 42	近世以降の遺物
	4 BC-5溝 (北より)	P.L. 43	近世以降の遺物
	5 BC-6・7溝 (東より)	P.L. 44	近世以降の遺物
	6 BC-8溝 (北西より)	P.L. 45	近世以降の遺物
	7 BC-9溝 (東より)	P.L. 46	近世以降の遺物
	8 BC-10溝B区部分 (西より)	P.L. 47	近世以降の遺物
P.L. 25	1 BC-10溝C区部分 (西より)	P.L. 48	近世以降の遺物
	2 BC-11溝C区部分 (北西より)	P.L. 49	近世以降の遺物
	3 BC-11溝B区部分 (南東より)	P.L. 50	近世以降の遺物
	4 BC-12溝 (北西より)	P.L. 51	近世以降の遺物
	5 BC-14溝 (北より)	P.L. 52	近世以降の遺物
	6 BC-15溝 (南より)	P.L. 53	近世以降の遺物
P.L. 26	1 古墳時代第1面A区西半 (南より)	P.L. 54	近世以降の遺物
	2 古墳時代第1面A区東半 (南西より)	P.L. 55	近世以降の遺物
P.L. 27	1 Hr-FP下水田A区西部 (南東より)	P.L. 56	近世以降の遺物
	2 A-1大甕水口? (南より)	P.L. 57	近世以降の遺物
	3 Hr-FP下水田A区南西部 (南西より)	P.L. 58	近世以降の遺物
	4 Hr-FP下水田A区北端 (北東より)	P.L. 59	近世以降の遺物
	5 Hr-FP下水田A区東部 (北東より)	P.L. 60	近世以降の遺物
	6 Hr-FP下水田A区東端 (南東より)	P.L. 61	近世以降の遺物
	7 Hr-FP下水田A区南部 (南東より)	P.L. 62	近世以降の遺物
	8 Hr-FP下水田A区中央部 (南東より)	P.L. 63	近世以降の遺物
P.L. 28	1 古墳時代第1面C区 (南東より)	P.L. 64	中世の遺物
	2 古墳時代第1面B区 (南東より)	P.L. 65	古代の遺物
	3 Hr-FP下水田B・C区中央部 (北東より)	P.L. 66	古代の遺物
	4 Hr-FP下水田B・C区北西部 (北より)	P.L. 67	古墳時代の遺物
P.L. 29	1 古墳時代第2面A区西半 (東より)		古墳時代以前の遺物
	2 古墳時代第2面A区東半 (上が北)		
P.L. 30	1 A-4大甕 (南東より)		
	2 Hr-FA下水田A区西部 (南東より)		
	3 Hr-FA下水田A区東部 (北東より)		
	4 Hr-FA下水田A区東部 (東より)		
	5 Hr-FA下水田A区東部 (南西より)		

第1章 調査の経緯・方法・経過

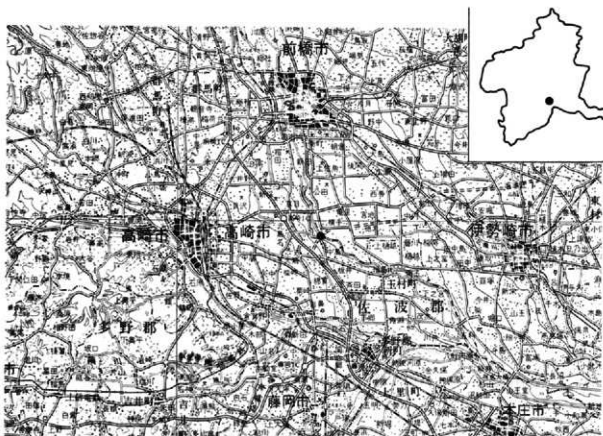
第1節 調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査は、平成8年4月1日付け県教育委員会と本事業団の間で締結された、「北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査」についての契約に基づいて、同年9月から10月にかけて、文化財保護課と日本道路公団、及び当事業団が協議を繰り返し、同年12月から調査を実施することになった。

特に、本遺跡は推定東山道想定地であり、かつ利根川に架かる橋梁は既に工事に着工していたため、利根川右岸の堤防及び護岸・橋脚・公道付け替え工事に関連して、文化財保護課が9月に現堤防部分、及び堤内外の試掘調査を実施した。その結果、古墳時代の水田、及び古代から中世の生活面が残存している可能性が推定された。

よって、本遺跡の調査は、工事の切迫している堤防、及び橋脚関連予定地を先行調査することに決定し、調査期間は2ヶ月を予定した。さらに、未取去地も存在したため、遺跡全体を3分割し、断続的な調査を実施した。なお、宿横手三波川遺跡の近世面で検出された、屋敷跡の調査については、本遺跡まで広がっていることが予測されたため、一体の調査となった。

一方、本遺跡の名称は、平成6年度の県教育委員会と高崎市教育委員会の協議により、昭和63年度に高崎市東部工業団地造成に伴い調査された、西横手遺跡群ⅠとⅡから連続する包蔵地と推定され、「西横手遺跡群」と命名された。



第1図 西横手遺跡群位置図(国土地理院 20万分の1地勢図「宇都宮」「長野」使用)

第2節 調査区の設定と調査の方法

本遺跡の調査区は利根川の堤防や道路、用水路などで区切られる部分をそのまま利用し、以下のように設定した。

1. 堤防より南側にある宅地、墓地部分を「A区」とする。さらに、区内を南北に縦断する用水路の西側部分を「A-1区」、東側部分を「A-2区」と呼び分ける。
2. 堤防直下及びその北側の公道部分を「B区」とする。
3. 「B区」より北側の畑地部分を「C区」とする。

なお、本報告書では各区での土層堆積状況や確認された遺構の状態から判断し、次のような調査区名を用いることにした。まず「A区」については「A-1区」、「A-2区」の名称は用いない。必要がある場合はそれぞれの部分を「A区西半」、「A区東半」と表現した。また「B区」と「C区」については、両区を一括して「B・C区」の名称を用いた。必要のある場合は両区を分離して記載した。なお、発掘調査時のものを用いる場合は、その旨を記してある。

次に調査方法についての基本的な事項を記す。

1. 調査の効率を考え、南部に隣接する北関東自動車道建設に伴う宿横手三波川遺跡（宿横手三波川遺跡本線部）、及び北関東自動車道側道建設に伴う宿横手三波川遺跡（宿横手三波川遺跡側道部）と同時に発掘を行った。そして各遺跡の土層や遺構の状態などを比較しながら調査を進めた。



第2図 西横手遺跡群調査区設定図

2. テフラ層、洪水層等に着目し各層の下面で遺構確認を試みた。
3. 表土や各層の掘削にはバックフォアを用いた。ただし、層中から遺構や遺物の出土が予想される場合など、状況に応じて人力による掘削も適宜行った。
4. 確認面ごとに遺構の性格、残存状態等が異なるため、それぞれに適した方法で遺構確認作業を行った。
5. 平面測量は、空中写真測量と平板測量を併用した。縮尺はそれぞれ1/40を原則とした。
6. 作成した遺構実測図には、遺跡名または遺跡略号(KT-030)・実測図名・縮尺・実測者名・レベル高・ベンチマーク高・作成年月日を記入し、1枚ごとに通し番号を付し、台帳を作成した。
7. 記録写真の撮影は35mm、6×7判のモノクロ及び35mmのリバーサルを用いた。各区の全景や広範囲の遺構に対しては、気球や高所作業車からの撮影を行った。
8. 記録写真のうちモノクロフィルムはベタ焼きを行い、ネガ検索台紙に調査面、遺構ごとに貼り付け、撮影対象・撮影方向・撮影日・ネガ番号を付した。また、リバーサルはコマごとに遺跡略号・遺跡名・撮影対象・撮影方向・撮影日を記入し、番号を付した。番号はモノクロと同じ検索台紙に記録した。
9. 遺物の注記は遺跡名、または遺跡略号・調査面・遺構名・必要に応じて取り上げ番号を記入した。
10. 遺構の時代や水田耕作の可否等を推定するため、必要に応じてテフラ分析やプラントオパール分析その他の自然科学分析を業務委託して実施した。

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成8年度から同10年度にかけて行われた。平成8年度はB・C区の調査を行った。これは利根川に架けられる「利根川橋」の橋脚部分の工事に伴うものであり調査が急がれたため、宿横手三波川遺跡の調査班が対応した。平成9～10年度は、A区の調査を行った。このうち平成9年度では調査班を増やし、宿横手三波川遺跡と並行して調査を進めた。

以下、発掘調査の内容を記す。実際には異なる調査区や同一調査区内で異なる確認面を同時に調査している場合もあるが、煩雑になるためおおその順序を示した。なお、調査区名は発掘調査時の名称を用いている。各土層の名称については第2章第3節を参照されたい。

[平成8年度]

- ① 西横手遺跡群の調査開始。C区の調査開始。古代から近世までの洪水層を除去。Hr-FP泥流層の上面で住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝を確認。
- ② C区、Hr-FP泥流層及びHr-FP層を除去。下面から水田跡を確認。
- ③ B区、堤防の直下を調査。大規模な溝の中央部を確認。(バックフォアにより一部を掘削した結果、3m以上の深さで柔らかい砂層の堆積が認められた。この溝は自然河川と判断され、また遺物も出土せず、作業にも危険を伴うために調査は行わなかった。なお、この自然河川の両岸は、A-1・2区、B区の公道部分で確認されている。)
- ④ C区、As-C混土層の上面をトレンチを設定し調査。遺構は確認できない。
- ⑤ C区、As-C層を除去。下面から畦畔状遺構を確認。
- ⑥ C区、下層確認のためにトレンチを設定し調査。遺構は確認できないため、C区の調査終了。
- ⑦ B区、市道部分で古代から近世までの洪水層を除去。Hr-FP泥流層の上面で住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝を確認。

第1章 調査の経緯・方法・経過

- ⑧ B区、市道部分でHr—FP泥流層及びHr—FP層を除去。下面より水田跡を確認。
- ⑨ B区、市道部分でAs—C層を除去し、下面から畦畔状遺構を確認。
- ⑩ B区、下層確認のためのトレンチを設定し調査。遺構は確認できないため、B区の調査終了。

[平成9年度]

- ① A—2区、As—A混土層を除去し調査。遺構は確認できない。
- ② A—2区、中世から近世の洪水層各層を除去。層内上位の洪水層の下面で、墓塚群、土坑、溝、農具痕を確認。
- ③ A—2区、中世から近世の洪水層各層を除去。層内下位の洪水層の下面で、土坑、溝を確認。
- ④ A—2区、Hr—FP泥流の上面の調査。掘立柱建物跡、井戸、土坑、溝を確認。
- ⑤ A—2区、Hr—FP泥流層及びHr—FP層を除去。下面より水田跡を確認。
- ⑥ A—2区、Hr—FA層を除去。下面より水田跡を確認。
- ⑦ A—2区、Hr—FA下面の水田基盤層を除去。As—C混土層の上面で、水田跡、溝を確認。
- ⑧ A—2区、As—C混土を除去。遺構は確認できない。
- ⑨ A—2区、最終確認面として灰色シルト層の上面を調査。杭列痕、溝、倒木痕を確認。
- ⑩ A—2区、下層確認のためにトレンチを設定。遺構は確認できないため、A—2区の調査終了。
- ⑪ A—1区、中世から近世の洪水層各層を除去。層内上位の洪水層の下面で、屋敷跡、墓塚、土坑、溝等を確認。
- ⑫ A—1区、中世から近世の洪水層各層を除去。層内下位の洪水層の下面で、井戸、土坑、溝を確認。
- ⑬ A—1区、As—B層を除去。下面より水田跡、土坑を確認。
- ⑭ A—1区、As—B下面の水田跡の基盤層を除去。Hr—FP泥流層の上面で土坑、溝を確認。
- ⑮ A—1区、Hr—FP泥流層及びHr—FP層を除去。下面より水田跡を確認。
- ⑯ A—1区、Hr—FA層を除去。下面より水田跡を確認。この面の調査は次年度へ継続となる。

[平成10年度]

- ① 先年度からの継続でA—1区、Hr—FA層を除去。下面より水田跡を確認。
- ② A—1区、Hr—FA下面の水田跡の基盤層を除去。As—C混土層の上面で、大規模な畦畔、溝を確認。
- ③ A—1区、As—C混土を除去。溝、杭列、倒木痕を確認。
- ④ A—1区、最終確認面として灰色シルト層の上面を調査。溝、倒木痕を確認。
- ⑤ A—1区、下層確認のためのトレンチ調査。遺構は確認できないため、A—1区の調査終了。西横手遺跡群の調査終了。

第2章 遺跡の位置・周辺の遺跡・基本層序

第1節 遺跡の位置

西横手遺跡群は、高崎市の中心部から東へ約4.5kmの宿横手町に所在し、利根川右岸の前橋台地上に位置している。標高は約80mである。遺跡の北側を利根川が流れており、比高は約8mである。この利根川は、現在の広瀬川が流れる「広瀬川低地帯」にもとの流路があったが、中世の複数回の洪水が原因で旧河川を奪取するかたちで現位置に変流したとされる。遺跡の南部には水田地帯が広がっている。このなかを江戸初期に開削された滝川（天狗岩用水・代官堀）が北西から南東方向に流れ、周辺の水田を潤している。また、北西には西横手町の集落、西・南東には宿横手町の集落がそれぞれ展開している。

第2節 周辺の遺跡

〔中世・近世〕

近世の遺構として、まず天明三(1783)年の浅間山噴火時の軽石As—A軽石を耕土に含む水田跡が、宿横手三波川遺跡(2)・上滝五反畑遺跡(4)等で確認されている。また、As—A軽石やこの時の泥流を溝や土坑を掘って処理した跡が福島大島遺跡(同町福島団:調査'97・'98/「年報16・17」)や福島曲戸遺跡(同町福島団:調査'98～/「年報18」)、利根川対岸の横手湯田遺跡(24)周辺などで相次いで調査されている。さらに上滝五反畑遺跡や高崎市街の東町IV遺跡(同市東町市:調査'95・報告'96)ではこの軽石を地中に鑿込んで処理した跡も報告されている。一方、天明三年を遡る遺構として、宿横手三波川遺跡などでは洪水で埋没した水田が、また福島曲戸遺跡では洪水の土砂を溝を掘って処理した跡がそれぞれ確認されている。

次に、中世の遺構では各地に城館・居館跡が分布し、代表例として元鳥名城(①)が挙げられる。本遺跡周辺には新居屋敷(③)、中島内出(④)がある他、宿横手三波川遺跡の本遺跡との隣接部では掘立柱建物跡や柱穴群、道路跡も確認されている。また、洪水で埋没した水田跡が宿横手三波川遺跡や横手湯田遺跡、亀屋平塚遺跡(26)などで確認されている。前節でも触れたが、利根川は応永三(1369)年秋の大洪水等が原因で現位置に変流したとされる。見つかった水田跡もこれらの洪水で被災したものであろうか。

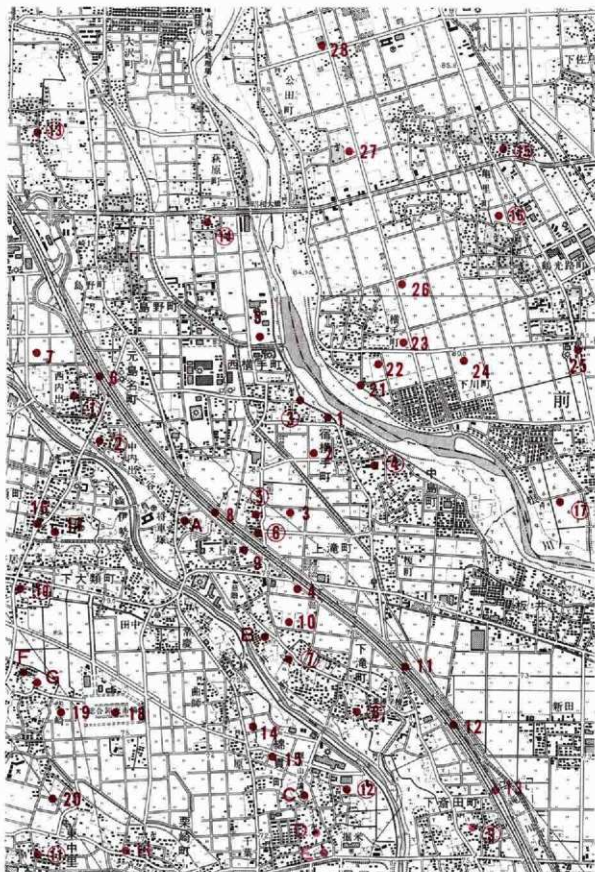
その他、本遺跡内には関東と越後を結ぶ「佐波奉行街道」が通っていた。起源は中世後期に遡るとされる。経路は、南南東から本遺跡に向かう現道から、利根川の堤防上あるいは宿横手三波川遺跡との境を越えて西横手の集落に抜けて北上するラインが推定されている。現在でも経路沿いには道祖神や道標等の石造物が見られる。また、近隣にはこの時代に起源を持つ寺社および寺社跡も多く、本遺跡のすぐ西側には西横手町にあった西福寺跡より移された明徳元(1390)年建立の宝篋印塔がある。(高崎市指定文化財)

〔古代〕

古代の遺構のうち、集落は上滝遺跡(8)で奈良期、綿貫遺跡(15)や下大畑遺跡(18)その他で奈良・平安期のものが確認されている。また、平安末期の天仁元(1108)年の浅間山の噴火で埋没した水田(As—B下水田)が、第3区画内外でも調査事例が相次いでおり、この噴火で「国内の田畠が滅亡」(『右中記』)したとの記録を裏付けている。この水田跡は、いわゆる「条里型水田」である事例が多く、宿横手三波川遺跡や西横手遺跡群I・II(5)でも条里型地割りが推定されている。

〔古墳時代〕

この時代には、烏川・井野川流域に古墳が集中する。前期では元鳥名将軍塚古墳(A)や蟹沢古墳(F)、中期では善賢寺裏古墳(D)、不動山古墳(E)、後期では墓下で最大級の綿貫観音山古墳(C)がそれぞれ



第3図 周辺遺跡位置図

代表的なものとなる。また、方形周溝基も矢中村東遺跡周辺(20)、西横手遺跡群Ⅰ・Ⅱその他で確認されている。集落や住居跡は、前期のものが下斉田滝川A遺跡(13)や綿貫遺跡等で、また後期のものが中大類金井遺跡(17)、下大類遺跡(18)、綿貫遺跡等でそれぞれ確認されている。

一方、水田跡の調査事例も相次いでいる。4世紀初頭?の浅間山の噴火時のAs-C軽石を耕土に含む水田跡や、6世紀初頭と6世紀中葉のそれぞれ榛名山噴火時の泥流や火山灰で埋没した水田跡(Hr-FA下水田・Hr-FP下水田)等があり、本遺跡から南の下滝天水遺跡(10)にかけてや、北の西横手遺跡群Ⅰ・Ⅱや横手湯田遺跡周辺などで確認されている。

(弥生・縄文・その他)

古墳時代を廻る時期の遺構は希薄であるが、元島名遺跡(7)では弥生期、縄文後期の住居が確認されている。また、公田池尻遺跡(27)では弥生期の水田が存在した可能性もある。その他、本遺跡周辺では自然河川や倒木痕などが見つかる事例も多く、水田その他の開発がなされる以前の環境を示唆している。

No	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年次・報告書等
1	西横手遺跡群	高崎市宿横手町	本遺跡	本報告書
2	宿横手三波川遺跡	高崎市宿横手町	(近) 水田・屋敷周濠(中) 水田・竪立柱建物・道路?(古代) As-B下水田(古墳) Hr-FPP・Hr-FAT・その他の各水田	図:調査'96~'98 報告'99・'00
3	上滝榎町北遺跡	高崎市上滝町	(近) 水田(中) 居館(古代) As-B下水田(古墳) Hr-FA下・As-C下の各水田	図:調査'96~ [年報]15~19
4	上滝五反畑遺跡	高崎市上滝町	(近) 水田(中) 溝・土坑(古代) As-B下水田(古墳) Hr-FA下水田	図:調査'97 報告'99
5	西横手遺跡群Ⅰ	高崎市西横手町	(中) 島・備前堀(古代) As-B下水田(古墳) Hr-FPP・Hr-FATの各水田	市:調査'88 報告'89
	同Ⅱ	同 萩原町	(古墳) 前期の方形周溝基・Hr-FA下水田・水路	市:調査'89 報告'90
6	元島名B遺跡	高崎市元島名町	(中) 元島名城の堀・溝	県:調査'76 図:報告'77
7	元島名遺跡	高崎市元島名町	(中) 竪立柱建物跡・井戸(古墳) 前期の竪穴式住居(弥) 竪穴式住居	市:調査'78 報告'79
8	上滝遺跡	高崎市上滝町	(中) 居館周濠(古代) 奈良期の竪穴式住居(古墳) 前期、後期の竪穴式住居	図:調査'75~'78 報告'81
9	上滝日遺跡	高崎市上滝町	(中) 堀切(古墳) Hr-FPP・Hr-FA下の各水田	図:調査'99 [年報]19
10	下滝天水遺跡	高崎市下滝町	(近) 水田・島(中) 竪立柱建物・屋敷周濠?(古代) 奈良期の竪穴式住居・As-B下水田(古墳) Hr-FPP・Hr-FA下の各水田	図:調査'99 [年報]19
11	滝川C遺跡	高崎市上滝町	(古墳) 前期の土坑	県:調査'74 報告'87
12	滝川B遺跡	高崎市上滝町	(古代) As-B下水田?	
13	下斉田滝川A遺跡	高崎市齊田町	(古代) 集落・As-B下水田(古墳) 初期の築基・方形周溝基	
14	綿貫小林前遺跡	高崎市綿貫町	(中世) 居館周濠?(古代) 平安期の集落(古墳) 前期、後期の集落	図:調査'99 [年報]19
15	綿貫遺跡	高崎市綿貫町	(古代) 奈良平安期の竪穴式住居・平安期の瓦葺建物(古墳) 観音山・古墳周濠・前後期の竪穴式住居・方形周溝基	
16	中大類金井遺跡	高崎市中大類町	(古代) 平安期の土坑(古墳) 後期の竪穴式住居	市:調査'88 報告'89
17	中大類金井分遺跡	高崎市中大類町	(古代) 奈良期の竪穴式住居(古墳) 後期の竪穴式住居	市:調査'91 報告'92
18	下大類遺跡	高崎市大類町他	(古代) 竪穴式住居・井戸(古墳) 後期の竪穴式住居	市:調査'78
19	柴崎野前遺跡	高崎市柴崎町	(古代) 平安期の竪穴式住居・As-B下水田(古墳) 自然河川	図:調査'96 報告'98
20	矢中村東遺跡	高崎市矢中町	(古代) As-B下水田(古墳) 前期の前方後方形・円形周溝基	市:調査'83 報告'84
	矢中村東B遺跡	高崎市矢中町	(古代) As-B下水田・水路(古墳) 前期の方形周溝基	市:調査'84 報告'85
	村東C遺跡	高崎市矢中町	(中) 居館周濠(古墳) 方形周溝基	市:調査'86~'87 報告'88
21	横手井戸南遺跡	前橋市横手町	(近) 泥流処理遺構(中) 水田(古代) As-B下水田	図:調査'98~'99 [年報]18
22	横手早稲田遺跡	前橋市横手町	(中) 水田(古代) As-B下水田(古墳) Hr-FA下水田	図:調査'98 [年報]18

第2章 遺跡の位置・周辺の遺跡・基本層序

No	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年次・報告書等		
23	横手宮田遺跡	前橋市横手町	(中) 水田(古代) As-B下水田(古墳) Hr-FA下・その他の各水田	図：調査'96~'98 「年報16~18」		
24	横手湯田遺跡	前橋市横手町	(近) 紀瓦処理遺構・水田(中) 屋敷・水田(古代) 平安期の住居・方形周溝基・As-B下水田(古墳) Hr-FP下・Hr-FA下の各水田	図：調査'98~'98 「年報16~18」		
25	村中遺跡	前橋市船小路町	(中) 屋敷周溝・竪立柱建物跡(古代) As-B下水田(古墳) As-C混土下水田	図：調査'98~'99 「年報18」		
26	亀里平塚遺跡	前橋市亀里町	(中) 水田(古代) As-B下水田(古墳) Hr-FA下水田	図：調査'98~'99 「年報17・18」		
27	公田池尻遺跡	前橋市公田町・上佐島町	(中) 居館(古代) 奈良期の竪穴式住居・As-B下水田(古墳) 前期、後期の竪穴式住居・Hr-FP下、Hr-FA下その他の各水田(弥) 用水路? (彌) 土坑	図：調査'90~'96 「年報9~15」		
28	公田東遺跡	前橋市公田町・上佐島町	(近) 高?・溝(中) 居館周溝・竪・井戸(古代) 平安期の竪穴式住居・竪立柱建物・As-B下水田(古墳) 方形周溝基・Hr-FA下水田 高?	図：調査'95~'96 「年報14・15」		
No	遺跡名	所在地	遺跡の概要			
A	元島名符塚古墳	高崎市元島名町	前方後方墳。周溝は前方部に大きく開く。粘土器内より鏡、石鏡、刀等が出土。周溝より二重口緑帯が出土。市指定史跡。市：調査'80 報告'81。			
B	御伊勢山古墳	高崎市下滝町	前方後円墳。全長30m。横穴式副室型石室。			
C	経賀観音山古墳	高崎市経賀町	前方後円墳。全長97.2m、高さ9.4m。墳丘頂部に埴輪多数を配する。横穴式石室内部から鏡、銅製水瓶、金銅製鈴付大帯その他の武具、馬具、装具等が出土。国重要文化財。国指定史跡。7 調査'67~'68・'76~'79 報告'88~			
D	曹誓寺裏古墳	高崎市経賀町	前方後円墳。全長71m、高さ6.6m。竪穴式石室。葺石。			
E	不動山古墳	高崎市経賀町	前方後円墳。全長91m。墳丘は二段、前方部に造り出し。葺石。			
F	蟹沢古墳	高崎市柴崎町	正始元年陳皇后四神内殿鏡。獸文帯三神三獣鏡。製内行花文鏡2面、その他鉄器等が出土。形平により形状不明。			
G	浅間山古墳	高崎市柴崎町	円墳。径30m、高さ5m。横穴式石室か。鏡、勾玉、大刀等が出土。			
H	飯玉山古墳	高崎市柴崎町	前方後円墳。横穴式石室。刀剣、勾玉、金帯等が出土。			
No	城館跡・居館跡	所在地	年代	築・存続者名	概要	備考
①	元島名城	高崎市元島名町	15C 16C	島名伊豆守 兵井登前守政実	堀・土居・戸口・横小屋・板碑	
②	元島名内出	高崎市元島名町	16C	阿久沢氏	堀・土居・戸口	小塚源遺構
③	新居原敷	高崎市西横手町		新居喜左右衛門		
④	中島内出	高崎市中島町	16C	田口兼祐	堀・土居・板碑	
⑤	江原屋敷	高崎市上滝町	16C末	江原源左右衛門	堀	火雷天若獅子神社
⑥	上滝中原敷	高崎市上滝町		南北朝 堀・胸籠器		
⑦	下滝館	高崎市下滝町	文明九	足利成氏 大井田氏	堀・土居・戸口・井戸・郭郭	近世天田氏居住
⑧	下滝原敷	高崎市下滝町			二重堀	
⑨	下青田城	高崎市下青田町		田口氏	堀・土居・戸口	
⑩	大類寄居	高崎市柴崎町		柴崎地家	堀・土居・戸口	
⑪	東中里城	高崎市東中里町		太田氏		
⑫	堀米屋敷	高崎市経賀町	16C	堀籠大学		
⑬	深沢原敷	高崎市京目町		深沢氏	堀・土居・戸口	長乗寺
⑭	萩原城	高崎市萩原町	16C	萩原地家	堀・土居・戸口	
⑮	宿阿内城	前橋市亀里町	16C	三輪右丹	堀・土居・戸口・櫓台・横小屋	
⑯	前田原敷	前橋市亀里町			二重堀	
	鶴小路亀里	前橋市亀里町			堀・14ヶ所の環濠遺構	
	環濠遺構	前橋市船小路町				
⑰	新堀城	前橋市新堀町	16C	和田正盛	武田氏築城か。利根川氾濫で消滅。	

〔略称〕(近)一近世・(中)一中世・(弥)一弥生・(彌)一縄文

①一群馬県教育委員会・市一高崎市教育委員会・図一(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

〔参考文献〕

- ・『上滝五反畑遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
- ・『群馬県の中世城館』 群馬県教育委員会 1988
- ・『利根川の変遷と民俗』『群馬文化』第257号 井野修二 1999
- ・『滝川村史』 田口輝美 1984
- ・『玉村町の遺跡』 玉村町教育委員会 1992
- ・『歴史の遺跡調査報告第7集 佐渡奉行街道』 群馬県教育委員会 1981

第3節 基本層序の設定

本遺跡には各時代のテフラ層やテフラ混入層、火山性泥流層や洪水層が多く堆積しており、この地域が火山災害や大小の洪水災害を繰り返して受けてきたことが判る。以下にこれらの層を概観するが、堆積状態は堤防を挟んだA区とB・C区とで大きな差がある。さらにA区内の土層の状態は不安定であり、場所により確認できないものも多い。このような土層の状態を第4図に示したが、これは遺構確認の手掛かりとなったものを中心に概念的に示したものである。

1. テフラ層

- ・As—B (A区6層) は天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴うテフラ層である。大部分は暗褐色軽石であるが、底部に灰色火山灰薄層を伴うことで一次堆積層であることが判る。残存状態は悪くB・C区では確認できないが、A区西半では比較的良好である。
- ・Hr—FP (A区9層、B・C区4層) は6世紀中葉の榛名山噴火に伴う降下火山灰層で、灰色を呈している。層厚5mm未満と薄く、上下には炭化物層の可能性もある層厚数mmの黒色土を伴う。
- ・Hr—FA (A区11層) は6世紀初頭の榛名山噴火に伴う降下火山灰層で、黄褐色を呈している。A区のみに残存するが、状態は悪い。B・C区では灰褐色砂質土(B・C区6層)に相当するか。
- ・As—C (B・C区9層) は4世紀初頭?の浅間山の噴火に伴う降下軽石である。本遺跡で確認されたものは層内他の土壌が若干混入しており、二次堆積と考えられる。B・C区の東部のみで残存する。
- ・その他、両区の上部位には天明三(1783)年の浅間山噴火に伴う降下軽石であるAs—Aが堆積していたはずであるが、後世の攪拌により確認できなくなったものと思われる。

2. テフラ混入層

- ・As—B混土(A区5層) はAs—Bを大量に含む暗褐色土である。A区で確認したが、残存していない部分もある。
- ・As—C混土(A区13層、B・C区8層) はAs—Cを含む黒褐色土である。その他小砂粒などの混入はなく、また、直下の暗灰色シルト(A区14層)や黒色粘土(B・C区10層)との境界が不明瞭な部分も多い。このことから、降下したAs—Cが直下の層と人為的に攪拌されて形成されたと思われる。

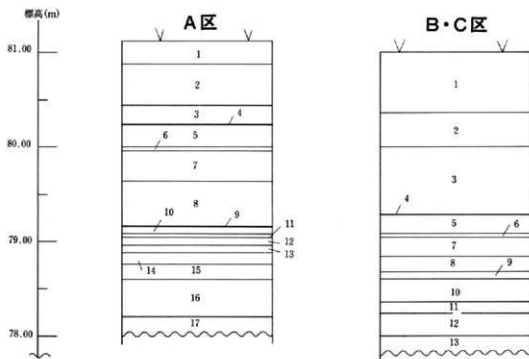
3. 火山性泥流層

- ・Hr—FP泥流(A区8層、B・C区3層) はHr—FPの噴火に伴う火山性泥流層である。灰白～橙色を呈しシルトや砂粒が互層堆積している。堆積は良好である。

4. 洪水層

- ・灰褐色砂(A区2層) から赤褐色砂(A区4層) までの層は中世から近世にかけての複数回の洪水により形成されたものと思われる。その他この部分には洪水層と思われる層が複数残存している。
- ・暗赤褐～橙色砂質土(B・C区2層) 古代から近代にかけての複数回の洪水により形成されたと考えられ、3層に分層できる。
- ・その他、この地域は特に利根川の変流以降、遺構洪水層と思われる層が多い。しかしいずれも具体的な洪水の年代は不明である。

第2章 遺跡の位置・周辺の遺跡・基本層序



第4図 西横手遺跡群基本土層概念図

【A区】

- 1 表土
- 2 灰褐色砂
- 3 灰褐色シルト
- 4 赤褐色砂
- 5 黒褐色土〔As-B混土〕
- 6 As-B
- 7 黒色・灰色粘土
- 8 Hr-FP泥流
- 9 Hr-FP
- 10 明灰色粘土
- 11 Hr-FA
- 12 灰色粘土
- 13 黒色シルト〔As-C混土〕
- 14 暗灰色シルト
- 15 灰色シルト
- 16 暗緑色砂質土
- 17 白色粘土



【B・C区】

- 1 表土
- 2 暗赤褐～橙色砂質土
- 3 Hr-FP泥流
- 4 Hr-FP
- 5 灰色シルト
- 6 灰褐色砂質土
- 7 灰色粘土
- 8 黒色粘土〔As-C混土〕
- 9 As-C (2次堆積)
- 10 黒色粘土
- 11 黒灰色シルト
- 12 灰色シルト
- 13 灰白色シルト



第3章 各時代の調査

第1節 調査概要

本遺跡の調査概要を以下に示す。各調査面や遺構の時代は層序や出土遺物から判断した。遺物は、古墳時代から近世以降までのものが出土している。しかし小破片が多く、特に須恵器や土師器は器種や時期を特定できないものが多い。さらに、土層の堆積が不安定であったり、異なる時代の遺構が大きく重複したりするため他の層から混入した遺物も多い。従って、出土遺物を手掛かりに調査面や遺構の具体的な年代を決定することは殆ど不可能であった。

〔近世以降〕 A区で灰褐色砂（A区2層）を除去し、屋敷跡1軒、土坑20基、墓塚18基、農具痕1カ所、溝9条を確認した。一方B・C区では、古代の調査時に近世以降の溝1条が見つかった。この調査面を「近世面」と呼ぶ。遺物は、陶磁器等が大量に出土しており器種も多岐にわたる。

なお、B区の現堤防下位では残存幅約4mの自然河川と思われる溝が見つかった。遺物も出土せず、安全上の問題もあり具体的な調査は行わなかったが、この溝は中世から近世にかけてのものと思われる。

〔中世〕 A区で赤褐色砂（A区4層）を除去し、As-B混土（A区5層）の上面で井戸2基、土坑11基、墓塚1基、溝25条を確認した。この調査面を「中世面」と呼ぶ。遺物は青磁器、焼締陶器、軟質陶器、板碑などがある。

〔古代〕 A区の西半でAs-B（A区6層）を除去し、水田跡、土坑12基を確認した。次にA区全域で黒色・灰色粘土（A区7層）を除去し、Hr-FP泥流（A区8層）上面で掘立柱建物跡1棟、井戸1基、土坑12基、溝14条を確認した。一方、B・C区では、暗赤褐～橙色砂質土（B・C区2層）内下位の暗赤褐色土を除去し、Hr-FP泥流（B区3層）上面で竪穴式住居2軒、掘立柱建物1棟、土坑5基、溝15条を確認した。しかし、これらA区の2面とB区の1面の時期関係はつかめなかった。そのため調査面の名称はA区の上位面を「古代A-1面」、下面を「古代A-2面」、またB・C区の面を「古代BC面」とした。

遺物は、特に「古代BC面」の遺構から大量の須恵器や土師器の小破片以外に、残存状態の良い灰軸陶器等も出土している。

なお、以上の遺構のなかには埋土にAs-Bの可能性もある暗灰色砂粒を含むものがある。埋土にAs-Bを含む遺構は天仁(1108)年以降の所産であるため、古代末ないしは中世に比定される。本遺跡では、これらの遺構のなかで古代の遺物が出土したものが複数あることから、古代末期の所産として扱う。

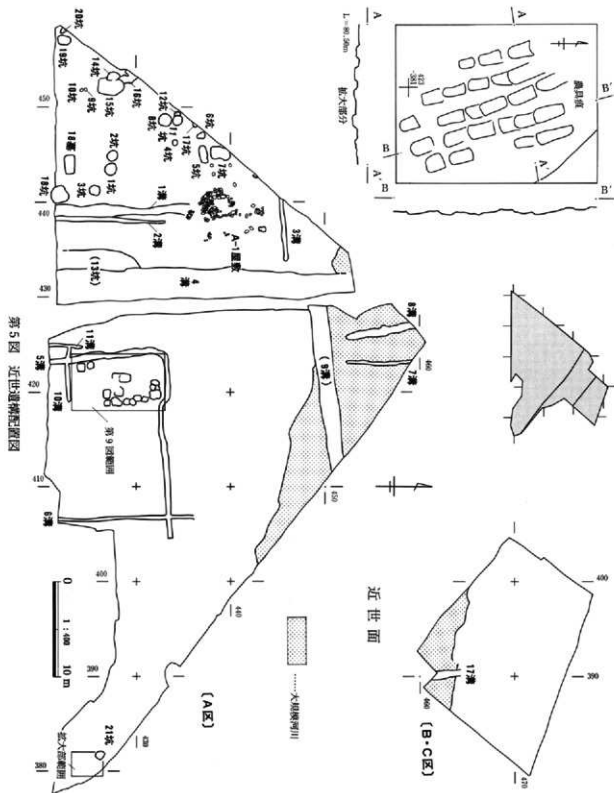
〔古墳時代〕 Hr-FP泥流およびHr-FP（A区9層、B・C区4層）を同時に除去し、全区で水田跡を確認した。この調査面を「古墳時代第1面」と呼ぶ。次にA区でHr-FA（A区11層）を除去し水田跡を確認した。この面を「古墳時代第2面」と呼ぶ。

さらにA区では灰色粘土（A区12層）やその下面の一部に堆積する砂層を除去し、As-C混土（A区13層）の上面で遺構確認を試みた。土層の状態が悪いために注意深く作業を進めた結果、残存度は低いものの水田跡や溝2条を確認した。この面を「古墳時代第3面」と呼ぶ。一方B・C区ではAs-C（B・C区9層）を除去し、畦畔状遺構を確認した。「古墳時代第4面」と呼ぶ。

〔古墳時代以前〕 A区で2面を確認した。上面は、溝1条、杭列2カ所、その他倒木痕1基を確認した。この面を「古墳時代以前第1面」と呼ぶ。下面は、溝2条、土坑1基、その他倒木痕7基を確認した。この面を「古墳時代以前第2面」と呼ぶ。

第2節 近世以降の遺構と遺物

近世の遺構には、屋敷跡1軒、土坑20基、墓墳18基、農具痕1ヶ所、溝9条がある。このうちの土坑3基には内部に埋設された木製桶の一部が残存していた。さらに、これらと平面形状が似るものや、断面から埋設物が存在した可能性が窺えるものが5基見られた。そこで、これらを一括して「桶埋設土坑」と呼び、他



第5図 近世遺構配置図

の土坑と区別して扱った。

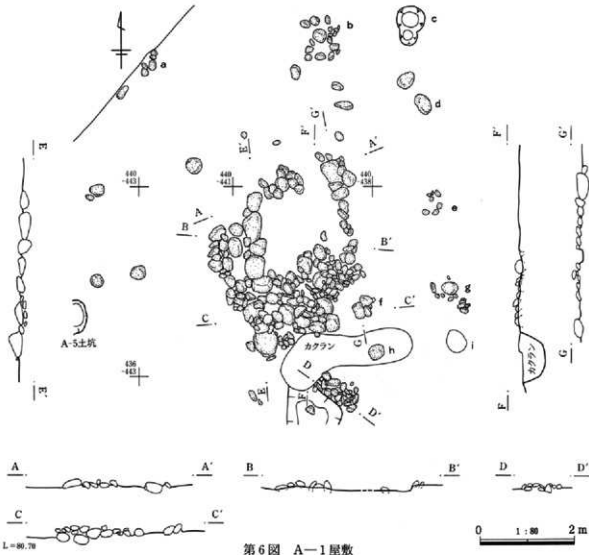
出土遺物は、陶器、磁器、土器等の破片が大量に出土している。その他、鉄製品や石製品も見られる。また、墓壇の副葬品としては銭貨や土人形なども見られる。

1. 遺溝

(1) 屋敷跡(第6・7図、P.L. 2・3)

屋敷跡はA区で1軒を確認した。現民家の直下に位置しており、この場所が宅地として使われてきたことが判る。また溝2条がこの屋敷跡に伴う可能性が高く、ここに記載した。遺物はそれぞれから陶磁器等の破片が多数出土している。

A-1屋敷 A区北西部の435-435・440G~440-345・440G付近に位置する。北西隅が調査区外に懸かるが、おおよそ東西8m以上×南北6.5mの東西棟の屋敷であろう。梁方向はN-12°-Wである。柱の基礎部分と思われる礎や掘り込みは9カ所残存している(a~i)。それぞれの距離は、東西方向ではa-bが3.6m、b-c、f-gおよびh-iが1.8m。南北方向ではc-dが1.2m、d-eが2.0m、e-gが2.0m、f-hおよびg-iが1.2m。その他の部分は確認できないが、約1.8m即ち3尺を「一間」としてこれを単位とする、いわゆる「田舎間(江戸間)」による間取りがなされていた様子が窺える。



第6図 A-1屋敷

第3章 各時代の調査

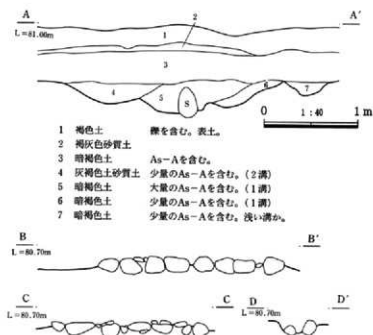
中央部には、大型の礎（ ϕ 4~60cm）を南北4m、東西3.5mの方形に配した石組みが見られる。この石組みの東辺がb-hを結ぶラインに一致することで、この屋敷跡に伴うものであると思われる。具体的な機能は不明であるが、南側にはA-1・2溝が接続することで、この屋敷の「水回り」の基礎部分であり、溝2条は給排水に関わるものと見られる。

なお、このような柱の配列をもつ民家の事例は広く見られ、確認された屋敷跡の殆どが土間に当たる部分と考えられる。b-hのライン以西が「グイドコ（口）」と呼ばれる部分と思われ、さらにこのライン以东に南側に「ウマヤ」を設けることが多いようである。

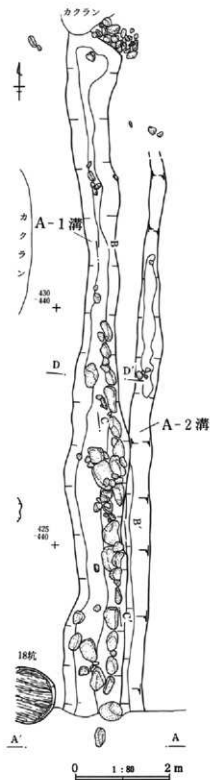
以下に、この屋敷跡に伴うと思われる溝を記す。

A-1溝 A区南端から北西部の420-435G~435-435Gに位置する。直線的に南北走し、走向はN-0°。確認長14.0m、幅58~134cm、深さ12~24cmで、断面は皿状。中央部以南の底部に石列が設けられている。A-2溝と隣接、これより古い。

A-2溝 A区南端から北西部の420-435G~430-435Gに位置する。直線的に南北走し、走向はN-0°。確認長11.7m、幅30~56cm、深さ11cmで、断面は皿状。A-1溝と隣接、これより新しい。



第7図 A-1・2溝



(2) 土坑(第8・13図、P.L. 3・4)

土坑はA区で12基を確認した。このうち、A-5・6・7・17土坑の埋土は、直径5cm程度の礫を大量に含む灰褐色砂質土であり、近世以降の洪水の砂礫を埋めたものか。その他の土坑の機能は不明である。

A-5土坑 A区西端の435-440・445Gに位置する。長径1.8m、短径0.66m、深さ18cmの長方形で、長径方位はN-80°-E。断面は箱形。

A-6土坑 A区西端の435-445Gに位置する。長径0.9m、短径0.5m、深さ9cmの不正形で、長径方位はN-29°-E。断面は浅く、底面に凹凸。埋土は黄褐色砂質土。径5cm程度の礫を大量に含む。

A-7土坑 A区西端の435-440・445Gに位置する。一部調査区外に懸かり、長径2.0m、短径1.16mの隅丸長方形か。実際の深さは約60cm。長径方位はN-0°。断面は箱形。土鍋の破片が出土。

A-9土坑 A区南西部の420-450Gに位置する。径0.27m、深さ8cmの円形である。断面は底面と壁面が連続する摺り鉢状。

A-10土坑 A区南西部の420-450Gに位置する。径0.28m、深さ14cmの円形である。断面は底面と壁面が連続する摺り鉢状。

A-12土坑 A区西端の430-445Gに位置する。径0.68m、深さ16cmの円形か。断面は摺り鉢状。A-11土坑と重複、これより新しい。

A-14土坑 A区南西端の425-450Gに位置する。長径1.3m、短径0.98m、深さ34cmの不正形で、長径方位はN-13°-W。断面は箱形。A-15・16土坑と重複、前者より古い。陶磁器の破片が出土。

A-15土坑 A区南西部の425-450Gに位置する。長径2.7m、短径1.7m、深さ30cmの不正形で、長径方位はN-0°。断面は皿状。A-14・16土坑と重複、前者より古い。砥石などの石製品、その他、陶磁器や木製椀の破片が出土。

A-16土坑 A区南西端の425・430-450Gに位置する。調査区外に懸かり、長径1.48m、短径0.6m、深さ14cmの不正形か。長径方位はN-31°-W。断面は浅い皿状。A-14・15土坑と重複、新旧関係は不明。焙烙やキセルの破片、その他陶磁器等の小破片が出土。

A-17土坑 A区西端の435-445Gに位置する。調査区外に掛かり、実際の深さ約57cmの方形か。断面は逆台形。

A-19土坑 A区南西端の420-455Gに位置する。長径1.30m、短径0.9m、深さ30cmの隅丸長方形で、長径方位はN-0°。断面は箱形。劣化したビニールと思われるものが含まれており、近代以降のものか。

A-20土坑 A区南西端の420-455Gに位置する。調査区外に掛り、長径1.30m、短径0.9m、深さ12cmの長楕円形か。

(3) 墓壇(第9・12図、P.L. 4・6)

墓壇は18基を確認した。A区中央部やや南には17基がまとまる。現墓地の直下であり、この場所が近世から墓地として利用されてきたことが判る。遺物は骨蔵器、副葬品としての陶磁器類や土製玩具、いわゆる「六道銭」等が出土した。

A-1墓壇 A区南部の425-415Gに位置する。A-8墓壇と重複、一辺0.5m、深さ32cmの方形か。断面は箱形。A-8墓壇との新旧関係は不明。

A-2墓壇 A区南部の425-415Gに位置する。長径0.76m、短径0.68m、深さ64cmの隅丸長方形で、長径方位はN-48°-W。断面は箱形。A-3墓壇と重複、新旧関係は不明。底面に木製箱の一部が残存。一辺約

第3章 各時代の調査

40cm、高さ30～50cmで、底板は不明。寛永通宝が出土。

A-3墓墳 A区南部の425-415Gに位置する。長径0.76m、短径0.74m、深さ30cmの隅丸方形で、長径方位はN-46°-W。断面は箱形。A-2・6墓墳と重複、新旧関係は不明。磁器香炉、寛永通宝が出土。

A-4墓墳 A区南部の430-420Gに位置する。長径1.04m、短径0.52m、深さ72cmの隅丸方形で、長径方位はN-25°-E。断面は箱形。A-5・12・13墓墳と重複、新旧関係は不明。底部に木製箱の一部が残存。一辺40cm、高さ30～50cmで、底板は破損。寛永通宝、キセルの破片が出土。

A-5墓墳 A区南部の430-420Gに位置する。長径0.79m、短径0.56m、深さ30cmの楕円形で、長径方位はN-46°-W。断面は箱形。A-2・6墓墳と重複、新旧関係は不明。骨臓器、寛永通宝が出土。骨臓器内には人骨が残存。

A-6墓墳 A区南部の425・430-415Gに位置する。長径0.8m、短径0.76m、深さ56cmの隅丸方形で、長径方位はN-37°-W。断面は箱形。A-3墓墳と重複、新旧関係は不明。底面に一辺50cm、高さ40～50cmの木製枠が残存。銭貨、キセルの破片、金属製品等が出土。

A-7墓墳 A区南部の430-415Gに位置する。長径0.64m、短径0.52m、深さ8cmの長方形で、長径方位はN-13°-W。断面は箱形。土製玩具が出土。

A-8墓墳 A区南部の425-415Gに位置する。長径0.92m、短径0.84m、深さ32cmの長方形で、長径方位はN-5°-E。断面は箱形。A-1墓墳と重複、新旧関係は不明。底面に木製箱の一部が残存。一辺40cmで、底板は不明。

A-9墓墳 A区南部の425-415Gに位置する。長径0.64m、短径0.6m、深さ72cmの方形で、長径方位はN-5°-E。断面は箱形。底面に木製箱の一部が残存。一辺40cm、高さ40～50cmである。寛永通宝、文久通宝が出土。

A-10墓墳 A区南部の425-415・420Gに位置する。長径0.96m、短径0.68m、深さ24cmの隅丸長方形で、長径方位はN-6°-E。断面は箱形。底面に木片が残存。木製箱の残骸が。寛永通宝が出土。

A-11墓墳 A区南部の425-415・420Gに位置する。長径0.92m、短径0.90m、深さ52cmの隅丸方形で、長径方位はN-88°-W。断面は箱形。底面に一辺40cm、高さ20cmの木製箱の一部が残存。底板は不明。陶器碗、キセル、その他陶器の破片が出土。

A-12墓墳 A区南部の430-415・420Gに位置する。長径0.92m、短径0.44m、深さ76cmの楕円形で、長径方位はN-84°-W。断面は箱形。A-4・5・13墓墳と重複、新旧関係は不明。磁器碗、寛永通宝が出土。

A-13墓墳 A区南部の430-415・420Gに位置する。長径1.2m、短径0.96m、深さ50cmの楕円形で、長径方位はN-6°-E。断面は箱形。A-4・5・12墓墳と重複、新旧関係は不明。

A-14墓墳 A区南部の420-420Gに位置する。長径0.92m、短径0.80m、深さ56cmの長方形で、長径方位はN-3°-W。断面は箱形。底面に木製箱が残存。一辺40cm、高さ50cmである。

A-15墓墳 A区南部の420・425-420Gに位置する。長径0.76m、短径0.72m、深さ56cmの方形で、長径方位はN-80°-E。断面は箱形。底面に木製箱が残存。一辺40cm、30～60cmである。

A-16墓墳 A区南部の425-420Gに位置する。長径1.16m、短径0.84m、深さ20cmの長方形で、長径方位はN-6°-E。断面は箱形。A-17墓墳と重複、新旧関係は不明。銭貨が出土。

A-17墓墳 A区南部の425-420Gに位置する。長径0.84m、短径0.48m、深さ12cmの長方形で、長径方位はN-5°-W。断面は逆台形。A-16墓墳と重複、新旧関係は不明。磁器碗の破片が出土。

A-18墓墳 A区西部の420-440Gに位置する。長径1.88m、短径0.98m、深さ18cmの長方形で、長径方

位はN-85°-E。断面は箱形。中央部に木製箱と思われる痕跡が残存。長辺1.4m、短辺0.7m、高さ10cmである詳細不明。角釘多数、その他陶器等の破片が出土。

(4) 桶埋設土坑(第13・14図、P.L. 7・8)

A-8・1・18土坑はいずれも底部に木製桶の一部や、桶が壊れたと思われる木片が残存出土している。またA-1・2土坑はこれらと平面形状が類似、さらにA-3・4・21土坑は断面観察から内部に埋設物が存在した可能性が窺えたため、ここにまとめて記した。これらの機能については、墓塚、トイレ、「肥桶」等の可能性が考えられるが、特定はできなかった。また屋敷跡や墓塚など他の遺構との位置的な関連も見出せなかった。

A-8土坑 A区西端の430-445Gに位置する。長径1.34m、短径1.28m、深さ51cmの不正円形で、長径方位はN-0°。断面は箱形。底面に大量の木片が残存。

A-11土坑 A区西端の430-445Gに位置する。長径1.10m、短径1.10m、深さ57cmの円形で、長径方位はN-30°-W。断面は箱形。底面に木製桶の底部が残存。直径90cm。A-12坑と重複、これより古い。陶器碗や磁器皿の破片、銭貨等が出土。

A-18土坑 A区南西部の425-440Gに位置する。長径1.20m、短径1.16m、深さ58cmの円形で、長径方位はN-44°-W。断面は箱形。底面には木製桶の底板8枚が残存。直径100cm。陶磁器の破片が出土。

A-1土坑 A区南西部の425-440Gに位置する。長径1.36m、短径1.20m、深さ16cmの不正円形で、長径方位はN-44°-W。断面は箱形。焙烙、その他陶磁器の破片が出土。

A-2土坑 A区南西部の425-440・445Gに位置する。長径1.15m、短径1.00m、深さ12cmの不正円形で、長径方位はN-45°-W。断面は箱形。陶磁器の破片が出土。

A-3土坑 A区南西部の425-440Gに位置する。長径0.8m、短径0.68m、深さ31cmの不正円形で、長径方位はN-68°-W。断面は攢り鉢形で、埋土から埋設物が存在した可能性が窺える。磁・陶器碗、磁器皿、陶器蓋、急須、焙烙等の破片が出土。

A-4土坑 A区西部の430-445Gに位置する。長径0.68m、短径0.66m、深さ18cmの不正円形で、長径方位はN-0°。断面は攢り鉢形。内部に皿形ないしは円筒形を粘土でつくる。土製玩具が出土。

A-21土坑 A区南東端の425-380Gに位置する。長径0.96m、短径0.85m、深さ26cmの不正円形で、長径方位はN-40°-E。断面は箱形で、埋土から埋設物が存在した可能性が窺える。陶器碗、土器等の破片が出土。

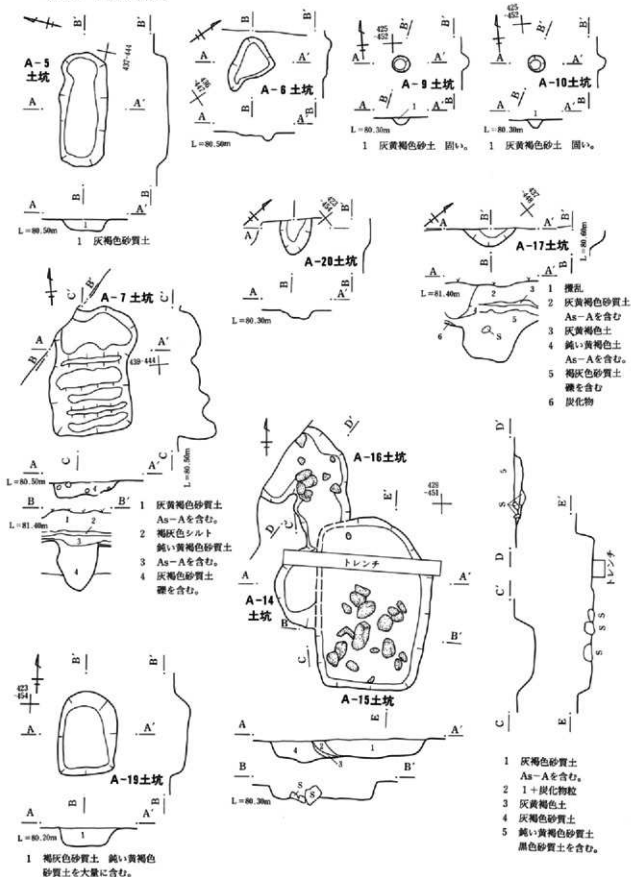
(5) 農具痕(第5図拡大部、P.L. 8)

A区東端部の420-375・380Gで確認した。天明三(1783)年に降下したAs-Aを働込んでおり、それ以降の作業によるものであることが判る。刃幅約20cmの長方形の痕跡が約5~20cm間隔で5列平行しており、走向は約N-20°-W。それぞれの農具痕の底面は斜方向に緩やかに傾斜している。

これらの状態は、長方形の刃先を持つ農具が、地面に対し傾けて突き込まれたか、突き込んだ後左右に返されたかした状態を示唆している。使用された農具は、大型で深耕用の「エンガ(柄鎌)」が想定できる。

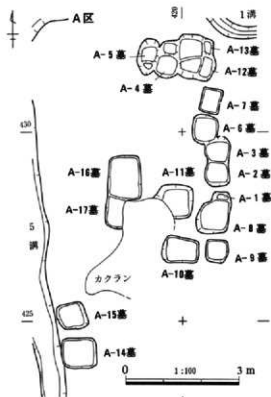
なお、農具を使用した地表面はより上位に存在したことになるが、この部分で水田跡は確認されておらず、どのような目的で作業が行われたのかは不明である。

第3章 各時代の調査

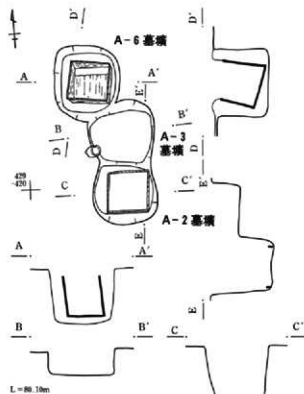
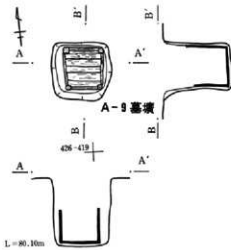
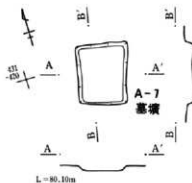
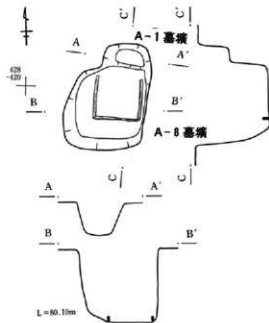


第8図 「近世面」土坑

第2節 近世以降の遺構と遺物



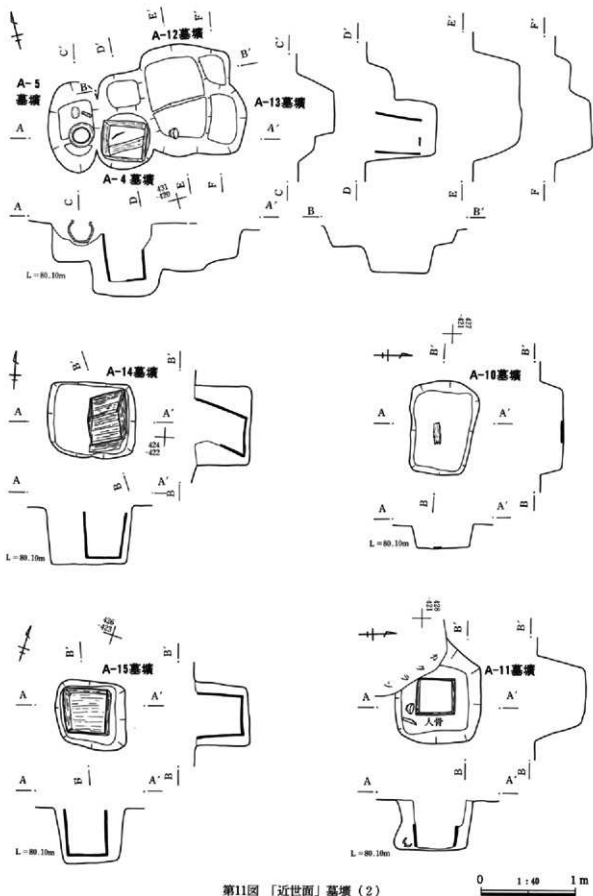
第9図 「近世面」墓墳群配置図



第10図 「近世面」墓墳(1)

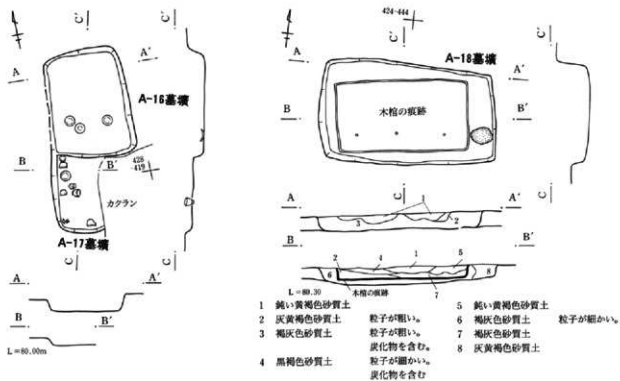
0 1:40 1m

第3章 各時代の調査

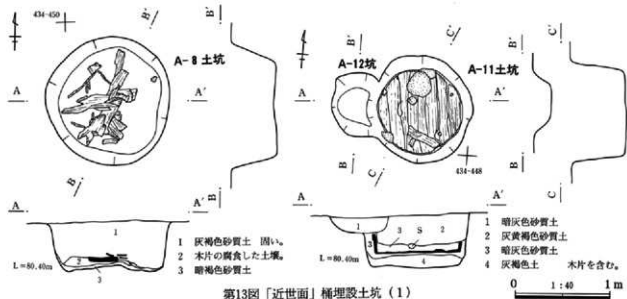


第11図 「近世面」墓墳 (2)

第2節 近世以降の遺構と遺物

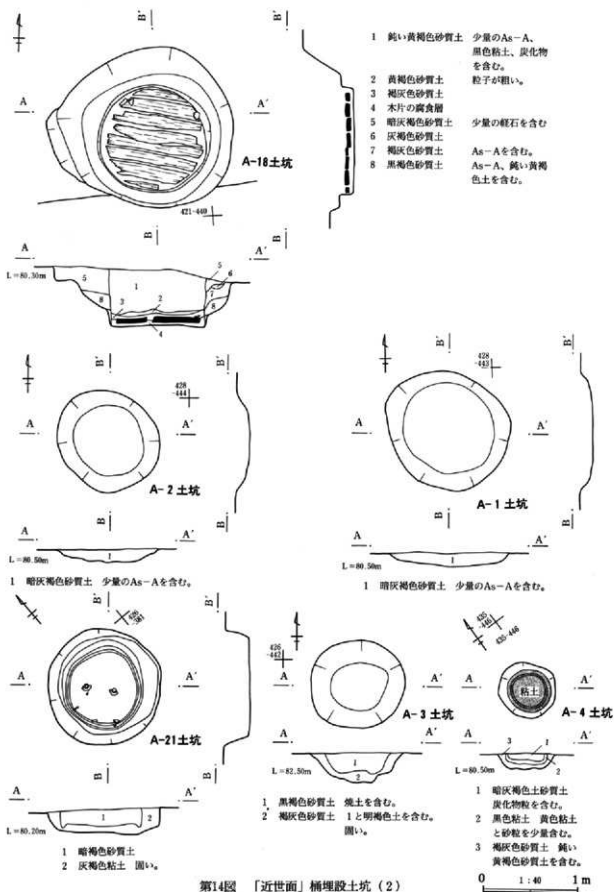


第12図「近世面」墓墳(3)



第13図「近世面」桶埋設土坑(1)

第3章 各時代の調査



第14図 「近世面」桶埋設土坑(2)

(6) 溝(第15図・付図1、P.L. 8)

A-1 屋敷に伴う溝以外の溝はA区で8条、B・C区で1条、計9条を確認した。殆どの溝が東西走、南北走している。A-4溝は現用水路の西側に併走しており、規模から判断しても、用水路であった可能性が高い。また、A-5溝はA区東半の墓域群を囲むように走向を変えているため、墓域を規定する役割を持っていた可能性が高い。遺物は陶磁器等の破片が出土している。

A-3溝 A区北西部の445-430G~445-440Gに位置する。直線的に東西走し、走向はN-86°-E。確認長6.5m、幅40~54cm、深さ10~12cmで、断面は皿状。

A-4溝 A区南端から北端の420-430G~450-430Gに位置する。直線的に南北走し、走向はN-0°。確認長31m、幅200~360cm、深さ132~139cmで、断面は逆台形。磁・陶器碗、焼締陶器攪り鉢等の破片が出土。

A-5溝 A区南部から中央部の420-420G~430-400Gに位置する。走向はN-6°-W、433-425G付近でN-87°-E。確認長31.8m、幅48~84cm、深さ8~26cmで、断面は逆台形。南端でA-10溝、東端でA-6溝と交差、新旧関係は不明。土器風炉の破片が出土。

A-6溝 A区南端から東部の420-405G~435-405Gに位置する。走向はN-0°。確認長14.5m、幅21~38cm、深さ2~10cmで、断面は逆台形。北部でA-5溝と交差、新旧関係は不明。

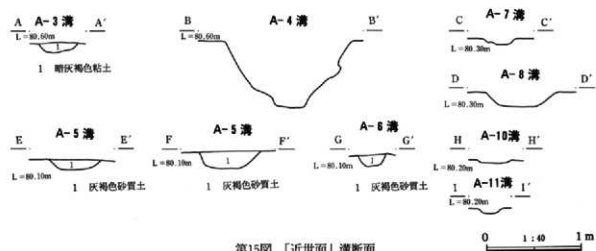
A-7溝 A区北部の450-420G~455-420Gに位置する。走向はN-0°。確認長6.8m、幅22~40cm、深さ3~7cmで、断面は浅い逆台形。

A-8溝 A区北部の450-425G~455-425Gに位置する。走向はN-10°-W。確認長7.2m、幅72~108cm、深さ10~20cmで、断面は浅い逆台形。寛永通宝が出土。

A-10溝 A区南部の420-415G~420-420Gに位置する。走向はN-90°。確認長5.9m、幅25~42cm、深さ2~3cm、断面は浅い皿状。A-5溝と交差、関係は不明。

A-11溝 A区南部の420-420G~420-425Gに位置する。走向はN-5°-E。確認長3.6m、幅24~38cm、深さ3~6cmで、断面は深い皿状。A-10溝とT字状に交差、新旧関係は不明。

BC-17溝 B区南端の460-385G~460-390Gに位置する。直線的に南北走し、走向はN-13°-W。確認長3.0m、幅50~80cm、深さ3~7cmで、断面は逆台形。



第15図 「近世面」溝断面

第3章 各時代の調査

2. 遺物

この時代の遺物としては、陶磁器、土器等の破片が大量に出土している。器種も碗、皿、鉢、摺り鉢その他多岐にわたっている。墓塚からは副葬品として、いわゆる「六道銭」や土製玩具、また棺槨のものと思われる角釘も見られる。

(1) 「近世面」屋敷跡出土遺物

①A-1 屋敷出土(第16図、P.L. 36)

1は陶器徳利の下部から底部片である。底8.2cm。外面に船軸施軸後、下部から高台内の軸を拭き取る。瀬戸・美濃系。18C。

②A-1 溝出土遺物(第16～17図、P.L. 36～38)

1～11は碗である。このうち、1～3は磁器碗で、口縁部から底部片。肥前系。1は1/2残存で、口11.0cm、底4.4cm、高6.0cm。山水文。高台内は一重圓線内に「大明年製」銘。17C末～18C初。2は口(10.0)cm、底(4.0)cm、高5.7cm。外面は型紙刷り後濃み。高台内に不明銘が一部残存。18C前。3は1/2残存で、口(10.4)cm、底3.7cm、高5.8cm。梅枝折文。高台内に圓線。波佐見系。18C前～中。

また、4～11は陶器碗。4は口縁部から底部片。1/2残存で、口(9.2)cm、底4.0cm、高4.9cm。高台脇以下を除き、細かい嵌入の入る灰軸。制作地不詳。18C。5・6は口縁部から下部部片。5は仏飯具か。口(6.8)cm。残存部すべてに嵌入の入る灰軸。瀬戸・美濃系。江戸時代。6は口(10.2)cm。文様はないが京焼き風であろう。肥前系か。17～18C。7は体部片。船軸。高台脇に鉄化粧。瀬戸・美濃系。江戸時代。8～11は底部片。8は小碗で、底3.2cm。器形は「天目形」ではないが、内面から高台内脇に天目軸。瀬戸・美濃系。9は底4.4cm。陶胎染付。簡略化した樓閣山水文。肥前系。18C中～後。10は底4.4cm。「こまごこ器手碗」。肥前系。17C後～18C初。11は底(8.0)cm。内面から高台脇船軸。鉢の可能性もある。瀬戸・美濃系。江戸時代。

12は磁器皿の口縁部から底部片である。1/3残存で、口(13.0)cm、底4.8cm、高(3.5)cm。青錆軸。肥前系、内野諸窯。17C後～18C前。

13は陶器灯明皿の口縁部から体部片である。口(11.0)cm。内面から口縁部外面に鉄泥。烙器質。瀬戸・美濃系。江戸時代。14・15は磁器瓶類である。14は瓶の頸部から底部片。1/2残存で、底5.0cm。形押し文。その後、染付。肥前系。17～18C。15は徳利の体部から底部片。1/3残存で、底5.0cm。一重網目文。肥前系。17C。

16～21は鉢・摺り鉢類である。このうち16～18は陶器鉢。16は片口鉢の口縁部から体部片か。口(16.0)cm。体部はやや丸みを有し、口縁部外面に凹線。内面から高台脇は灰軸。瀬戸・美濃系。18C前～中。17は体部片。外面鉄泥。内面は轆轤目が目立つ。壺か壺の可能性もある。製作地不明。江戸時代以降。18は底部片。底(9.5)cm内面から高台脇に透明軸。内面に刷毛による白土掛け。内底は蛇ノ目軸刺ぎ。制作地不詳。江戸時代。

また、19～21は焼締陶器摺り鉢。19は完形で、口24cm、底10.0cm、高9.8cm。錆軸。外面腰部以下は軸を拭き取る。瀬戸・美濃系。18C。20は体部片。摺目は7本で1単位。丹波系。江戸時代。21は底部片。内外面に錆軸。外面は軸を拭き取る。内面は使用により摩滅。瀬戸・美濃系。江戸時代。

22・23は土器焙烙である。在地系。江戸時代。22は耳部付近か。内外面の調整がやや雑で凹凸がある。23は耳部片で、底(26.0)cm。耳は底に貼り付ける。

24～26は器種不明土器である。在地系。江戸時代以降。24は十能の一部か。口縁部は厚みが異なり湾曲。体部下端は寛ケズリ。25は筒型火鉢や風炉の口縁部片か。口(25.0)cm。口縁端部に煤付着。26はいわゆる「火

貰い」の天井部と体部片か。径(22.0)cm。天井部内面に穴を塞いだと思われる接合痕、体部に空気穴が残存。外面に「枚」字の釘書き。

27は椀瓦の破片である。厚1.6cm。真空土練器の使用はない。時期不詳。

28は砥石である。短4.6cm、厚2.6cm、重194g。調整は丸盤を使用。流紋岩。18C以降の可能性高い。

③A-2 溝出土遺物(第18図、P L. 38)

1～4は碗である。このうち1・2は磁器碗で、口縁部から底部片。1は1/3残存で、口10.0cm、底4.0cm、高5.6cm。梅折枝文。高台内に不明銘。肥前、波佐見系。18C中～後。2は小碗。1/4残存で、口(6.7)cm、底3.2cm、高3.3cm。白磁。器壁は薄い。肥前系か。

また、3・4は陶器碗。瀬戸・美濃系。3は体部から底部片。底5.6cm。内面から高台部に胎軸、上部部に藁灰軸。「尾呂茶碗」。18C前。4は底部片。底5.3cm。内面から高台部に胎軸。内底一部に藁灰軸か。「尾呂碗」か。18C後。

5・6は磁器皿である。肥前系。5は口縁部から体部片。口(13.0)cm。器高は低い。内面に梅文。18C中～後。6は底部片。底(10.1)cm。体部は屈曲して立ち上がる。内面に唐草文。素地はガラス質。

7は磁器仏飯器の体部から脚部片である。底4.0cm。脚下半無軸。焼成不良。肥前系。18C。

8は陶器香炉の下部から底部片である。底(11.0)cm。体部外面に灰軸。凹線状の段差。瀬戸・美濃系。18C。

9～11は土器類である。在地系。9は乗燭。完形で口4.2cm、底2.8cm、高2.0cm。芯受け部にスス付着。10は火鉢の下部から底部片か。底(25.0)cm。脚1ヶ所欠損。三脚であろう。時期不詳。11は焜炉の「アミ」の破片。厚2.5cmと厚い。穴2ヶ所残存。時期不詳。

(2)「近世面」土坑出土遺物

①A-7 土坑出土遺物(第18図、P L. 39)

1は土器鍋の口縁部から下部体部片である。口(34.0)cm。器形は鉢形。胎土は中央から黒灰色・灰白色・黒色。在地系。明治時代以降。

②A-15 土坑出土遺物(第18～19図、P L. 39～40)

1～4は石製品である。1・2は砥石。1は厚1.5～2.0cm。流紋岩。2はほぼ完形で、長15.2cm、短5.2cm、厚1.3cm、重262g。粘板岩。3は石臼の上臼。径31.0～33.5cm、厚13.5cm、残存部重1670g。挽き手穴は一部欠損。粗粒輝石安山岩。4は用途不明石製品。短18.5cm、厚9cm、残存部重4460g。完形は「口」字状になるか。粗粒輝石安山岩。

その他、漆塗りの木製椀が出土したが、残存状態が極めて悪く実測や観察は不可能。

③A-16 土坑出土遺物(第19図、P L. 40)

1・2は土器焙烙である。在地系。1は口縁部から底部片。口(31.2)cm。器高は低く丸底。取手は口縁部と平行する。明治時代以降。2は底部片。器壁はやや厚く丸底。内面はミガキ。補修穴3カ所残存。江戸時代か。

3は用途不明金属製品。キセル片か。径0.65～0.75cm。

(3)「近世面」墓塚出土遺物

①A-2 墓塚出土遺物(第20図、P L. 40・41)

第3章 各時代の調査

1～15は寛永通宝である。1～6、7～15はそれぞれ積み重なって出土した。

②A-3 墓塚出土遺物(第20・21図、P L、42・43)

1は磁器香炉である。完形で、口11.5cm、底5.0cm、高7.1cm。青磁釉に細かい嵌入。輪高台。文様を施す三足を貼り付ける。肥前系。17C後～18C前。

2～15は寛永通宝である。4～15は積み重なって出土した。

③A-4 墓塚出土遺物(第21図、P L、43)

1～3は寛永通宝である。

4・5はキセルである。「羅字」片が残存する。4は雁首。長4.7cm、火皿の径1.2cm、胴1.1cm、重10.3g。断面は六角形。5は吸口。長9.5cm、径1.0cm、重12.1g。

④A-5 墓塚出土遺物(第21・22図、P L、44・46)

1・2は土器骨壺である。完形で、内部に人骨が残存。在地系。江戸時代。1は蓋。径24.0cm、高4.2cm。形状は「火酒壺」と同じ。2は身部。口20.2cm、底18.5cm、高20.3cm。体部に突起状の取手2カ所を貼り付ける。

3～20は寛永通宝である。3・4、5～8、9～20はそれぞれ積み重なって出土した。

⑤A-6 墓塚出土遺物(第22図、P L、46・47)

1・2は一銭である。

3はキセルの吸い口である。長7.3cm、径1.1cm、重13.5g。「羅字」片が残存する。

4は用途不明金属製品である。留め具か。長1.8cm、短1.7cm、厚0.3cm、1.6g。

⑥A-7 墓塚出土遺物(第23図、P L、47)

1～8は土製玩具である。完形ないしはほぼ完形であり、いずれも型作りであろう。いわゆる「今戸焼」。

1～4は「内裏雛」である。1～3は正面、背面の両面を造る。4は正面のみであり、「泥面子」といわれるものか。1は高3.6cm、幅2.9cm、厚1.9cm。2は高3.8cm、幅3.2cm、厚1.4cm。3は高3.2cm、幅2.9cm、厚1.5cm。4は、高3.4cm、幅3.2cm、厚0.7cm。5は「お多福」である。高3.5cm、幅2.9cm、厚0.9cm。6は「招き猫」である。高3.4cm、幅2.4cm、厚1.9cm。7は「福良雀」の土笛である。高3.7cm、幅3.1cm、厚1.4cm。8は「亀」である。高3.9cm、幅2.6cm、厚0.6cm。

⑦A-9 墓塚出土遺物(第24図、P L、48)

1～4は寛永通宝、5～6は文久通宝である。

⑧A-10 墓塚出土遺物(第24図、P L、48)

1～2は寛永通宝である。3～4は銭貨で銭種不明。

⑨A-11 墓塚出土遺物(第24図、P L、48)

1は磁器小碗の体部から底部片である。底3.0cm。外面に染付、オリブ灰色釉。内面に透明釉。製作地不明。19C以降。

2・3はキセルである。2は雁首。長5.0cm、火皿の径0.9cm、胴1.1cm、重10.9g。表面に紙片が付着。3は吸口片。径1.1cm。表面に繊維が付着。いずれも「羅字」片が残存。

⑩A-12 墓塚出土遺物(第24図、P L、49)

1は磁器碗である。完形で、口9.4cm、底3.4cm、高5.9cm。器壁は厚い。高台内に不明銘。肥前。波佐見系。18C中～後。

2～10は寛永通宝である。3～10は積み重なって出土した。

①A-16墓墳出土遺物(第25図、P L. 50・51)

1は磁器皿である。完形で、口12.4cm、底4.8cm、高3.8cm。青磁釉。蛇の目軸刺ぎ。17C後～18C前。肥前系。

2～17は寛永通宝。16～17は重なって出土した。

②A-17墓墳出土遺物(第25図、P L. 51)

1・2は磁器碗である。ほぼ完形。肥前系。1は口9.8cm、底4.3cm、高5.8cm。内底に菊花の染付。口縁部内部に染付線1条。17C中～18C前。2は口8.6cm、底3.8cm、高5.5cm。白磁。17C後。

③A-19墓墳出土遺物(第25・27図、P L. 52)

1～61は鉄製角釘である。1～2は完形。1は長8.8cm、径0.4cm、重7.2g。2は屈曲するが、長8.5cm、径0.45cm、重6.8g。その他、3～17は頭部、18～44は胴部、45～61は先端部の破片か。全体的に錆のために残存は悪い。多くは棺桶の残骸と思われる木片を貫いており分離不能。

(4)「近世面」桶埋設土坑出土遺物

①A-11土坑出土遺物(第27図、P L. 52)

1は陶器碗の口縁部から下部部片である。1/4残存。底(4.0)cm。外面一部に白土掛け。肥前系。17Cか。

2は磁器皿の口縁部から底部片である。1/3残存で、口9.3cm、底5.4cm、高2.4cm。内面に松樹文。肥前系。18C。

3は寛永通宝である。4～5は鉄製角釘か。それぞれ径0.4cm前後。

②A-18土坑出土遺物(第27図、P L. 53)

1・2は陶器碗である。1は口縁部から体部片。口(10.1)cm。口縁部から内面に灰釉、他は鉄釉。「腰筋碗」。瀬戸・美濃系。18C中～後。2は底部片。底4.0cm。内面から高台脇に灰釉。内底に目跡3カ所残存。皿の可能性もある。製作地不明。江戸時代。

③A-1土坑出土遺物(第27図、P L. 53)

1は土器焙烙の口縁部から底部片である。口縁部は丸みを持つ。丸底。在地系。19C以降。

④A-4土坑出土遺物(第27図、P L. 53)

1は土製玩具の「碁石」であろう。ほぼ完形で、径2.0cm、厚0.6cm。

⑤A-21土坑出土遺物(第27図、P L. 53)

1・2は陶器碗である。1は口縁部から体部片。口(9.0)cm。口縁部外面に鉄銹。透明釉。製作地不明。江戸時代。2は底部片。底2.3cm。陶胎染付。肥前系。18C中～後。

3は土器皿である。ほぼ完形で口9.7cm、底5.8cm、高2.6cm。底部外面は左回転糸切り無調整。内底部周縁は凹む。在地系。江戸時代。

⑥A-3土坑出土遺物(第27・28図、P L. 53・54)

1～3は碗である。

1は磁器「湯飲み」の口縁部から体部片か。口6.6cm。肥前系。19C中か。

2・3は陶器。2は口縁部から底部片。3/4残存で、口9.0cm、底4.2cm、高5.0cm。3は小碗の口縁部から体部片。口(9.0)cm。内面から高台脇に黄色釉。内面に目跡一カ所残存。胎土は水漉されている。製作地、時期不明。

4は磁器皿の口縁部から底部片である。3/4残存で、口13.0cm、底8.3cm、高3.8cm。焼き継ぎ。外底に朱の

第3章 各時代の調査

「キ」文字。蛇の目凹型高台。肥前系。18C後。

5・6は陶器蓋である。5は1/4残存で、口(9.2)cm、高(3.6)cm。天井外面は白土で施文後、透明釉。益子・笠間系か。19C中以降。6は土瓶の蓋であろう。完形で径7.6cm、高2.1cm。外面に灰釉。口縁部外面に一部白化粧し、具須絵を施す。益子・笠間系。明治以降。

7・9は焼締陶器急須で、同一個体の可能性がある。「萬古焼」か。製作地不明。19C中以降。7は取手部。8・9は体部片で、8に「○○易」、9に「萬古不易」の押印。10・11は土器焙烙の口縁部から底部片である。型作り後、轆轤成形。口縁部は丸みを持つ。丸底。在地系。19C以降。10は口(31.8)cm。

(5)「近世面」溝出土遺物

①A-4 溝出土遺物(第28図、P L、54)

1～2は碗である。1は磁器「湯飲み」の口縁部から底部片。1/8残存。口(7.0)cm、底(4.0)cm、高5.5cm。口縁部内面に雷文帯。外面は簡略化した龍文か。肥前系。19C中。2は陶器小碗の口縁部から底部片。2/3残存で、口(6.4)cm、底3.2cm、高3.2cm。内面高台筋に灰釉。瀬戸・美濃系。19C前～中か。

3は磁器壺の口縁部から底部片である。1/8残存で、口(7.0)cm、底(6.0)cm、高8.8cm。口縁部から外面下部下端にクローム青磁釉。口縁部外面に方押しによる雷文帯。製作地不明。明治以降。

4は焼締陶器摺り鉢の底部片である。底(16.6)cm。無軸で体部下端から底部外面周縁は回転横ナデ。体部外面周縁は凹む。堺・明石系。江戸時代。

5は用途不明金属製品である。幅0.9cm、厚0.2cm。6はセルロイド製桶の破片である。

②A-5 溝出土遺物(第28図、P L、54)

1は土器風炉の口縁部から体部片か。口(24.0)cm。体部に空気穴と口縁部の欠き込み、外面に縦の凹線が巡る。在地系、江戸時代か。

③A-8 溝出土遺物(第28図、P L、55)

1は寛永通宝である。

(6)「近世面」旧A-9溝・旧A-13土坑出土遺物

旧A-9溝及び旧A-13土坑は、発掘調査時にはそれぞれ溝や土坑と認識した。しかし、年代が著しく新しかったり、形状が不明瞭であったりしたために本報告書内では遺構として扱わなかった。以下、それらからの出土遺物を記す。

なお、それぞれの遺溝の位置は第5図中にカッコ付で示してある。

①旧A-9 溝出土遺物(第29図、P L、55)

1は磁器鉢の口縁部片である。外面に唐草文。内面に型押しによる陽刻文。口縁は多角形であろう。肥前系。18C前。2は焼締陶器摺り鉢の口縁部から体部片である。体部外面に指押さえ状の圧痕が残存。丹波系。17C中～後。3は土器風炉の口縁部片である。口29.0cm。内面に突起と空気穴一カ所が残存。在地系。時期不明。4は土器「カマ輪」である。1/5残存。平坦面に煤が付着。在地系。17C中以降。

②旧A-13土坑出土遺物(第30・31図、P L、55～57)

1～8は碗である。下体部から底部片。

このうち、1～2は磁器。肥前系。1は底(6.4)cm。外面に簡略化した梅と竹文。蓋付きの鉢か。18C。2は底4.4cm。高台は小さく高い。高台内に「大明年製」の崩し銘。波佐見系。18C前。

また、3～8は陶器。3は肥前系。それ以外は瀬戸・美濃系。3は底(4.0)cm。陶胎染付。18C前～中。4は底4.6cm。「腰鉢碗」。18C。5は底(4.8)cm。青緑釉碗。17C後～18C初。内野山窯。6・8はそれぞれ底(4.9)cm、底4.7cm。ともに高台筋を除き胎釉。内底の釉にスレ跡が目立つ。18C。7は底5.2cm。「拳骨茶碗」。外面は押型変形、長石釉の装飾。18C前～中。

9～14は皿である。このうち、9～13は磁器。肥前系。9・13は内面に簡略化された「日」字鳳凰文を施す。蛇の目軸刺ぎ。波佐見系か。17C中～後。9は口縁部から底部片。1/4残存で、口14.0cm、底4.8cm、高3.9cm。13は体部から底部片。底5.0cm。10は1/6残存で、口(14.0)cm、底5.4cm、高3.9cm。高台は小さい。17C。11は口縁部から体部片。口(13.0)cm。口縁部内面に簡略化された不明文様。17C後～18C前。12は底部片で、底7.5cm。高台内に「渦漚」文、内面にコンニャク判による「小型五弁花」文。18後～19初。また、14は陶器。口縁部から底部片。1/4残存で、口(16.5)cm、底(9.0)cm、高5.3cm。灰釉で無文。瀬戸・美濃系。17C中～後。15は陶器灯明皿の口縁部から底部片である。4/5残存で、口10.5cm、底5.1cm、高2.0cm。錆碗の後、外底の釉を拭い取る。瀬戸・美濃系。18C後。

16は陶器乗燗の底部から脚部片である。底3.6cm。脚部はやや曇れ、体部は斜めに立ち上がる。瀬戸・美濃系。18C後～19C初。

17・18は磁器瓶である。肥前系。17は「油壺」の口縁部から下部部片。口1.9cm。上半部外面に「蛸唐草」文。19C前～中。18は体部から底部片。底5.0cm。波佐見系。江戸時代。19は陶器壺の蓋である。3/5残存で、径(9.8)cm、高2.7cm。上面から口縁部に薄い胎釉。瀬戸・美濃系。18C～19C。

20～22は土器焙烙である。型作り。在地系。20は口縁部から底部片。口(33.6)cm、底(31.0)cm、高5.2cm。器高は低い。江戸時代。21は体部から底部片。高2.3cm。体部は丸みを帯びる。丸底。酸化焰焼成。明治時代以降。22は底部片。底(28.0)cm。器壁は薄い。平底。江戸時代。

23は磁石の破片である。厚1.4～2.4cm。楕状タガネ痕が残存。流紋岩。

(7)「近世面」遺構外出土遺物(第30～31図、P.L. 57・58)

1～4は碗である。

このうち、1・2は磁器。1は口縁部から底部片。4/5残存で、口(11.2)cm、底(4.6)cm、高5.8cm。端反碗。蛇の目軸刺ぎ。肥前、波佐見系。19C前～中。2は向付(小鉢)の口縁部から底部片。3/4残存で、口10.0cm、底4.4cm、高5.0cm。内底に「壽」字文。内面に二重線と2個一対の花弁文。瀬戸・美濃系。明治以降。

また、3・4は陶器で、体部から底部片。肥前系。3は底(4.6)cm。陶胎染付。18C中～後。4は底(4.8)cm。「呉器手碗」。胎土は青灰色で釉も灰釉の色調。焼成不良か。17C後か末。

5は磁器皿の口縁部から底部片である。1/2残存で、口8.7cm、底4.0cm、高2.2cm。内面は符文。蛇の目軸刺ぎ。肥前、波佐見系。18C後～19C中。

6は焼締陶器壺の下部部から底部片である。底22.8cm。内外面に白色付着物あり。製作地、時期不明。

7は土器火鉢や置き壺等の口縁部片か。内面は器表荒れる。口縁端部が一部黒変する。在地系。時期不詳。

8～10は磁石の破片である。8は短2.6cm、厚1.6～1.8cm。流紋岩。9は短6.0～6.5cm、厚1.0～1.6cm。流紋岩。10は短6.7cm、厚2.2cm。頁岩。

(8)「中世面」出土遺物(第31図、P.L. 58)

1は陶器碗の口縁部から底部片ある。1/5残存で、口(10.0)cm、底3.6cm、高5.4cm。内外面に人造貝須によ

第3章 各時代の調査

る染付。焼成不良。製作地、時期不詳。A-30溝出土。

2は磁器皿の口縁部から底部片である。1/5残存で、口(13.0)cm、底6.2cm、高2.9cm。口錆。製作地不明。江戸時代。A-19溝出土。

3は陶器皿の底部片である。底9.2cm。内面から高台脇に灰釉。体部内面下位は屈曲する。瀬戸・美濃系。江戸時代。遺構外出土。

(9)「古墳時代第1面」出土遺物(第31図、P.L. 58)

1は陶器灯明具の筒部片である。皿部は欠損。口7.2cm。内外面に灰釉。口縁端部は無釉。瀬戸・美濃系。18C。遺構外出土。

(10)表探・出土面不明(第31～34図、P.L. 59～62)

1は陶器碗の口縁部から下部体部片である。口(12.0)cm。内面から体部外面下位に天目釉。口縁部の立ち上がりはやや高い。「天目碗」。瀬戸・美濃系。17Cか。

2・3は陶器灯明皿である。2は完形で、口7.4cm、底3.8cm、高1.5cm。3は1/3残存で、口9.8cm、底4.0cm、高1.6cm。錆軸施釉後、外面の釉を拭い取る。19C。

4～7は焼締陶器摺り鉢である。4は口縁から底部片。口29.0cm、底16.0cm、高13.9cm。口縁部上端丸みを持つ。益子・笠間系。明治以降。また5は体部片、6は底部片で底(13.0)cm。ともに錆軸で、内面に無釉部分がある。瀬戸・美濃系。大塚期か連房初期(16C～17C前)か。7は底部片。底12.0cm。錆軸。外面の釉を拭い取る。外底面は回転糸切り無調整。瀬戸・美濃系。江戸時代。

8～11は土器類である。在地系。8は焙烙の耳部片。高2.5cm。体部は低いが直線的。丸底。19C中以降。9は火鉢の体部片か。外面に「草花」文。江戸時代。10は機種不明の下部体部片。高台は欠損。体部外面に型押しによる文様。器表は黒灰色で胎土は白色。江戸時代。11は甕の口縁部から胴部片。径(36.0)cm。外面に波状文を施す。A-9溝出土の4「カマ輪」と口径が一致する。同一個体の可能性がある。

12・13は椀瓦の破片である。明治以降。12は厚1.8cm。13は厚1.6cm。14は輪の羽口の破片である。

15～28は銭貨である。16・17は文久通宝、それ以外は寛永通宝。このうち18～28の11枚は鉄銭で、錆のため密着し十分に分離しえない。

29～34は用途不明金属製品である。29は長15.5cm、径1.2cm。「T」字状となるか。30～33は角釘や留め具であろうか。30は径0.5cm。31は径0.7cm。32は径0.6cm、33は径0.4cm。また、34は幅4.3cm、厚0.3～0.5cm。円弧状を呈する。

35・36は石製品である。35は石板の破片。短8.4cm、厚0.5cm。粘板岩。36は用途不明。長5.8cm、厚1.4～2.5cm。重17g。軽石。

(11)民家採取(第34図、P.L. 63)

A区の現民家より採取したものであり、持ち主の方のご厚意により掲載するものである。

1は焼締陶器摺り鉢。完形で口31.3cm、底14.8cm、高11.1cm。口縁部に注口か。内面は磨耗が著しい。胎土は小礫を多く含む暗赤褐色。焼成甘い。堺・明石系。19C。2・3は石製品。粗粒輝石安山岩。2は石臼の下臼。1/2残存で径42.0cm、厚17.2cm、残存部重24.1kg。摺り目は8分割。底部に幅約6cmの十字状の溝を刻む。3は鉢か。径29.4cm、厚9～14.8cm、重6.3kg。

(出土銭貨観察表)

A-2 墓堀出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
1	23.5	18.0	5.5	1.0	2.8	「古寛水」	2	24.5	19.5	5.5	1.0	3.0	「古寛水」
3	23.0	19.0	6.5	1.0	2.5	「新寛水」	4	25.0	20.0	6.0	1.5	3.3	「文銭」
5	22.5	19.0	6.5	1.0	2.5	「新寛水」	6	25.0	19.5	5.5	1.5	4.3	「古寛水」
7	25.5	20.0	6.0	1.0	3.0	「古寛水」	8	24.0	18.0	5.5	1.5	3.2	「新寛水」
9	25.0	19.0	6.0	1.5	2.9	「新寛水」	10	24.5	19.0	6.0	1.0	3.0	「新寛水」
11	24.0	19.0	6.0	1.5	3.2	「新寛水」	12	25.0	19.0	6.0	1.5	3.1	「新寛水」
13	24.0	19.0	6.0	1.5	2.6	「新寛水」	14	25.0	20.0	6.0	1.5	3.8	「新寛水」
15	25.0	20.5	6.0	1.5	3.5	寛永通宝							

A-3 墓堀出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
2	25.5	20.5	6.0	1.5	3.2	「文銭」	3	23.0	19.0	6.5	1.0	2.3	「新寛水」
4	23.5	19.0	6.5	1.0	2.9	「新寛水」	5	23.5	19.0	6.0	1.0	2.8	「新寛水」
6	23.0	19.0	6.5	1.0	2.8	「新寛水」	7	23.5	19.0	7.0	1.5	3.6	「新寛水」
8	23.5	19.0	5.5	1.0	2.6	「古寛水」	9	23.5	19.0	6.0	1.5	3.7	「新寛水」
10	23.5	19.0	6.0	1.0	2.7	「新寛水」	11	24.0	19.5	6.0	1.0	2.4	「古寛水」
12	25.5	20.0	5.5	1.0	3.5	「文銭」	13	24.0	18.5	6.0	1.0	2.7	「新寛水」
14	24.0	20.0	6.5	1.0	2.5	「古寛水」	15	24.5	19.0	6.0	1.0	2.7	「古寛水」

A-4 墓堀出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
1	28.5	22.0	7.0	1.0	3.4	「四文銭11枚」	2	25.0	20.0	6.0	1.5	3.7	「新寛水」
3	24.0	20.0	5.0	1.0	2.5	寛永通宝							

A-5 墓堀出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
3	25.0	20.0	6.0	1.5	3.4	「新寛水」	4	25.0	20.0	6.0	1.5	3.1	「新寛水」
5	24.0	19.5	6.5	1.5	2.9	寛永通宝	6	25.5	20.0	5.0	1.5	4.0	寛永通宝
7	—	19.5	6.0	1.0	—	?	8	—	—	—	—	—	?
9	26.0	19.0	5.5	1.5	3.3	「文銭」	10	24.0	20.0	7.0	1.0	2.8	「新寛水」
11	23.5	19.0	6.5	1.0	2.5	「新寛水」	12	25.5	20.0	6.0	1.5	4.0	「文銭」
13	25.5	20.5	6.5	1.0	3.6	「古寛水」	14	24.4	20.0	7.0	1.0	2.9	「新寛水」
15	25.0	19.0	6.0	1.0	1.8	「新寛水」	16	25.0	20.5	6.0	1.0	3.4	「古寛水」
17	25.5	20.0	6.5	1.5	2.6	?	18	23.0	18.0	6.0	1.0	2.1	「新寛水」
19	24.5	19.5	6.0	1.5	3.3	「新寛水」	20	24.0	20.0	6.0	1.0	2.5	「新寛水」

A-6 墓堀出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
1	28.0	23.0	—	1.5	6.2	一銭	2	28.5	24.0	—	1.5	6.4	一銭

A-9 墓堀出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
1	28.0	22.5	6.0	1.5	4.3	「四文銭11枚」	2	28.0	22.0	6.0	1.0	3.5	「四文銭11枚」
3	24.0	20.0	5.0	1.0	3.5	「古寛水」	4	24.0	19.0	6.0	1.0	2.1	「古寛水」
5	27.0	22.0	7.0	1.0	4.0	文久通宝	6	27.0	21.0	6.0	1.0	3.7	文久通宝

A-10 墓堀出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
1	24.5	20.0	6.0	1.0	2.8	「新寛水」	2	22.5	18.0	6.5	1.0	2.0	「新寛水」
3	—	—	—	—	?		4	—	—	—	—	?	

A-12 墓堀出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
2	25.0	20.0	5.5	1.5	3.8	「新寛水」	3	23.0	18.0	5.5	1.5	2.7	「新寛水」
4	—	—	—	—	—	寛永通宝	5	23.5	18.0	6.0	1.5	2.0	「新寛水」
6	23.5	20.0	6.0	1.0	2.5	「新寛水」	7	23.5	19.0	5.0	1.0	2.9	「新寛水」
8	23.5	20.0	6.0	1.0	2.0	「新寛水」	9	23.5	19.0	6.0	2.0	2.9	「新寛水」
10	—	—	—	1.5	—	寛永通宝							

第3章 各時代の調査

A-16 墓出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
2	25.0	19.5	5.0	1.0	3.7	「古寛永」	3	24.5	19.5	6.0	1.0	3.8	「古寛永」
4	24.5	20.0	5.0	1.0	3.7	「古寛永」	5	21.5	17.0	6.5	1.0	1.8	「新寛永」
6	21.5	18.0	7.0	1.0	1.9	「新寛永」	7	22.0	17.0	6.0	1.0	2.4	「新寛永」
8	23.0	18.5	7.0	1.0	2.7	「新寛永」	9	23.0	19.5	6.0	1.0	2.9	「新寛永」
10	23.0	19.0	6.0	1.0	2.6	「新寛永」	11	23.0	19.5	6.0	1.0	2.8	「新寛永」
12	23.5	19.5	6.5	1.0	2.9	「新寛永」	13	23.0	19.5	6.0	1.0	2.4	「新寛永」
14	23.0	20.0	6.0	1.0	3.0	「新寛永」	15	25.5	20.0	6.0	1.0	3.2	「新寛永」
16	25.0	21.5	6.0	1.0	3.4	「文銭」	17	22.5	19.5	6.5	1.0	1.5	「新寛永」

A-11 土坑出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
3	27.5	21.0	5.5	1.5	4.6	「西文銭21枚」							

A-8 溝出土銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
1	28.5	21.0	6.0	1.0	3.6	「西文銭11枚」							

表掘・出土面不明銭貨

番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	穿径mm	厚さmm	重さg	備考
15	28.0	21.5	6.5	1.0	3.5	「西文銭11枚」	16	27.0	22.0	6.0	1.0	3.8	文久通宝
17	26.5	20.5	6.5	1.0	3.8	文久通宝	18	—	—	—	—	—	「鉄四文銭」
19	29.0	—	6.0	2.0	—	「鉄四文銭」	20	29.0	—	6.0	2.0	—	「鉄四文銭」
21	29.0	22.0	6.0	1.5	3.1	「鉄四文銭」	22	—	—	—	—	—	「鉄四文銭」
23	29.0	20.0	—	—	—	「鉄四文銭」	24	28.0	—	7.0	1.5	—	「鉄四文銭」
25	29.0	22.0	6.0	1.5	—	「鉄四文銭」	26	29.0	22.0	7.5	1.0	—	「鉄四文銭」
27	28.0	—	—	—	—	「鉄四文銭」	28	23.0	19.5	6.5	1.5	—	「鉄一文銭」

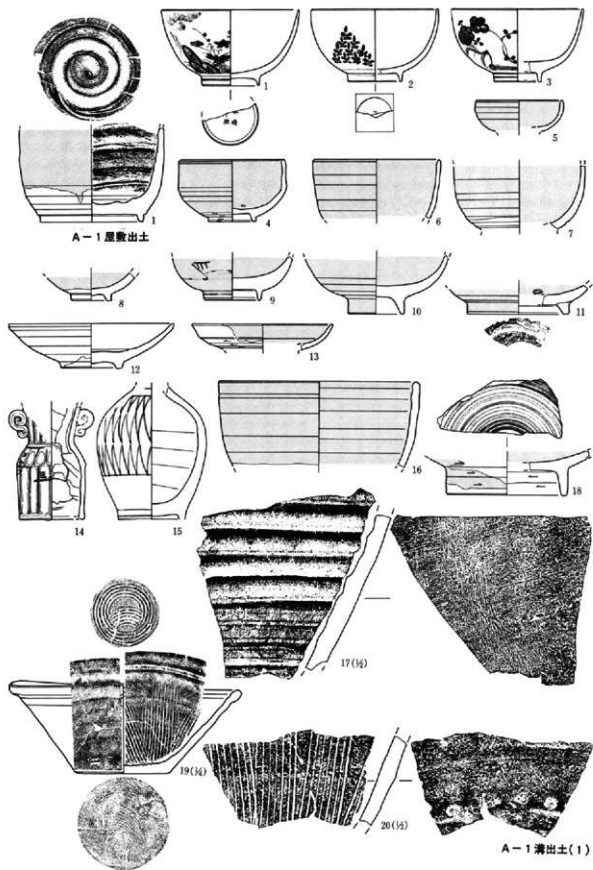
○寛永通宝については、分類が可能なものは備考欄に以下のように記述した。この分類は「日本出土銭続履1996年度版」（兵庫埋蔵銭調査会）に従った。

一文銭

・「古寛永」—銅銭1期（1636～1659年）・「文銭」—銅銭1期/新寛永文銭（1668～1683年）・「新寛永」—銅銭田期（1697～1747年、1767～1781年）・「鉄銭」—鉄銭（1739年～）

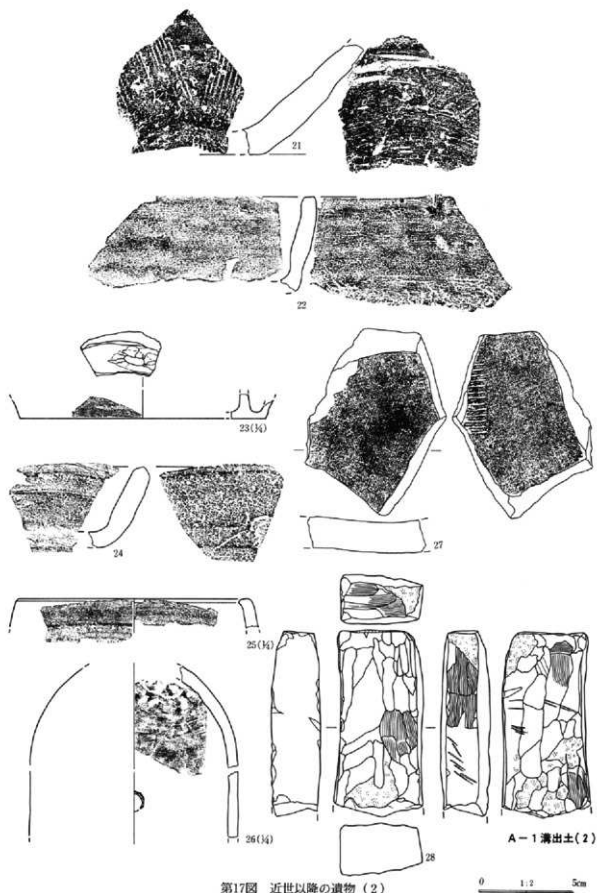
西文銭

・「西文銭21枚」—真鍮銭（1768年）・「西文銭11枚」—真鍮銭（1769年～）・「鉄四文銭」—鉄銭（1860年～）



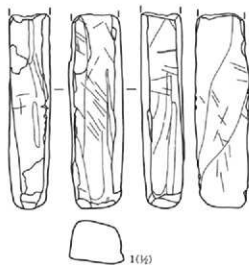
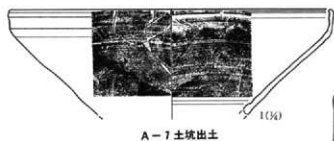
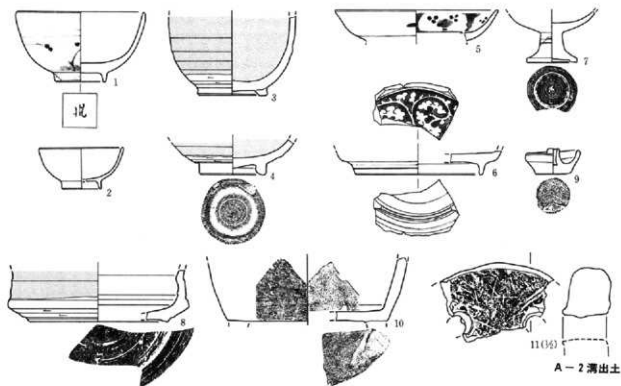
第16図 近世以降の遺物(1)

0 1:3 10cm



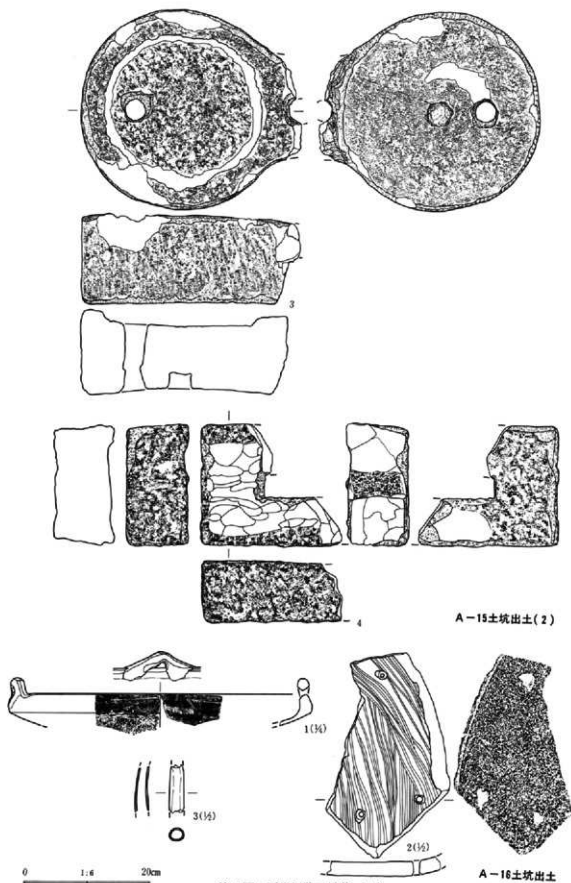
第17図 近世以降の遺物(2)

第2節 近世以降の遺構と遺物

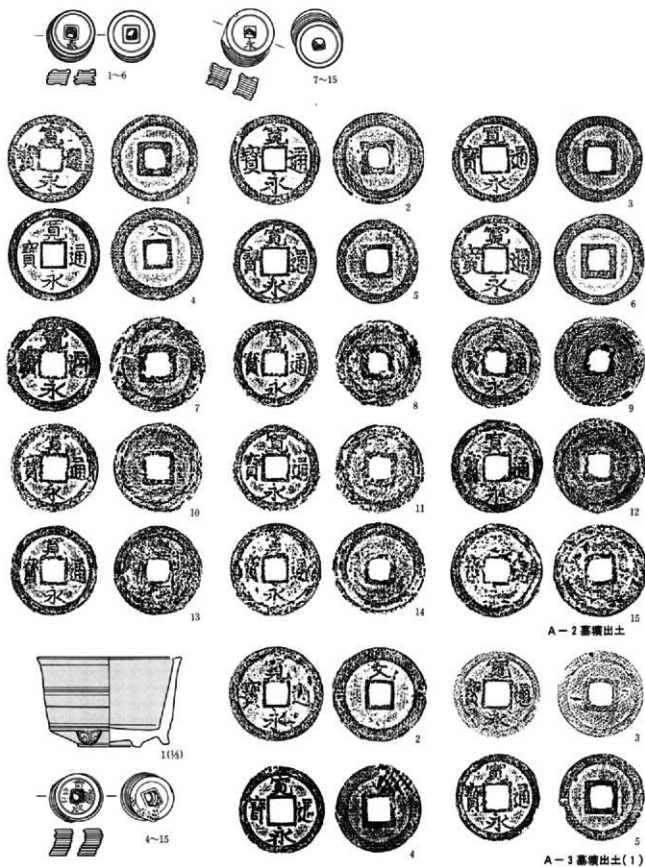


第18図 近世以降の遺物(3)

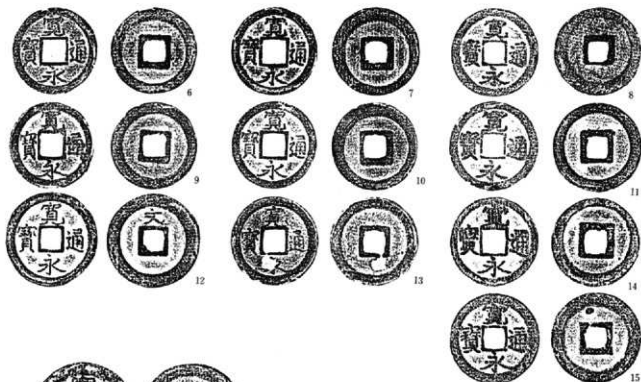
0 1:3 10cm



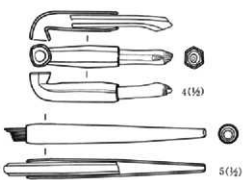
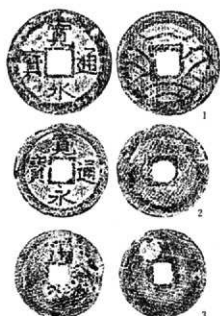
第19図 近世以降の遺物(4)



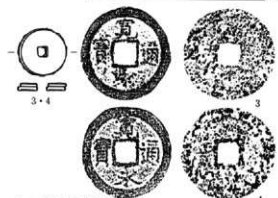
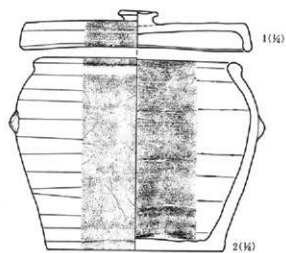
第20図 近世以降の遺物 (5)



A-3 墓出土(2)



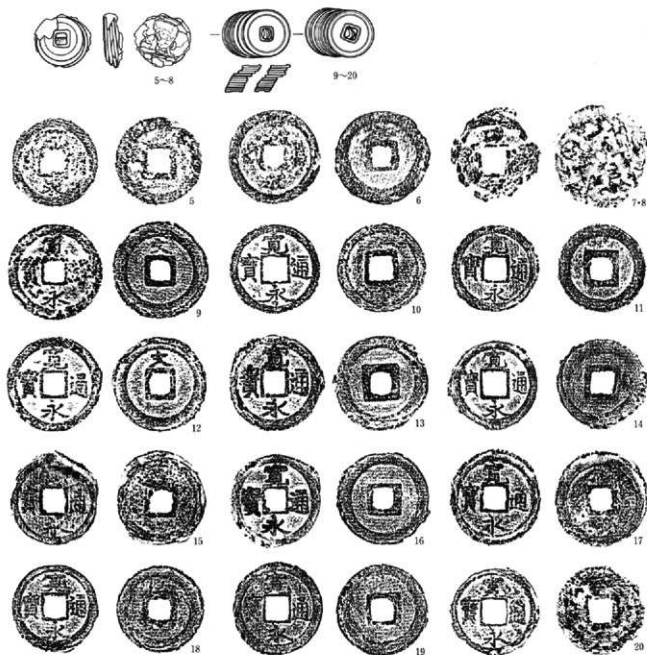
A-4 墓出土



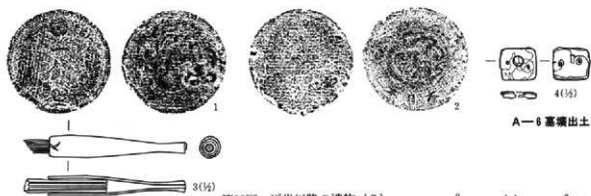
A-5 墓出土(1)

第21図 近世以降の遺物(6)

0 1:1 3cm



A-5 墓横出土 (2)



A-6 墓横出土

第22図 近世以降の遺物 (7)

0 1.1 3cm

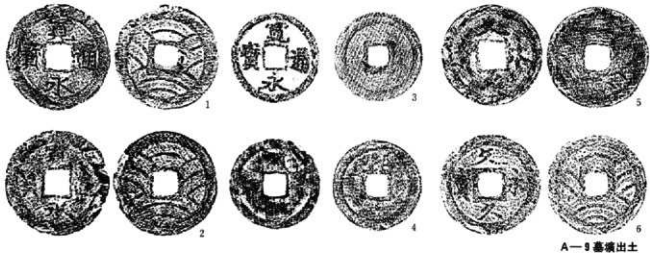


A-7 墓坑出土

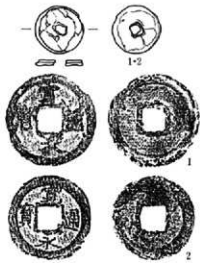
第23図 近世以降の遺物(8)

0 1:1 3cm

第2節 近世以降の遺構と遺物

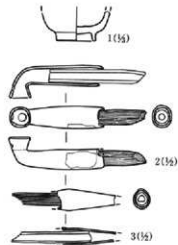


A-9 墓塚出土

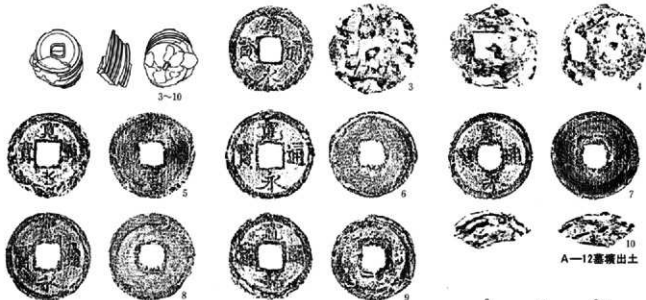
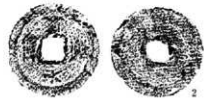
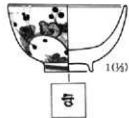


A-10 墓塚出土

※3・4は写真のみ



A-11 墓塚出土

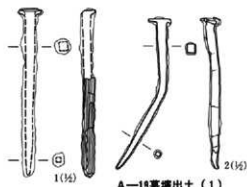
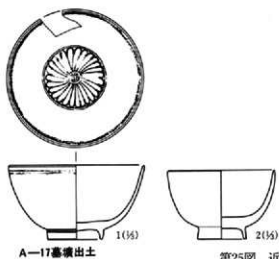
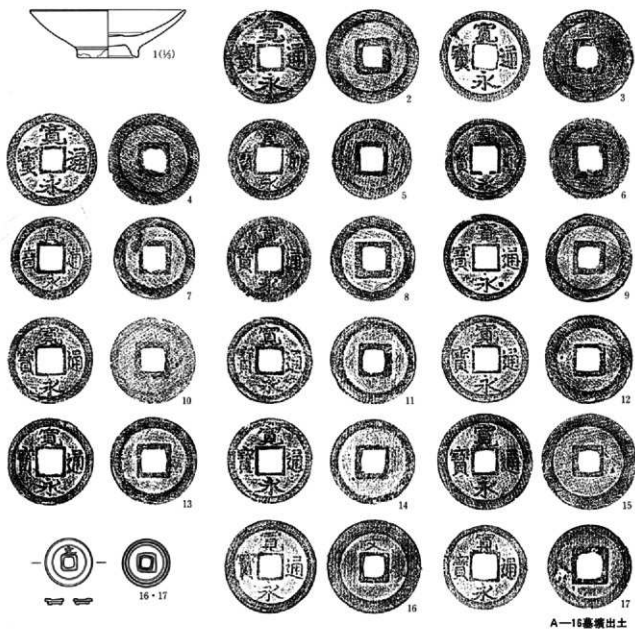


A-12 墓塚出土

0 1:1 3cm

第24図 近世以降の遺物(9)

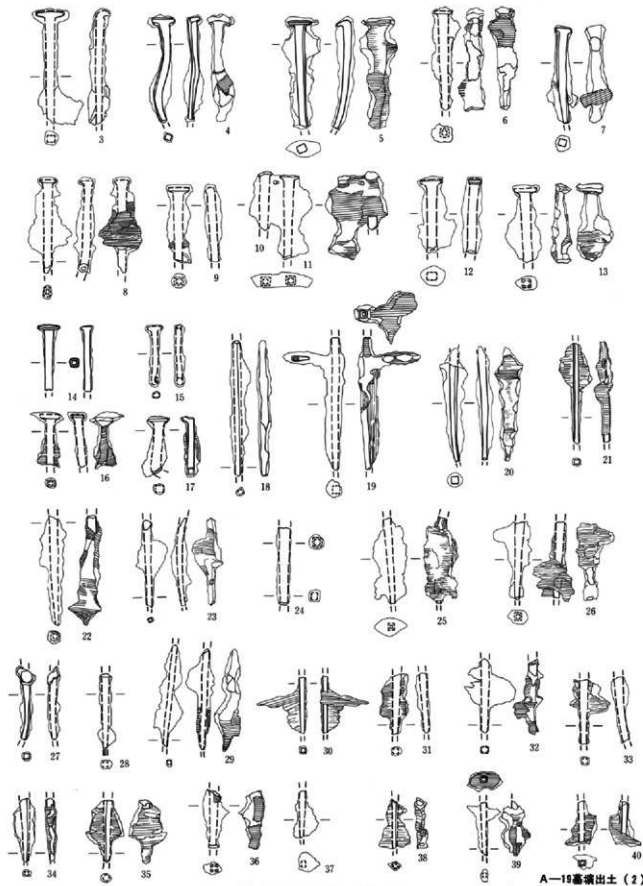
第3章 各時代の調査



第25図 近世以降の遺物 (10)

0 1:1 3cm

第2節 近世以降の遺構と遺物

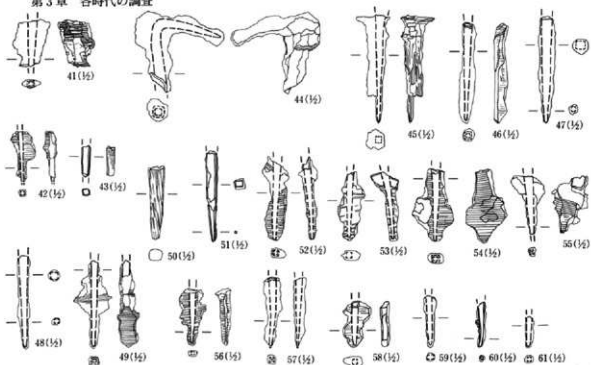


第26圖 近世以降の遺物 (11)

A-19墓出土(2)

0 1:2 5cm

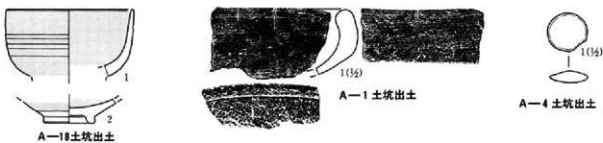
第3章 各時代の調査



A-19墓横出土 (3)

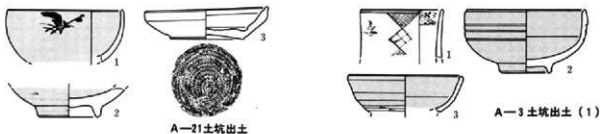


A-11土坑出土



A-1土坑出土

A-4土坑出土



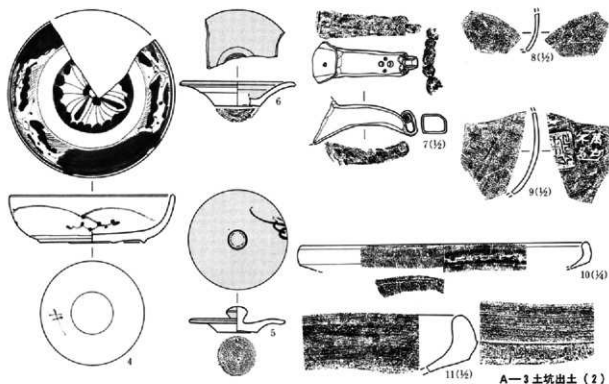
A-21土坑出土

A-3土坑出土 (1)

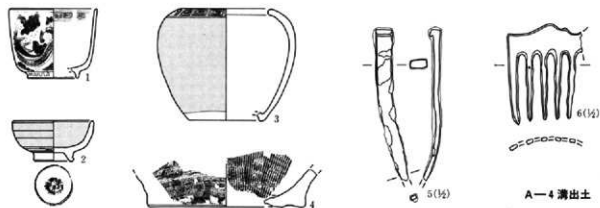
第27図 近世以降の遺物 (12)

0 1:3 10cm

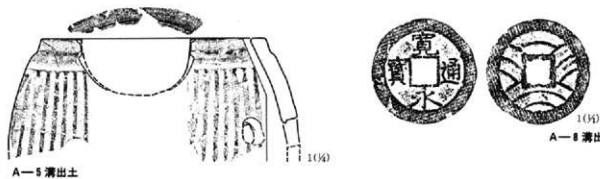
第2節 近世以降の遺構と遺物



A-3 土坑出土 (2)



A-4 溝出土



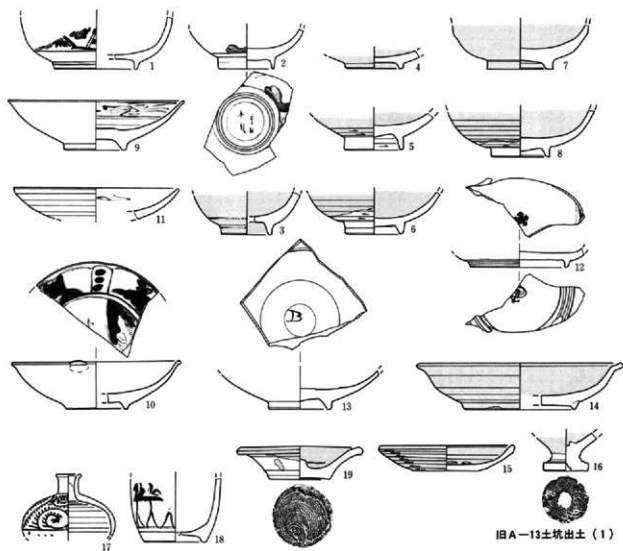
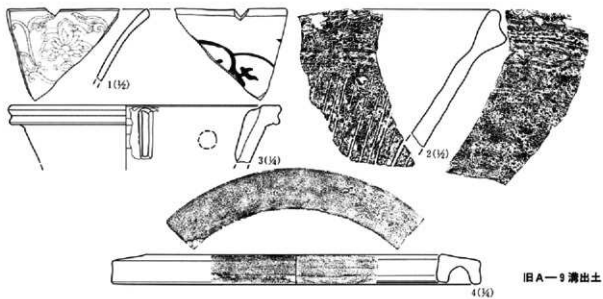
A-5 溝出土

A-8 溝出土

第28図 近世以降の遺物 (13)

0 1:3 10cm

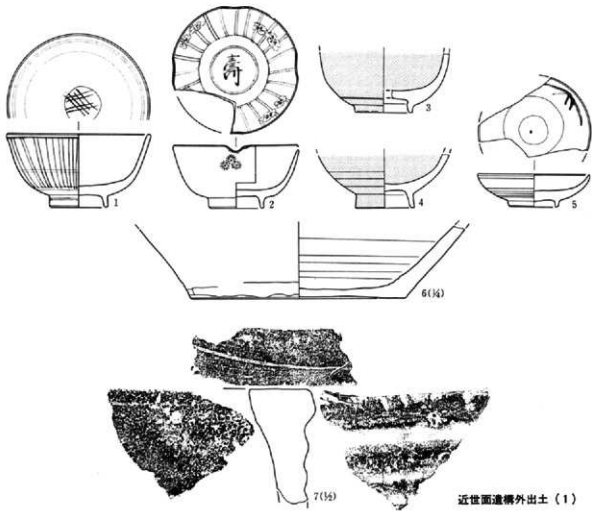
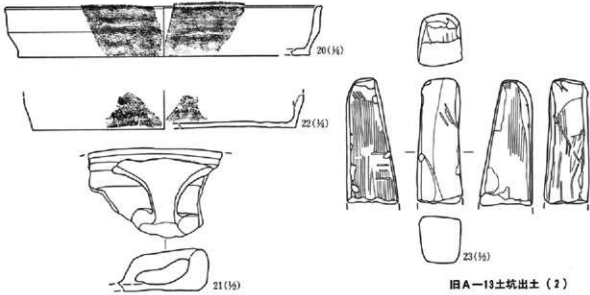
第3章 各時代の調査



第29図 近世以降の遺物 (14)

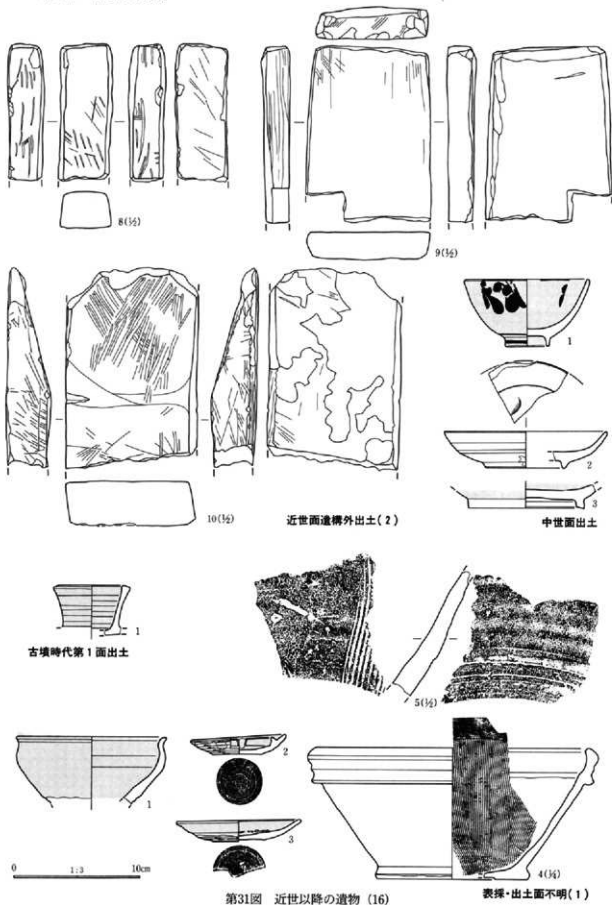
0 1:3 10cm

第2節 近世以降の遺構と遺物

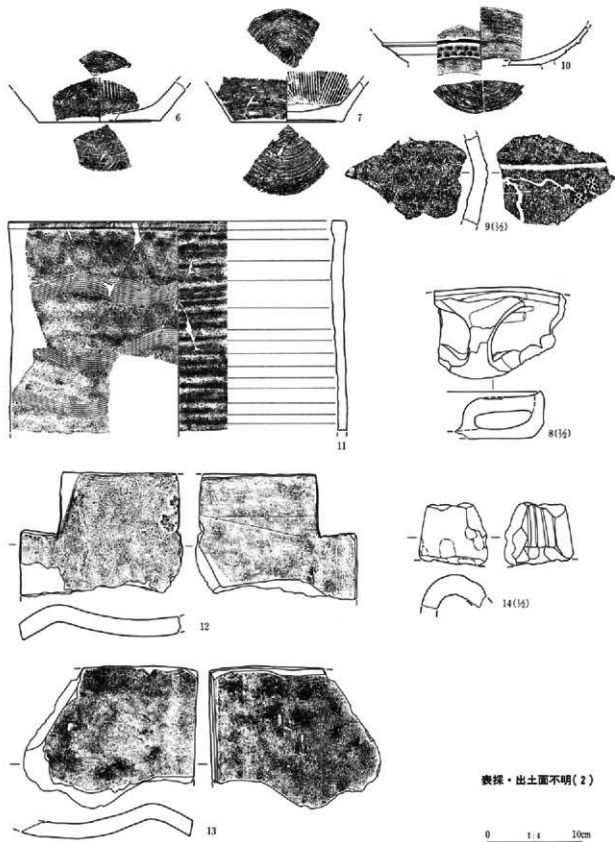


第30図 近世以降の遺物 (15)

第3章 各時代の調査

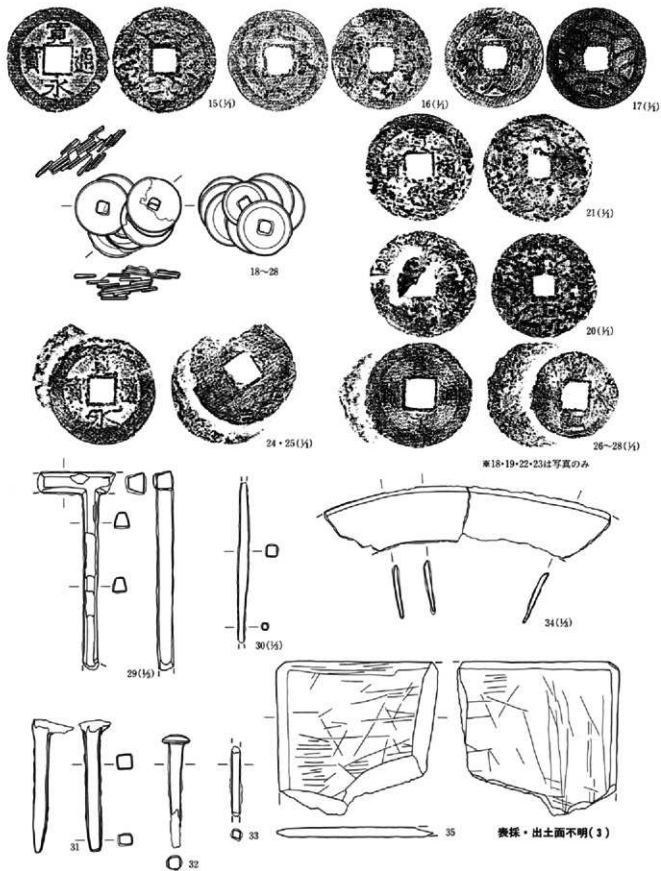


第2節 近世以降の遺構と遺物



第32図 近世以降の遺物 (17)

第3章 各時代の調査

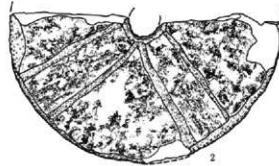
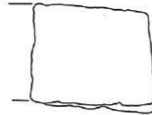
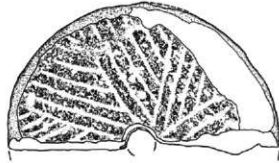
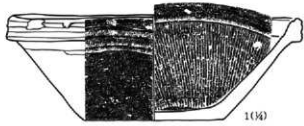


第33図 近世以降の遺物(18)

第2節 近世以降の遺構と遺物



表採・出土面不明(4)



民家採取

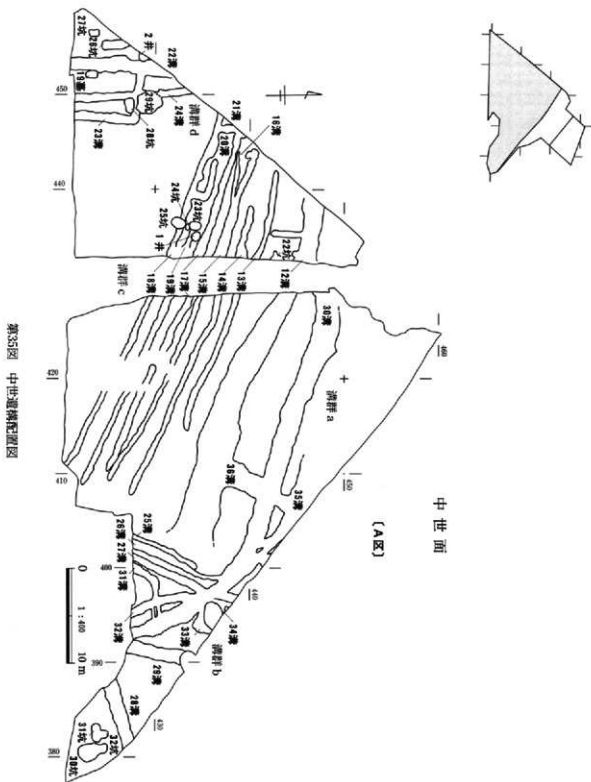
0 1:6 20cm

第34図 近世以降の遺物 (19)

第3節 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、A区の井戸2基、土坑11基、墓墳1基、溝25条がある。このうち井戸、土坑、墓墳は南西隅、西部、南東部に近接または重複している。溝は位置や規模、走向等から4溝群に分類した。

この時代の遺物は量的に少ないが、青磁器や、甕、鉢等の破片に加え板碑の破片、中国銭などがある。



第33図 中世遺構配置図

1. 遺構

(1) 井戸 (第36図、P.L. 10)

井戸は2基を確認した。それぞれ安全対策上完掘はできなかったが、石組みや木枠等は確認できず、素掘りの井戸と思われる。

A-1井戸 A区西部の430-430・435Gに位置する。直径約92cmの不正円形。A-19溝と重複、これより新しい。陶器、須恵器、土師器の破片が出土。

A-2井戸 A区南西隅の425-450Gに位置する。一部が調査区外に懸かり、直径110cm程度の円形か。A-22溝と重複、新旧関係は不明。

(2) 土坑(第37・38図、P.L. 10・11)

土坑は11基を確認した。調査区南西隅に4基、西部に4基、南東隅に3基が近接、重複している。A-23・25・27土坑はA-19墓墳と似た形状であるが、具体的な性格は不明である。

A-22土坑 A区北西部の440-430Gに位置する。調査区外に懸かる。深さ56cm。断面は掘り鉢状。

A-23土坑 A区西部の430-430Gに位置する。長径1.23m、短径0.8m、深さ7cmの隅丸長方形で、長径方位N-10°-E。断面は浅い皿状。A-19溝と重複、新旧関係は不明。

A-24土坑 A区西部の430-435Gに位置する。長径0.53m、短径0.42m、深さ10cmの楕円形で、長径方位はN-90°。断面は皿状。A-23土坑と接し、新旧関係は不明。

A-25土坑 A区西部の430-435Gに位置する。長径1.43m、短径0.8m、深さ15cmの長方形で、長径方位はN-16°-Eを示す。断面は浅い皿状。A-18溝と重複、新旧関係は不明。

A-26土坑 A区南西隅の420-450・455Gに位置する。一部が調査区外に懸かる。長径2.74m、短径0.9m、深さ21cmの長方形か。長径方位はN-6°-W。断面は箱形。

A-27土坑 A区南西隅の420-455Gに位置する。長径1.08m、短径0.65m、深さ14cmの隅丸長方形で、長径方位はN-3°-W。断面は浅い箱形。

A-28土坑 A区南西隅の425-445Gに位置する。長径1.58m、短径0.85m、深さ16cmの楕円形で、長径方位N-85°-E。断面は皿状。A-23・24溝と重複、これらより新しい。

A-29土坑 A区南西隅の425-445・450Gに位置する。長径2.8m、短径2.1m、深さ48cmの不正形で、長径方位はN-6°-W。断面は箱形。A-23・24溝と重複、これらより古い。

A-30土坑 A区南東隅の420-375・380Gに位置する。長径3.4m、短径1.7m、深さ12cmの不正形土坑で、長径方位はN-11°-W。断面は浅い箱形。

A-31土坑 A区南東隅の420-380Gに位置する。長径1.84m、短径0.88m、深さ22cmの隅丸長方形で、長径方位はN-90°。断面は箱形。A-32土坑と重複、新旧関係は不明。

A-32土坑 A区南東隅の420-380Gに位置する。A-31土坑と重複し、深さ8cmの楕円形土坑か。長径方位はN-0°を示す。断面は浅い箱形。A-31土坑との新旧関係は不明。

(3) 墓墳(第39図、P.L. 11)

墓墳は1基を確認した。「近世面」のような墓墳群を確認することはできなかった。

A-19墓墳 A区南西隅の420-450Gに位置する。長径1.13m、短径0.74m、深さ13cmの隅丸長方形で、長径方位はN-0°。断面は浅い皿状。埋土はHr-FP泥流ブロックを含む、鈍い黄褐色砂質土。A-22溝と重複、

第3章 各時代の調査

これより新しい。人骨が残存。副葬品として、元豊通宝、洪武通宝が出土。

(4) 溝(第40・41区・付図1、P.L. 12~14)

溝は25条確認された。位置や規模、走行などから大きく4つのまとまりに分類できる。遺物は、それぞれの溝から須恵器、土師器、「土器」か、近世の陶磁器の小破片が出土しているが、殆どが混入であろう。

①「溝群a」

A区北西隅から南東隅には、大規模なA-30・12溝が併走している。また、A-36溝がこの2条の溝を繋ぐように直交している。A-35溝もA-30溝と合する。これらの溝は、いずれも北端部が大規模河川跡に接続しており、この河川から水を引き込むために機能していた可能性も考えられる。

A-30溝 A区北西隅から南東隅の425-390G~460-435Gに位置する。走向はN-72'-W、439-400G付近から南東部がN-32'-W。確認長は東半が44.5mで、西半に一部が懸かる。幅120cm~340cm、深さ60~80cmと大規模である。断面は逆台形。中央部でA-36溝が交差、南東端で「溝群b」の各溝が合流、分岐。このうちのA-29溝より古い。他との新旧関係は不明。

A-12溝 A区北西隅から南東隅にかけての430-400G~445-435Gに位置する。走向はN-69'-W。東端は消失し確認し得ない。確認長は西半7.4m+東半27.7m、幅180cm~450cm、深さ14~41cmで、断面は浅い皿状。A-30溝の南約5mに併走する。A-36溝とT字状に交差、新旧関係は不明。

A-36溝 A区東部の435-405G~440-405Gに位置する。走向はN-27'-E。A-12・30・35溝と直交し、全形は不明。確認長はおおよそ10m、幅140~270cm、深さ62~72cmで、断面は逆台形。A-35溝より新しいが、他との新旧関係は不明。青磁碗の破片が出土。

A-35溝 A区東隅の440-440G~440-405Gに位置する。走向はN-58'-W。河川跡と重複し、確認長3.0m、幅40~120cm、深さ53~66cmで、断面は逆台形。A-30溝に合流、A-36溝と交差、後者より古い。

②「溝群b」

A区南東部には9条(A-25~29、31~34溝)が近接ないしは交差している。殆どが北東から南西走している。A-30溝と交差や分岐、合流するような溝が多く、「溝群a」との関連が想像できる。

A-25溝 A区東部の425-400G~430-395Gに位置する。走向はN-27'-E。確認長7.4m、幅28~60cm、深さ18~50cmで、断面は皿状。A-26溝と隣接、新旧関係は不明。

A-26溝 A区東部の405-400G~435-395Gに位置する。走向N-21'-E。確認長9.8m、幅28~78cm、深さ15~20cmで、断面は皿状。A-30溝から分岐、A-25溝と隣接、それぞれ新旧関係は不明。

A-27溝 A区東部の425-400G~435-395Gに位置する。走向N-27'-E。確認長11.4m、幅58~90cm、深さ10~25cmで、断面は逆台形。A-30溝から分岐、A-34溝と隣接、それぞれ新旧関係は不明。

A-28溝 A区東隅の425-380G~425-385Gに位置する。走向はN-72'-E。確認長6.7m、幅110~160cm、深さ51~56cmで、断面は逆台形。

A-29溝 A区東部の425-390G~430-390Gに位置する。走向はN-13'-E。確認長5.6m、幅135~162cm、深さ65~60cmで、断面は皿状。A-30溝より新しい。軟質陶器撞鉢の破片が出土。

A-31溝 A区東部の425-395・400G~430-395Gに位置する。L字状に屈曲し、走向はN-32'-E、430-398G付近からN-90'。確認長4.2m、幅50~100cm、深さ6~15cmで、断面は浅い皿状。A-30溝から分岐、32溝と交差、それぞれ新旧関係は不明。

A-32溝 A区東部の425-395G~435-395Gに位置する溝。走向はN-12'-W。確認長11.7m、幅80~92

cm、深さ32～56cmで、断面は逆台形。A-27・30・34溝との新旧関係は不明。

A-33溝 A区東部の430-395G～435-390Gに位置する。走向はN-87°-W。確認長3.3m、幅50～120cm、深さ20～44cmで、断面は逆台形。A-30溝に合流、新旧関係は不明。

A-34溝 A区東部の435-395Gに位置する。走向はN-66°-E。確認長0.7m、幅35cm、深さ26cmで、断面は箱形。A-27溝との新旧関係は不明。

③「溝群c」

A区西部から南東部には、同規模の溝6条（A-13～15溝、17～19溝）が、約1m間隔で併走している。埋土からもこれらが同時存在した可能性が窺える。また、これらに合する溝も3条（A-16・20・21溝）存在している。端部が完結しているものが多く、用水路とは異なった機能があった可能性もある。

A-13溝 A区西部から中央部の430-410G～440-440Gに位置する。走向はN-68～76°-W。確認長9.6m+15.6m、幅40～74cm、深さ3～18cmで、断面は逆台形。鉄製品が出土。

A-14溝 A区西部から中央部の425-405G～440-435Gに位置する。走向はN-66～77°-W。確認長5.6m+23.6m、幅40～139cm、深さ6～26cmで、断面は逆台形。

A-15溝 A区西部から中央部の425-405G～440-440Gに位置する。走向はN-63～75°-W。確認長11.9m+21.6m、幅30～120cm、深さ6～15cmで、断面は逆台形。A-16溝が合流、これより新しい。

A-17溝 A区西部から南西部の425-410G～435-445Gに位置する。走向はN-65～71°-W。確認長13.4m+24m、幅52～125cm、深さ7～16cmで、断面は皿状。

A-18溝 A区西部から南東部の420-410G～435-445Gに位置する。走向はN-65～70°-W。確認長15.8m+20m、幅42～118cm、深さ4～14cmで、断面は浅い皿状。A-20溝が合流、新旧関係は不明。焼締陶器甕の破片が出土。

A-19溝 A区中央部から南西部の420-405G～430-435Gに位置する。走向はN-65～69°-W。確認長2.1m+22.2m、幅31～85cm、深さ5～9cmで、断面は浅い箱形。A-23・24土坑と重複、それぞれ新旧関係は不明。

A-16溝 A区西部の435-435G～435-440Gに位置する。走向はN-81°-W。確認長4.6m、幅15cm、深さ2cmで、断面は浅い皿状。A-15溝より古い。

A-20溝 A区西部の430-435G～435-440Gに位置する。L字状に屈曲し、走向はN-74°-W、435-435GからN-13°-E。確認長5.4m、幅48～68cm、深さ4cmで、断面は浅い箱形。A-18溝との新旧関係は不明。

A-21溝 A区西部の430-435Gに位置する。調査区境界にあり、詳細不明。

④「溝群d」

南西隅には3条（A-22・23・24溝）が位置している。これらの溝は南北走、東西走するのが特徴であり、他の溝とは異なった目的で造られた可能性がある。

A-22溝 A区南西隅の420-450G～430-450Gに位置する。直線的に南北走し、走向はN-1°-E。確認長9.6m、幅122～175cm、深さ8～41cmで、断面は皿状。A-2井戸と重複、A-23溝が分岐、それぞれ新旧関係は不明。

A-23溝 A区南西隅の420-445G～425-450Gに位置する。L字状に屈曲し、走向はN-3°-E、423-446G付近でN-80°-W。確認長11.2m、幅78～121cm、深さ2～20cmで、断面は浅い箱形。A-28・29土坑と重複、A-24溝と交差、A-28土坑より古く、A-29土坑より新しい。

第3章 各時代の調査

A-24溝 A区南西隅の420-445G~430-440Gに位置する。直線的に南北走し、走向はN-3°W。確認長12.3m、幅65~104cm、深さ17~27cmで、断面は皿状。A-28・29土坑、A-23溝との新旧関係は不明。

2. 遺物

この時代の遺物として、器類では中国製青磁器、軟質陶器、焼締陶器等がある。銭貨では明銭や宋銭、その他板碑の破片等が出土している。また「土器」と思われる小破片せつぱくも見られるが、器形を復元するには至らなかった。

(1) A-19墓塚出土(第42図、P.L. 64)

1・2は銭貨である。1は元豊通宝(北宋 元豊元・1078年初鋳)、2は洪武通宝(明 洪武元・1363年初鋳)。

番号	直径mm	内径mm	孔径mm	厚さmm	重さg	備考	番号	直径mm	内径mm	孔径mm	厚さmm	重さg	備考
1	25.0	18.5	6.0	1.0	2.4	篆書体	2	23.0	18.0	5.5	1.5	2.4	

(2) 「中世面」溝出土遺物(第42図、P.L. 64)

- 1はA-36溝出土。中国製青磁碗の体部片であろう。残存部は無文。龍泉窯系。
- 2はA-29溝出土。軟質陶器播鉢の下体部から底部片である。底(11.0)cm。底部は回転糸切り無調整。内面は使用による摩滅が著しい。胎土は灰白色。在地系。14C後~15C。
- 3はA-18溝出土。焼締陶器甕の体部片である。器厚はやや厚い。知多窯。いわゆる「常滑甕」。
- 4はA-30溝出土。焼締陶器甕の体部片であろう。断面の一部が摩耗。二次的に使用されたか。知多窯。
- 5・6はA-13溝出土。金属製品である。5は用途不明。重92.0g。L字状や環状の部分を持つ10cm程度の個体が複数付着し分離不能。6は角釘か。径7.0mm。

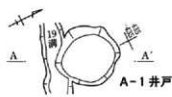
(3) 「中世面」遺構外出土遺物(第42図、P.L. 64)

- 1・2は中国製青磁器である。龍泉窯系。1は碗の体部から底部片。底(4.4)cm。画花文。2は碗か鉢の体部片であろう。見込みに片影り沈線による「画花」文。
- 3は、焼締陶器甕の下体部片である。外面は帯状のタタキ。内面に薄い自然釉。知多窯。12C~13C。

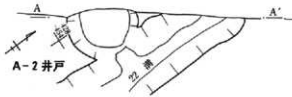
(4) 他面出土遺物(第43図、P.L. 64)

- 1・2は中国製磁器、青磁碗である。1は体部片、2は口縁部片。1は「近世面」遺構外出土、2は「古代A-2面」遺構外出土。
- 3は板碑。厚さ1.8~2.2cm。339g。梵字か蓮華座と思われる影り込みが一部残存するが詳細は不明。緑色片岩。「近世面」旧A-13土坑出土。
- 4は、石臼の上臼。摩耗が著しく、中世のものに見られる状態である。粗粒輝石安山岩。「近世面」A-1屋敷出土。

第3節 中世の遺構と遺物

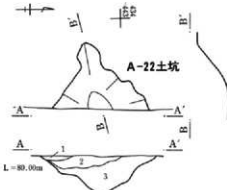


- A-1 井戸
- L=80.00m
- 1 暗灰黄色砂 鉄分を斑状に含む。
 - 2 灰黄色土 (A-19溝)

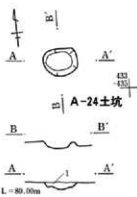


- A-2 井戸
- L=80.00m
- 1 暗褐色土
 - 2 灰黄色砂 As-Aを含む。表土。
 - 3 暗灰黄色砂 鉄分を斑状に含む。
 - 4 暗灰黄色砂
 - 5 暗褐色土 数層に分層可能。(A-22溝)

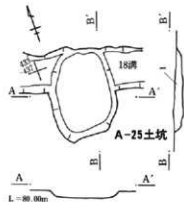
第36図「中世面」井戸



- A-22 土坑
- L=80.00m
- 1 暗灰黄色砂 少量のFP泥炭を含む。
 - 2 暗灰黄色砂
 - 3 暗灰黄色砂 粒子が細かい。



- A-24 土坑
- L=80.00m
- 1 暗灰黄色砂 鉄分を斑状に含む。



- A-25 土坑
- L=80.00m
- 1 暗灰黄色砂鉄分を斑状に含む。



- A-23 土坑
- L=80.00m
- 1 暗灰黄色砂鉄分を斑状に含む。



- A-27 土坑
- L=80.00m
- 1 暗灰黄色砂 FP泥炭や灰色粘土のブロックを含む。



- A-28 土坑
- L=80.00m
- 1 暗灰黄色砂 FP泥炭や灰色粘土のブロックを含む。



第37図「中世面」土坑(1)

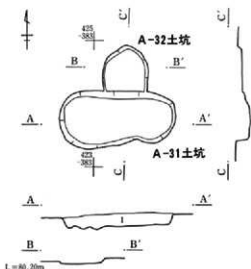
第3章 各時代の調査



- 1 黒褐色砂
- 2 暗灰黄色砂 鉄分を斑状に含む。
- 3 3+黒色粘土やF P泥流のブロック。
- 4 3+大量の黒色粘土やF P泥流のブロック。



- 1 暗褐色砂質土 炭化物粒子を含む。



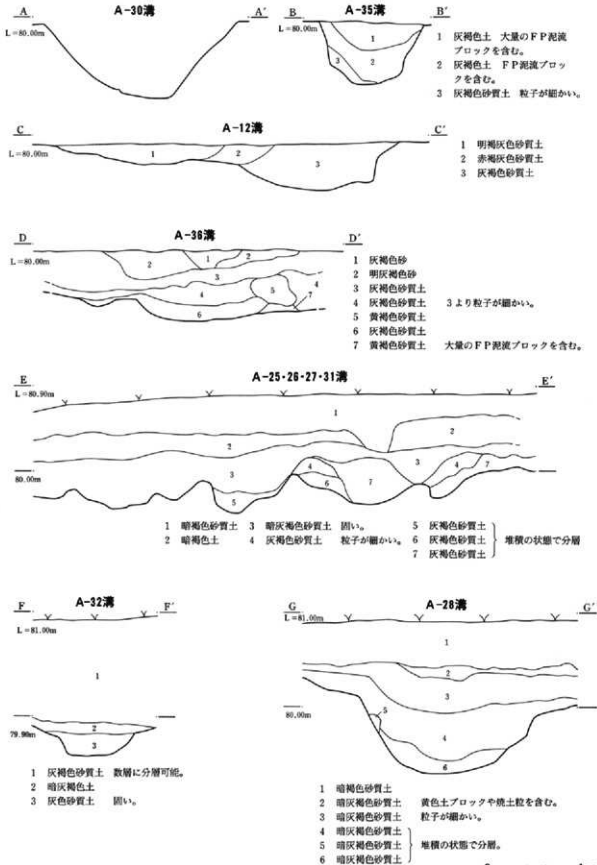
- 1 暗褐色砂質土 F P泥流ブロックを含む。

第38図「中世面」土坑 (2)



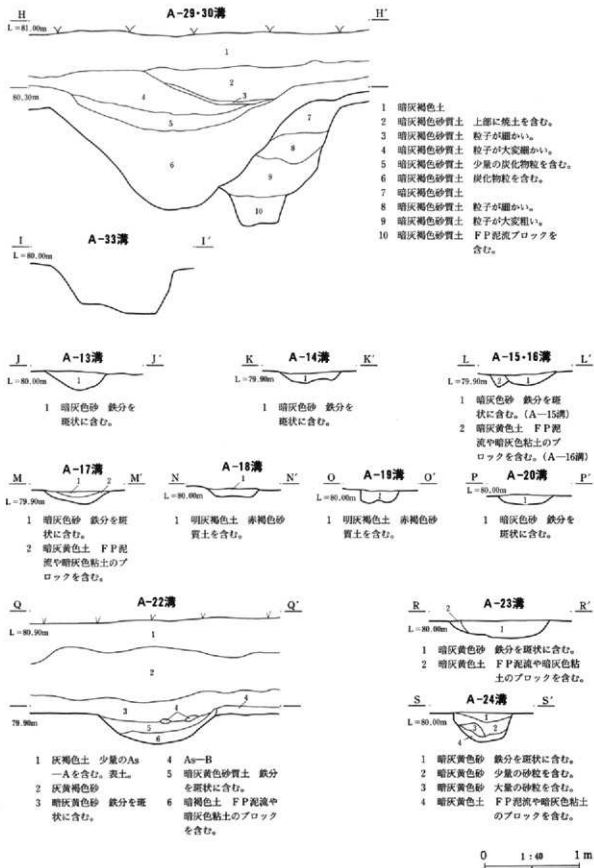
第39図「中世面」A-19墓塚

第3節 中世の遺構と遺物



第40図 「中世面」 溝断面 (1)

第3章 各時代の調査

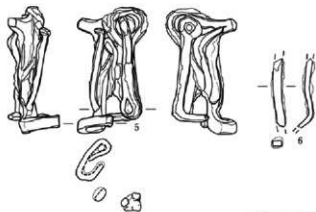
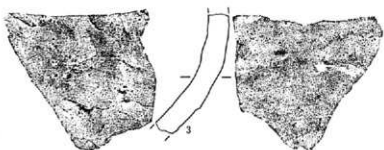


第41図 「中世面」 溝断面 (2)

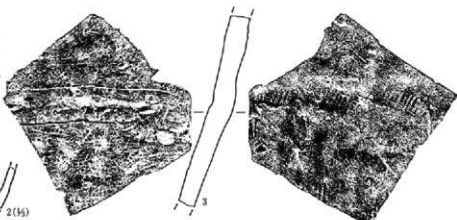
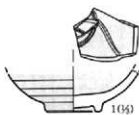
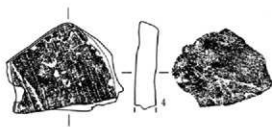
第3節 中世の遺構と遺物



A-19基壇出土



中世面溝出土



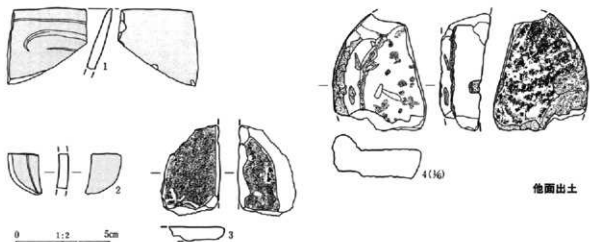
中世面溝外出土



第42図 中世の遺物(1)

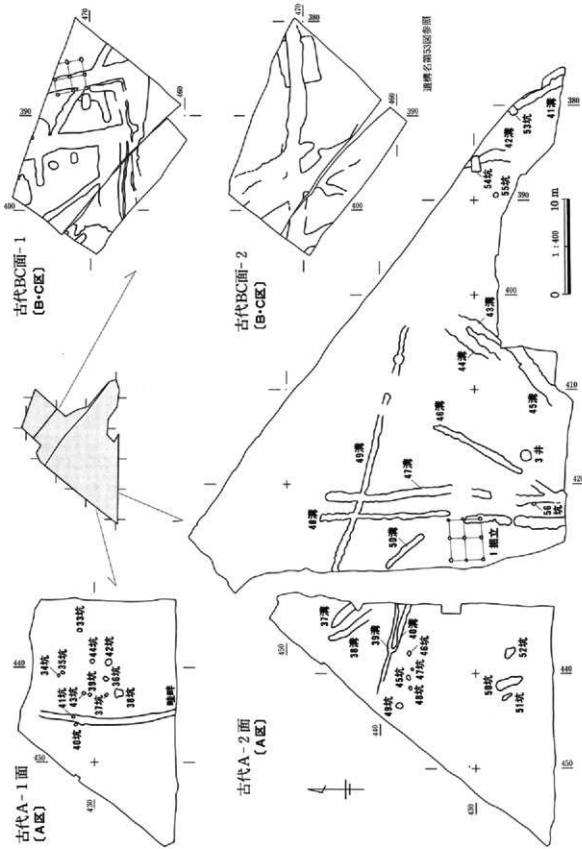
0 1:2 5cm

第3章 各時代の調査



第43図 中世の遺物(2)

第4節 古代の遺構と遺物



第44図 古代遺構配置図

第3章 各時代の調査

古代の遺構は、A区では「古代A-1面」と「古代A-2面」、B・C区では「古代BC面」で確認した。両区間でこれらの調査面の時期関係が対応できず遺構の連続性も希薄であるため、本節では調査区別に遺構や遺物を記述する。

遺物は須恵器や土師器の破片が極めて多いが、完形の灰釉陶器等も出土している。

1. 遺構

[A区]

A区では、「古代A-1面」より土坑12基と水田跡を、また下位の「古代A-2面」では掘立柱建物跡1棟、井戸1基、土坑12基、溝14条をそれぞれ確認した。なおA-1掘立柱建物、A-38・42・56土坑、A-41・42溝の埋土には暗灰色の砂粒が含まれている。この砂粒がAs-Bである場合、これらの遺構は古代末以降の所産となる。

(1) 掘立柱建物(第45図、P.L. 18)

掘立柱建物は「古代A-2面」で1棟を確認した。

A-1掘立柱建物 A区中央部の425-420・425G~430-420・425Gに位置する。東西2間×南北2間(4.55m×3.65m)の東西棟の総柱である。梁方向はほぼ北のN-1°30'-Wで、形状は平行四辺形状に歪む。中間寸法は、桁行P1・P2・P3が2.4m-1.9m、P4・P5・P6が2.4m-2.0m、P7・P8・P9が2.4m-2.0m。梁行P1・P4・P7が1.6m-1.9m、P2・P5・P8が1.6m-1.85m、P3・P6・P9が1.65m-1.95m。柱穴は長径10~30cm程度の楕円形または長方形で、深さは6~33cm。柱底は径約10cmか。柱穴埋土は砂粒を含む暗褐色土。A-48溝と重複、これより新しい。

(2) 井戸(第46図、P.L. 18)

井戸は「古代A-2面」で1基を確認した。

A-3井戸 A区南部の420-415Gに位置する。上面径1.17m、底面径54cm、深さ105cmの円形で、断面は弱い漏斗状。石組み、木枠などの痕跡はなく、素掘りの井戸である。

(3) 土坑

土坑は「古代A-1面」で12基、「古代A-2面」で12基、計24基を確認した。機能は不明である。

①「古代A-1面」(第47図、P.L. 15・16)

A-33土坑 A区中央部の430-435Gに位置する。長径0.44m、短径0.37m、深さ21cmの楕円形で、長径方位はN-0°。断面は掘り鉢状。埋土は上位が暗褐色砂質土を含む灰黄褐色砂質土、下位が明黄褐色砂質土。

A-34土坑 A区西部の430-440Gに位置する。長径0.26m、短径0.15m、深さ26cmの楕円形で、長径方位はN-71°-W。断面は掘り鉢状。埋土は明黄褐色砂質土を含む灰褐色砂質土。

A-35土坑 A区西部の430-440Gに位置する。長径0.28m、短径0.25m、深さ11cmの楕円形土坑で、長径方位はN-0°。断面は箱形。埋土は灰褐色と明黄褐色の砂質土。

A-36土坑 A区西部の425-440Gに位置する。長径0.4m、短径0.28m、深さ15cmの長方形で、長径方位はN-42°-E。断面は箱形。埋土は灰褐色と明黄褐色の砂質土。

A-37土坑 A区西部の425-440Gに位置する。長径0.4m、短径0.2m、深さ12cmの長方形で、長径方位はN-73°-W。断面は箱形。埋土は暗褐色砂質土を含む灰黄褐色砂質土である。

A-38土坑 A区西部の425-440Gに位置する。長径1.3m、短径0.78m、深さ10cmの不正形で、長径方位は

N-50'-E。断面は皿状。埋土は砂粒を含む暗褐色粘土。

A-39土坑 A区西部の430-440Gに位置する。長径0.33m、短径0.25m、深さ10cmの楕円形で、長径方位はN-81'-E。断面は箱形。埋土は暗褐色砂質土を含む灰黄褐色砂質土。

A-40土坑 A区西部の430-445Gに位置する。長径0.18m、短径0.16m、深さ10cmの長方形で、長径方位はN-24'-W。断面は摺り鉢状。埋土は暗褐色砂質土を斑状に含む灰黄褐色砂質土。

A-41土坑 A区西部の430-445Gに位置する。長径0.29m、短径0.26m、深さ10cmの不正形で、長径方位はN-85'-W。断面は摺り鉢状。埋土は暗褐色砂質土を含む灰黄褐色砂質土。

A-42土坑 A区西部の425-435Gに位置する。長径0.6m、短径0.55m、深さ7cmの円形で、長径方位はN-13'-W。断面は浅い箱形。埋土は暗褐色砂質土を含む灰黄褐色砂質土、砂粒を含む暗褐色粘土。

A-43土坑 A区西部の430-440Gに位置する。長径0.27m、短径0.22m、深さ11cmの楕円形で、長径方位はN-62'-E。断面は箱形。埋土は暗褐色砂質土を含む灰黄褐色砂質土。

A-44土坑 A区西部の430-435Gに位置する。長径0.35m、短径0.27m、深さ11cmの楕円形で、長径方位はN-83'-W。断面は摺り鉢状。埋土は暗褐色砂質土を含む灰黄褐色砂質土。

②「古代A-2面」(第47・48図、P.L. 18・19)

A-45土坑 A区西部の435-440Gに位置する。長径0.52m、短径0.36m、深さ8cmの楕円形で、長径方位はN-70'-E。断面は皿状。

A-46土坑 A区西部の435-435Gに位置する。長径0.48m、短径0.42m、深さ15cmの楕円形で、長径方位はN-68'-W。断面は摺り鉢状。

A-47土坑 A区西部の435-435Gに位置する。長径0.32m、短径0.22m、深さ18cmの楕円形で、長径方位はN-37'-W。断面は摺り鉢状。

A-48土坑 A区西部の435-440Gに位置する。長径0.36m、短径0.3m、深さ10cmの楕円形で、長径方位はN-64'-E。断面は箱形。

A-49土坑 A区西部の435-440Gに位置する。長径0.48m、短径0.3m、深さ21cmの楕円形で、長径方位はN-56'-E。断面は漏斗状。

A-50土坑 A区南西部の425-440Gに位置する。長径2.76m、短径0.76m、深さ7cmの長楕円形で、長径方位はN-21'-W。断面はごく浅い皿状。

A-51土坑 A区南西部の425-440Gに位置する。長径1.12m、短径0.2m、深さ4cmの不正形土坑で、長径方位はN-35'-W。断面は浅く、凹凸を持つ。2つの土坑が重複か。須惠器の破片が出土。

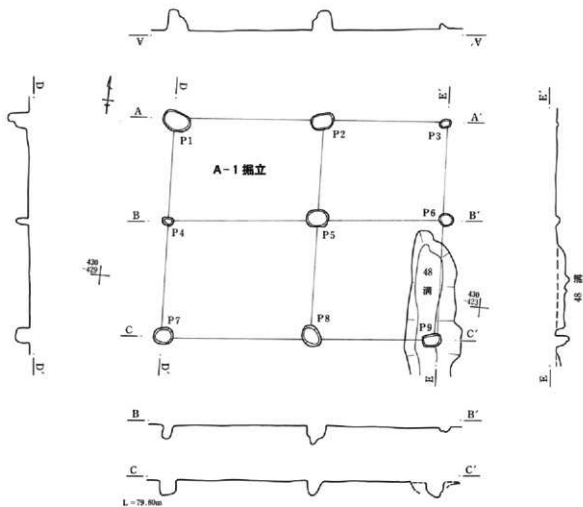
A-52土坑 A区南西部の425-435Gに位置する。長径1.32m、短径0.84m、深さ6cmの不正形土坑で、長径方位はN-55'-W。断面はごく浅い皿状。

A-53土坑 A区南東部の425-380Gに位置する。一部調査区外に懸り、短径0.6m、深さ14cmの長方形か。長径方位はN-51'-E。断面は箱形を呈する。A-41溝と重複、これより新しい。

A-54土坑 A区南東部の425-385Gに位置する。長径1.6m、短径0.84m、深さ12cmの長方形で、長径方位はN-80'-E。断面は箱形を呈する。A-42溝と重複、これより新しい。

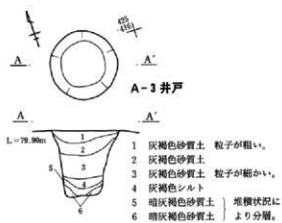
A-55土坑 A区南東部の425-385Gに位置する。長径0.4m、短径0.34m、深さ36cmの楕円形で、長径方位はN-32'-W。断面は深い摺り鉢状。

A-56土坑 A区南部の420-420Gに位置する。長径0.28m、短径0.24m、深さ24cmの楕円形で、長径方位はN-55'-W。断面は円筒状。



第45図 A-1 掘立柱建物

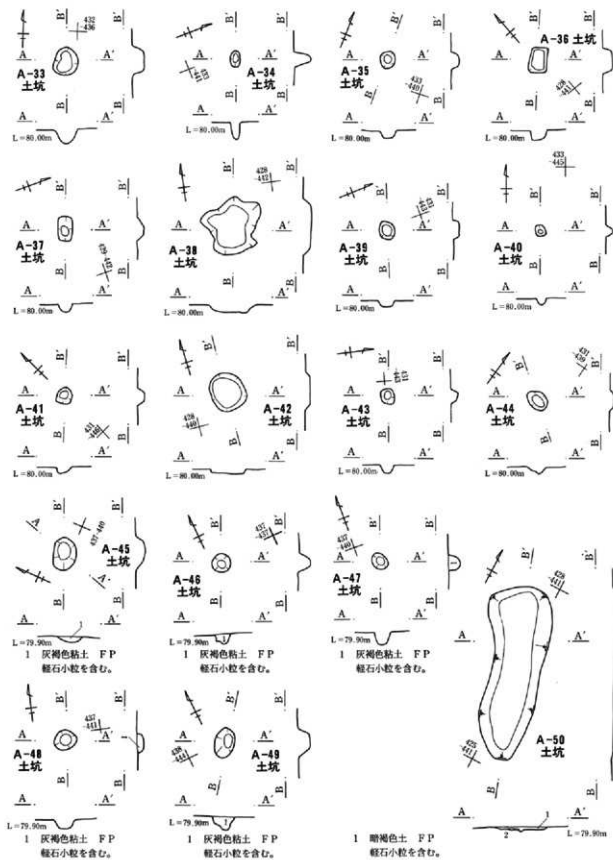
0 1 : 60 2m



第46図 A-3 井戸

0 1 : 60 2m

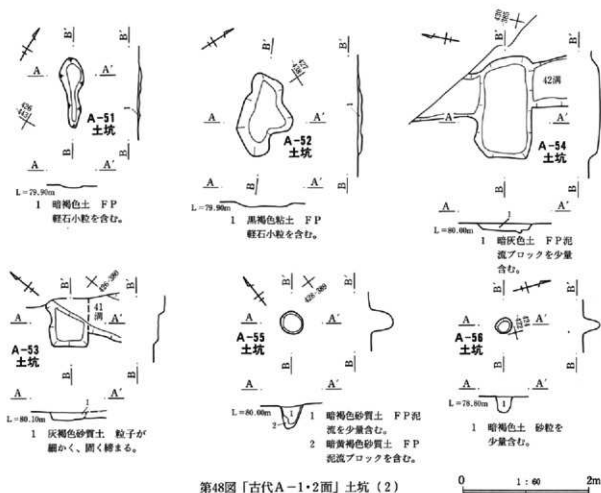
第4節 古代の遺構と遺物



第47図 「古代A-1・2面」土坑 (1)

0 1:60 2m

第3章 各時代の調査



第48図「古代A-1・2面」土坑（2）

（4）水田跡（P L. 16）

水田跡は「古代A-1面」で確認した。これは天仁元（1108）年の浅間山噴火で埋没した水田跡（As-B 下水田）と考えてよい。畦畔は1条のみである。この畦畔は緩やかに西側に張るが走向はN-0°で、確認長15m、底部幅60cm、確認面からの高さ3～5cmである。区画の規模などは不明であるが、宿横手三波川遺跡等状況から判断すると、東西、南北方向の区画が設けられていたと思われる。また、調査区の南西端から西部には円形の凹凸が確認された。これは馬蹄痕の可能性もある。

（5）溝（第49図・付図2、P L. 19・20）

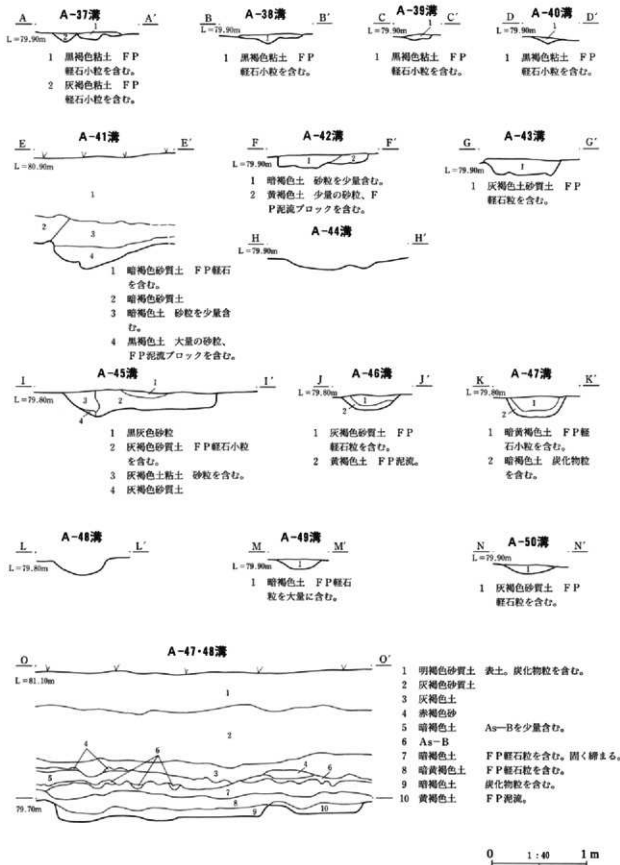
溝は「古代A-2面」で14条を確認した。このうち、A-47・48溝は直線的に南北走しており心心距離約3mで並行直線的に南北に併走し、幅や断面形もほぼ同じである。他の溝とは異なる目的を持っていたものと思われる。

A-37溝 A区北西部の440-430G～445-435Gに位置する。走向はN-40°-W。確認長3.2m、幅50～94cm、深さ8～14cmで、断面は中央に凸部を持つ浅い皿状。2条の溝が重複か。

A-38溝 A区北西部の440-430G～445-435Gに位置する。西にゆるやかに張り、全体の走向はN-34°-W。確認長5.4m、幅40～64cm、深さ3～9cmで、断面は浅い皿状。須恵器や土師器の破片が出土。

A-39溝 A区西部から中央部の435-430G～440-440Gに位置する。走向はN-78°-W。確認長9.7m、幅

第4節 古代の遺構と遺物



第49図「古代A-1・2面」清晰面

第3章 各時代の調査

20~40cm、深さ5~12cmで、断面は浅い箱形。A-40溝が分岐、埋土から同時期か。

A-40溝 A区中央部の435-430G~435-445Gに位置する。走向はN-72'-W。確認長5.3m、幅24~56cm、深さ6~10cmで、断面は浅い皿状。A-40溝と同時期か。

A-41溝 A区南東部の425-375・380G~420-375Gに位置する。走向はN-30'-W。確認長5.8m、幅70~90cm、深さ33~48cmで、断面は皿状。A-53土坑と重複、これより古い。土師器の破片が出土。

A-42溝 A区南東部の425-380・385G~430-385Gに位置する。東に緩やかに張り、全体の走向はN-13'-W。確認長4.6m、幅64~110cm、深さ18~22cmで、断面は箱形。A-54土坑と重複、これより古い。須恵器や土師器の破片が出土。

A-43溝 A区南東部の430-400G~425-400・405Gに位置する。走向はN-30'-E。両端部とも不明瞭だが、確認長5.6m、幅50~120cm、深さ25~27cmで、断面は逆台形。南端でA-45溝と、北端でA-44溝と合するか。新旧関係は不明。須恵器や土師器の破片が出土。

A-44溝 A区南東部の425-403G~430-400Gに位置する。走向はN-40'-E。南北両端部とも不明瞭だが、確認長7.5m、幅70~150cm、深さ9~12cmで、断面は浅い皿状。A-43溝との新旧関係は不明。須恵器や土師器の破片が出土。

A-45溝 A区南端の420-410G~425-405Gに位置する。走向はN-53'-E。南端は不明瞭だが、確認長6.5m、幅120~170cm、深さ2~9cmで、断面は箱形。A-43溝との新旧関係は不明。

A-46溝 A区南部から中央部の420-420G~430-410Gに位置する。東に緩やかに弧状に張り、全体的な走向はN-30'-E。北端は完結し、確認長14.5m、幅50~80cm、深さ8~14cmで、断面は逆台形。南部でA-47溝と合流、新旧関係は不明。土師器の破片が出土。

A-47溝 A区南端から北部の420-420G~445-420Gに位置し、直線的に南北走し、走向はN-0'。両端とも不明瞭だが、確認長25.2m、幅70~100cm、深さ3~37cmで、断面は逆台形。北部でA-49溝と交差、南部でA-46溝と合流、それぞれ新旧関係は不明。須恵器や土師器の破片が出土。

A-48溝 A区南端から北部の420-420G~445-420Gに位置する。直線的に南北走し、走向はN-0'。北端は不明瞭、中央部は中断するが、確認長26.2m、幅50~120cm、深さ6~21cmで、断面は逆台形。A-49溝と交差、新旧関係は不明。須恵器、土師器の破片が出土。

A-49溝 A区東部から中央部の440・445-425G~435-400Gに位置する。走向はN-73'-W。確認長27.0m、幅40~80cm、深さ4[±]-14cmで、断面は浅い皿状。A-47・48溝との新旧関係は不明。陶器、須恵器、土師器の破片が出土。

A-50溝 A区の中央部の435-425Gに位置する。走向はN-40'-W。両端とも完結し、確認長5.1m、幅60~120cm、深さ3~9cmで、断面は皿状。

[B・C区]

B・C区では、竪穴式住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、土坑5基、溝15条を確認した。

このうちの竪穴式住居1軒、掘立柱建物1棟、土坑5基、溝10条の埋土には暗灰色の砂粒が大量に含まれている。溝のなかにはほぼ東西-南北方向にL字状に折れ曲がったものが数条あり、その他の遺構も方向がほぼ同一であることで互いに関連するものと思われ、居館の隅部分である可能性が高い。

一方、その他の住居1軒、溝5条は、重複関係から前述した遺構群の時期を通り、埋土にも砂粒が含まれていないことで共通している。

これらの遺構のうち、埋土に砂粒を含む遺構群を「古代BC面-1」、これらを通る遺構群を「古代BC面-2」と呼ぶ。なお、「古代BC面-1」の埋土に含まれる砂粒がAs-Bである場合、この遺構群は古代末以降の所産となる。

(1) 住居跡(第50図、P.L. 22)

竪穴式住居跡は「古代BC面-1」に属するもの1軒、「古代BC面-2」に属するもの1軒、計2軒確認した。いずれも完形ではなく、残存状態も良好ではない。

①「古代BC面-1」

BC-1 住居 B・C区北西部の475-395Gに位置する。北半が調査区外に懸かり、東西軸3.6m、壁高約25cmで、平面形は略方形か。竪は東壁南部にあり、主軸方位はN-85°-Eか。床面は凹凸を持ち、踏み締まりは弱い。竪は東壁を長楕円形に掘り込む。火床部から東壁付近の底部には炭化物の薄層が残存。須恵器碗、提瓶、土師器甕の破片などが出土。混入の可能性もある。

②「古代BC面-2」

BC-2 住居 B・C区東部の465-380・385G～470-380・385Gに位置する。BC-10溝に中央部を大きく壊され、南北軸5.1m、東西軸4.1m、壁高18cmで、平面形は長方形。東壁南よりに炭化物で埋まる不正形の窪みがあり、この付近に竪が存在したか。東西軸方位はN-80°-Eか。床面はほぼ平坦、踏み締まりはやや弱い。壁下溝は北壁から西壁を経て南壁の中央部にある。BC-10溝より古い。土師器、須恵器の破片が出土。混入の可能性が高い。

(2) 掘立柱建物跡(第51図、P.L. 23)

掘立柱建物跡は、「古代BC面-1」に属する1棟を確認した。

BC-1 掘立柱建物 B・C区北東部の470-380G～470-385Gに位置する。北東部が調査区外に懸かるが、南北2間×東西2間(3.15m×3.2m)の総柱か。形状はほぼ正方形。南北軸方向はN-18°-W。柱間寸法は、南北方向P1・P3・P6が1.75m-1.4m、P2・P4・P7が1.55m-1.55m、P5・P8が1.5m。東西方向P1・P2が1.6m、P3・P4・P5が1.5m-1.65m、南列P6・P7・P8が1.5m-1.6m。柱穴掘り形は15～20cm、深さ2～10cmの方形または楕円形。柱痕は平径約10cm程か。BC-1溝と重複、新旧関係は不明。

(3) 土坑(第52図、P.L. 23)

土坑は「古代BC面-1」に属する5基を確認した。いずれも機能は不明であるが、残存状態の良い灰釉陶器皿や須恵器碗などが出土したものもある。

BC-1 土坑 B・C区西端の470-400Gに位置する。調査区外に懸かり、短径0.55m、深さ12cmの隅丸長方形か。長径方位はN-42°-W。断面は皿状。

BC-2 土坑 B・C区西端の470-400Gに位置する。調査区外に懸かり、短径0.4m、深さ22cmの楕円形か。長径方位はN-45°-W。断面は掘り鉢状か。完形の須恵器碗が出土。

BC-3 土坑 B・C区東部の470-385Gに位置する。長径1.54m、短径0.72m、深さ24cmの長方形で、長径方位はN-87°-E。断面は箱形。BC-4溝と重複、新旧関係は不明。須恵器、土師器の小破片が出土。

BC-4 土坑 B・C区中央部の470-390Gに位置する。長径1.0m、短径0.58m、深さ8cmの隅丸長方形で、長径方位はN-79°-E。断面は浅い皿状。須恵器片が出土。

第3章 各時代の調査

BC-5土坑 B・C区北部の470-390~395Gに位置する。長径0.9m、短径0.84m、深さ20cmの楕円形で、長径方位はN-9°-E。断面は浅い楕円鉢状。完形の灰軸陶器皿、須恵器高脚高台付碗が出土。

(4) 溝(第53図、P.L. 24・25)

溝は「古代BC面-1」に属するもの10条、「古代BC面-2」に属するもの5条、計15条を確認した。このうち「古代BC面-1」の溝のなかには、ほぼ東西-南北方向にL字状に屈曲する溝が数条あることが注目される。深さは15cm未満と浅いが、幅1.5mの広いもの(BC-1・7溝)と、幅70cm前後の狭いもの(BC-4・6・16溝)とが平行しており、その他のものも直線的に東西走または南北走している。この状況から、この溝群は居館の周壕の南東隅部分である可能性が高い。多くの溝が相互に平行したり、交差したりする状態は、周壕を数次にわたり改修した可能性を示唆している。

一方、「古代BC面-2」の溝のうち、BC-10溝は直線的に東西走する大規模なものである。さらにBC-2住居を壊していることから、何らかの特別な機能を持っていた可能と考えられる。

遺物はすべての溝から須恵器、土師器の破片が多数出土している。しかし、これらは古代全般に及んでいるため、遺構の年代決定には至らなかった。

なお、これらの溝は形状が不明瞭なものも多く、殆どで新旧関係はつかめなかった。そのため本来は同一の溝を別個のものと認識した等の可能性もある。(各溝の記載には、煩雑さを避けるために溝相互の合流や交差等の記述は省略し、新旧関係は判る場合のみ記した。)

①「古代BC面-1」

BC-1溝 B・C区東部の460-385・390G~470-385Gに位置する。東西-南北方向にL字型に屈曲、西端部は終結し、屈曲部付近が調査区外に懸かる。走向は南北部分がN-11°-W、465-385G付近から西の東西部分がN-90°。確認長15.7m、幅124~216cm、深さ12~20cmで、断面は浅い箱形。BC-3溝より新しい。

BC-2溝 B・C区東部から西部の465-385G~465-400Gに位置する。東西-南北方向にL字型に屈曲し、走向は南北部分がN-6°-W、469-386G付近から東西部分がN-79°-W~N-90°。確認長16.4m、幅44~115cm、深さ5~12cmで、断面は浅い箱形。BC-6・16溝より古い。

BC-3溝 B・C区東部端から北部の465-380G~470-390Gに位置する。走向はN-58°-W。確認長、11.0m、幅52~90cm、深さ5~18cmで、断面は浅い箱形。BC-1溝より古い。

BC-4溝 B・C区中央部の465-385・390G~470-385Gに位置する。東西-南北方向にL字型に屈曲するし、走向は南北部分がN-0°、469-388G付近から西の東西部分がN-74°-E。南北部分が不明確だが、確認長4.6m、幅64cm以上、深さ8cmで、断面は浅い箱形。

BC-5溝 B・C区中央部から北端の465-390G~475-390Gに位置する。走向はN-7°-W。中央部が長方形の浅い部分を持つ。確認長11m、幅140~180cm、深さ7~15cmで、断面は箱形。

BC-6溝 B・C区中央部から西端の465-390G~465-400Gに位置する。走向はN-90°。確認長8.0、幅35~60cm、深さ2~9cmで、断面は逆台形。BC-2・7溝より新しい。櫃の破片が出土。

BC-7溝 B・C区中央部から西部の465-390G~470-400Gに位置する。東西-南北方向にL字型に屈曲か。走向は南北部分がN-0°、467-401G付近から東の東西部分がN-90°。確認長さ12.8m、幅84~236cm、深さ7~12cmで、断面は浅い逆台形。BC-6溝より古い。須恵器高台付碗等の破片が出土。

BC-8溝 B・C区中央部から中央部の465-395G~470-400Gに位置する。走向はN-36°-W。確認長7.1m、幅34~64cm、深さ1~10cmで、断面は浅い皿状。

第4節 古代の遺構と遺物

BC-9溝 B・C区北部の470・475-390G~470・475-395Gに位置する。走向はN-90°。西側は狭まり、西端部は終結。確認長7.3m、幅50~120cm、深さ1~40cmで、断面は逆台形。土師器甕の破片が出土。

BC-16溝 B・C区南部の460-390G~465-395Gに位置する。全体的な走向はN-88°-W。東端部で鍵の手状に屈曲。西端部が不明瞭だが、確認長7.2cm、幅46~90cm、深さ2~6cmで、断面は浅い皿状を呈する。

BC-2溝より新しい。

②「古代BC面-2」

BC-10溝 B・C区東端部から西端部の465-380G~465-400Gに位置する。直線的に東西走し、走向はN-90°。確認長23.5m、幅134~236cm、深さ7~59cmで、断面は逆台形。BC-2住居より新しい。この時代の須恵器碗、古墳時代の須恵器の破片が出土。

BC-11溝 B・C区東端部から南部460-390G~475-400Gに位置する。走向はN-37°-W。確認長15.2m、幅200~346cm、深さ28~45cmで、断面は箱形。古墳時代の須恵器、土師器の破片が出土。

BC-12溝 B・C区中央部から北東隅の465-390G~475-395Gに位置する。走向はN-29°-W。南東端は終結し、確認長9.2m、幅112~172cm、深さ2~23cmで、断面は浅い皿状。BC-10溝との新旧関係は不明。

BC-14溝 B・C区西端部の465-400G~470-400Gに位置する溝である。走向はN-26°-W。確認長3.3m、幅133~183cm、深さ8~23cmで、断面は箱形を呈する。

BC-15溝 B・C区南西部の465-395Gに位置する溝である。走向はN-14°-E。確認長3.1m、幅40~126cm、深さ7~24cmで、断面は箱形。

2. 遺物(第54図、P.L. 65・66)

この時代の遺物としては、須恵器や土師器の破片が多数出土している。殆どが小破片のため器形が特定できないものが多く、さらに古墳時代のもも多数含まれていると思われるが分別はできない。しかし、土坑からは灰軸陶器皿や須恵器高台付碗など残存度の良いものも出土している。

(1) 古代面住居出土遺物

「古代BC面-1」に属する竪穴式住居跡からの出土である。

①BC-1住居出土遺物

1・2は須恵器高台付碗の底部片である。1は底(5.2)cm。付け高台は低く、ゆるく外に開く。断面は略三角形。轆轤整形。回転糸切り。胎土は黄灰色。2は底(8.0)cm。付け高台は著しく歪む。肥厚で断面は矩形。轆轤整形。回転糸切り。胎土は灰白色。

3は須恵器長頸壺の頸部片である。頸部に凹線1条が巡る。轆轤整形。

4は土師器甕の底部片か。底(9.2)cm。摩耗著しく整形痕は不明瞭。酸化焼成。胎土は鈍い橙色。

(2) 古代面土坑出土遺物

いずれも「古代BC面-1」に属する土坑からの出土である。

①BC-2土坑出土遺物

1は須恵器高台付碗である。完形で口13.8cm、底6.8cm、高5.2cm。腰部はわずかに張る。体部はやや反して開き、口縁部は肥厚。付高台はやや低く「ハ」の字状に開く。断面は矩形。轆轤整形。回転糸切り。内外面は吸炭。胎土は灰色。

②BC-5土坑出土遺物

第3章 各時代の調査

1は須恵器高脚高台付碗である。1/2残存で、口(17.0)cm、底12.9cm、高12.8cm。体部は丸く、口唇部は僅かに外反する。脚は外反気味に開き、裾は強く外反する。轆轤整形。高台内吸炭。胎土は鈍い黄橙色。

2は灰釉陶器皿である。完形で、口13.3cm、底6.9cm、高2.6cm。全体が歪む。体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。内外面の調整は荒い。付け高台は低く、断面は略三角形。漬け掛け施釉。胎土は灰白色。

(3) 古代面溝出土遺物

①から③は「古代BC面-1」、④は「古代BC面-2」に属する溝からの出土である。

①BC-6 溝出土遺物

1は須恵器甕の口縁部片であろう。罎は高く水平に突出し、断面は略三角形。一部下方に歪む。胎土は鈍い橙色。

②BC-7 溝出土遺物

1・2ともに須恵器である。1は碗の底部片。底(6.1)cm。付け高台は「ハ」の字状に開き、断面は略三角形。端部は丸い。轆轤整形。内外面とも摩耗する。胎土は鈍い黄橙色。2は碗の底部片。底(7.0)cm。内外面とも摩耗し、整形痕は不明瞭。底部は回転糸切りか。胎土は灰白色。

③BC-9 溝出土遺物

1は須恵器甕の底部片か。底8.1cm。高台は緩く「ハ」の字状に開き、端部は破損。轆轤整形。胎土は灰白色。

④BC-10 溝出土遺物

1は須恵器碗である。完形で、口11.0cm、底5.2cm、高4.2cm。体部丸く、口縁部は外反する。口唇部は丸い。轆轤整形。右回転糸切り。胎土は鈍い黄橙。酸化焼成。

(4) 古代面遺構外出土

①「古代A-2面」遺構外出土。

1は用途不明金属製品である。長4.7cm、短1.6cm、厚1.1cm、重16.5g。

②「古代BC面」遺構外出土

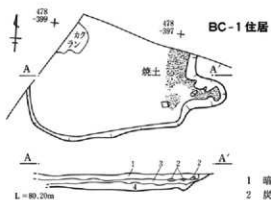
1は用途不明金属製品である。径0.5mm。角釘か。

2は砥石である。長8.8cm、短3.2~3.5cm、厚2.6~2.8cm、重84g。粗粒輝石安山岩。

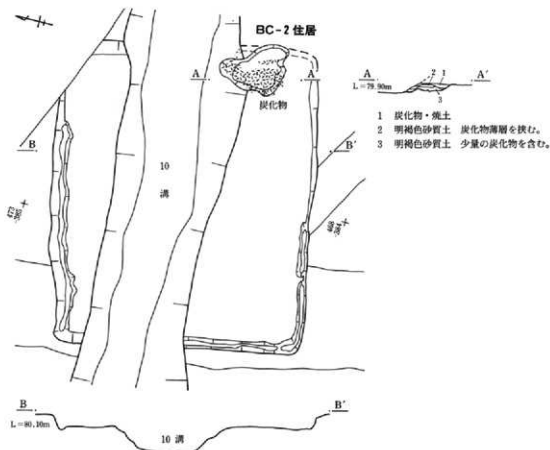
(6) 他面出土

1は須恵器長頸壺の体部片である。胴(14.0)cm。体部は「く」の字状に強く屈曲。轆轤整形。下体部は回転篋ケズリ。胎土は灰白色。「中世面」A-12溝出土。

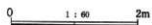
2は須恵器短頸壺の口縁部から底部片である。1/2残存で口6.8cm、胴11.2cm、底7.0cm、高6.6cm。体部は丸く、口縁部は短く立ち上がり口唇部は丸い。内面、吸炭。轆轤整形。回転糸切り。胎土は鈍い黄橙色。酸化焼成。「近世面」A-11土坑出土。



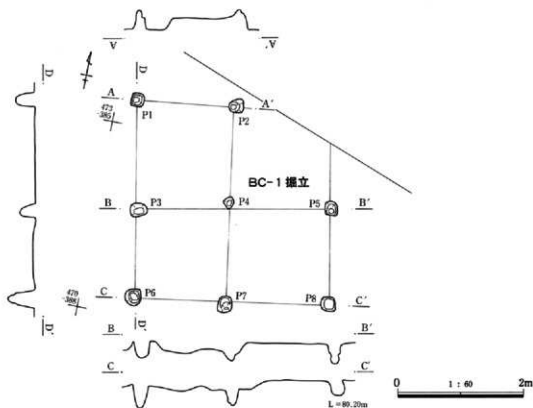
- | | |
|----------|----------------|
| 1 暗褐色土 | F P軽石小粒、砂粒を含む。 |
| 2 炭化物・焼土 | |
| 3 褐灰色土 | F P軽石小粒、砂粒を含む。 |
| 4 褐灰色土 | 砂粒を大量に含む。 |



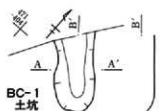
- | | |
|----------|------------|
| 1 炭化物・焼土 | |
| 2 明褐色砂質土 | 炭化物薄層を挟む。 |
| 3 明褐色砂質土 | 少量の炭化物を含む。 |



第50図「古代BC面」竪穴式住居



第51図「古代BC面」掘立柱建物



BC-1
土坑

L=80.10m

1 灰褐色粘土+砂粒を大量に含む灰褐色土



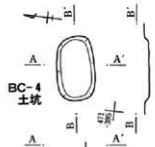
L=80.20m
1 黒灰色砂粒 灰褐色粘土、F P軽石 小粒を含む。



BC-2
土坑

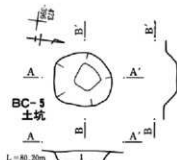
L=80.10m

1 灰褐色シルト 砂粒を少量含む。
2 灰褐色砂質土 F P軽石小粒を含む。



BC-4
土坑

L=80.20m
1 灰褐色土 砂粒、F P軽石を少量含む。

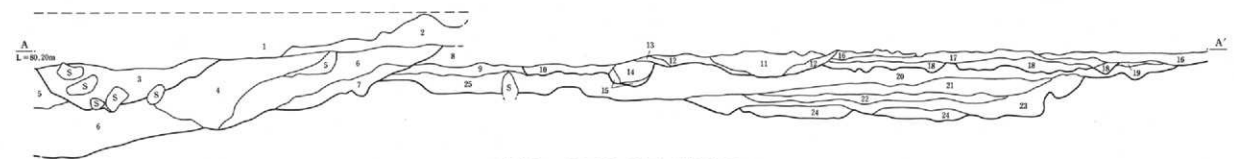
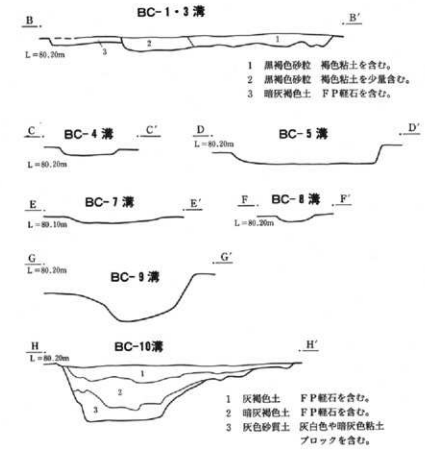
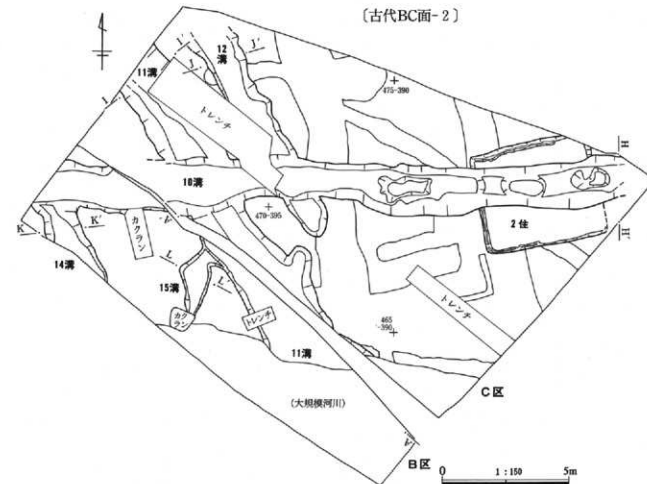
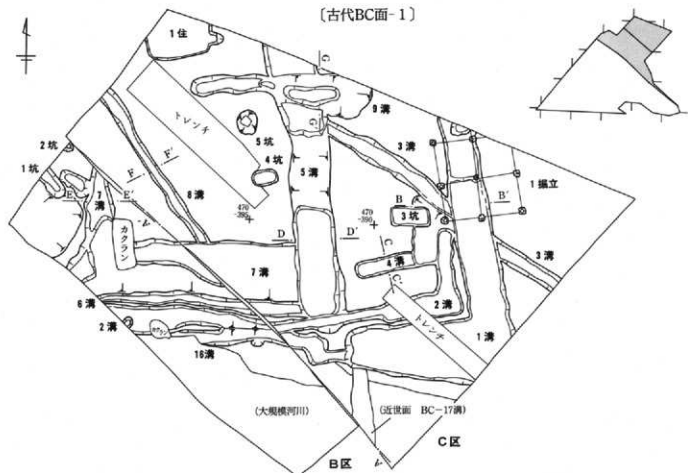


BC-5
土坑

L=80.20m
1 灰褐色土 砂粒、F P軽石を少量含む。

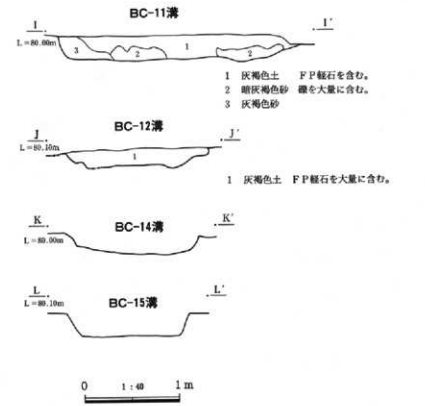
0 1 : 60 2m

第52図「古代BC面」土坑



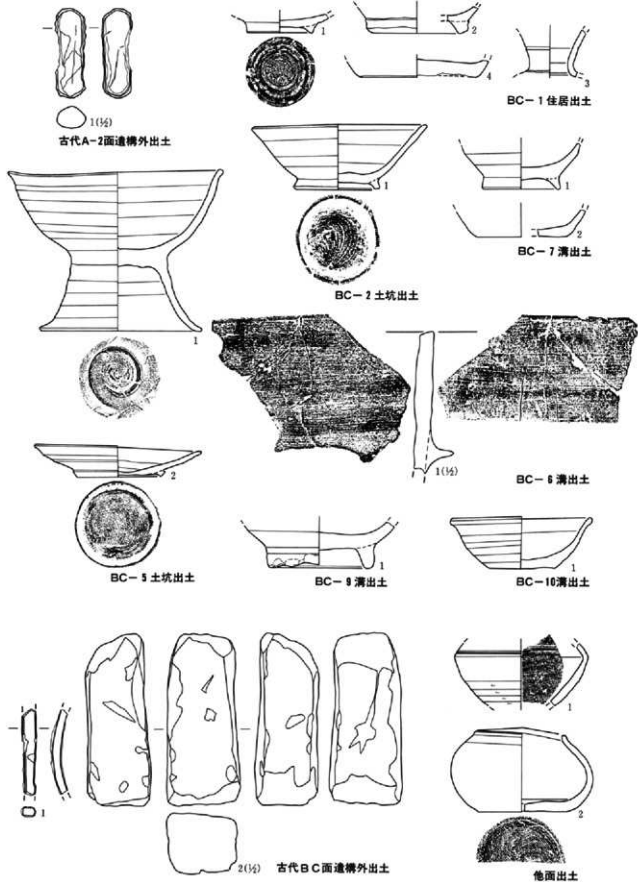
- | | | |
|------------------------------|-------------------------------|-----------------------|
| 1 暗灰褐色土 炭化物を少量含む。 | 11 暗褐色土 大量の砂粒、F P軽石、灰褐色粘土を含む。 | 19 暗褐色土 砂粒を含む。 |
| 2 灰褐色砂質土 | 12 灰褐色土 砂粒、F P軽石、明灰褐色土を含む。 | 20 灰褐色砂質土 F P軽石を少量含む。 |
| 3 暗灰褐色砂質土 炭化物、砂礫を含む。(BC-17溝) | 13 暗灰褐色土 砂粒、F P軽石、灰褐色粘土を含む。 | 21 灰褐色砂質土 (F P軽石) |
| 4 灰褐色粘土 灰色粘土ブロック、砂粒を含む。 | 14 暗褐色土 大量の砂粒、褐色土を含む。 | 22 灰褐色砂質土 F P軽石を含む。 |
| 5 灰褐色砂質土 | 15 褐色土 砂粒を含む。 | 23 暗褐色砂礫 (F P軽石) |
| 6 灰褐色砂質土 炭分を態状に含む。 | 16 灰褐色土 砂粒、F P軽石小粒を含む。 | 24 暗褐色砂礫 (F P軽石) |
| 7 灰褐色砂質土 F P軽石小粒、灰色砂を含む。 | 17 暗褐色土 大量の砂粒、F P軽石小粒を含む。 | 25 灰褐色土 |
| 8 灰褐色砂質土 F P軽石小粒を少量含む。 | 18 暗褐色砂 褐色土を含む。 | |
| 9 灰褐色土 明褐色土ブロックを含む。 | | |
| 10 灰褐色土 (BC-16溝) | | |

第53図「古代BC面」全体図



0 1:40 1m

第4節 古代の遺構と遺物



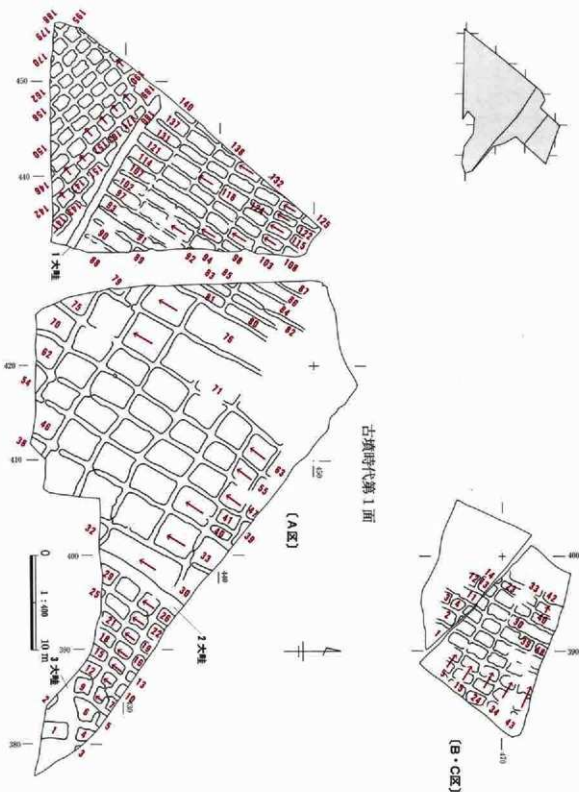
第54図 古代の遺物

第5節 古墳時代の遺構と遺物

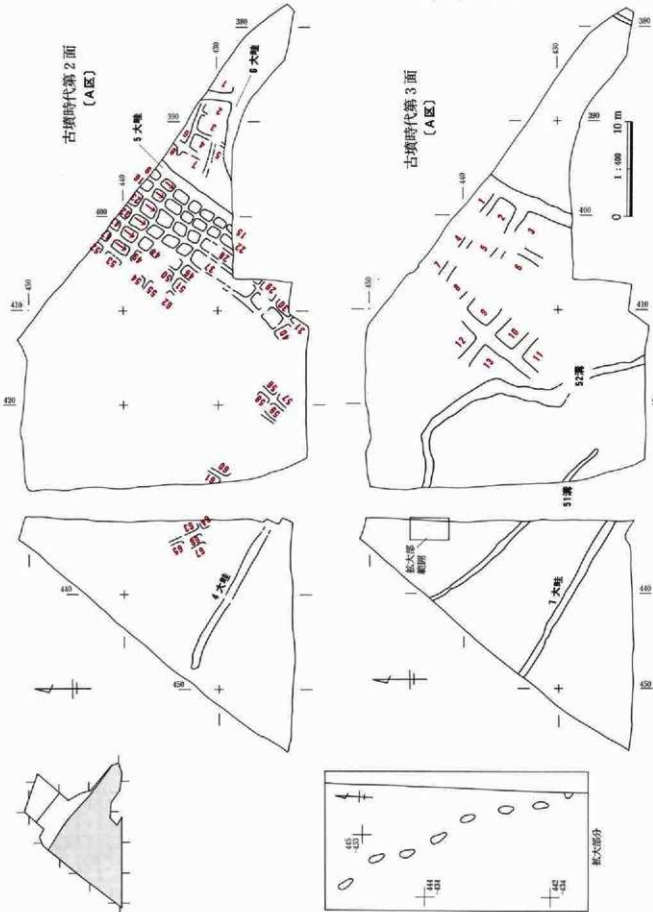
古墳時代の遺構は「古墳時代第1面」から「古墳時代第4面」までの四時期のものがある。各面から水田跡、また「古墳時代第3面」からは溝2条がそれぞれ確認されている。

遺物は、須恵器、土師器の小破片が出土している。

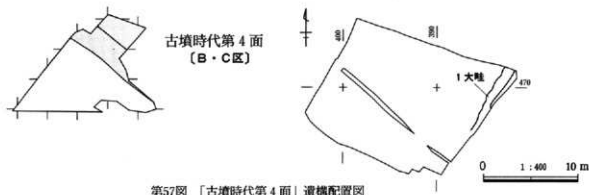
第55図 古墳時代第1面遺構配置図



第5節 古墳時代の遺構と遺物



第56図 「古墳時代第2・3面」遺構配置図



第57図 「古墳時代第4面」遺構配置図

1. 遺構

(1) 水田跡

水田跡は古墳時代の各面で確認した。それぞれの名称は調査の際に手掛かりとなった層名を用い、上位からHr-FP下水田、Hr-FA下水田、As-C混土上水田、As-C下水田とした。

このうちHr-FP下水田は全区で、またHr-FA下水田はA区のみで確認した。両者ともいわゆる「小区画水田」の形態であり、大型畦畔（オオアゼ）によって広い区画（大区画）に区切り、それぞれの内部に規模の小さい区画（小区画）多数を設けている。

また、As-C混土上水田はA区で確認した。残存度は悪いが、上位二面とは異なった構造が確認できた。さらに、最下位のAs-C下水田はB・C区の一部でオオアゼの可能性もある高まり1条を確認した。具体的な区画の規模などは不明である。

これら4時期の水田跡を概観すると、まず、北西から南東へ緩やかに低くなっていく地形の傾斜方向に合わせ、N-40°~50°-W前後の傾きで区画を設けている点が特徴である。用水路は見られないが、この方向で配水されていたと考えられる。

次に、各水田跡を通じオオアゼが同位置に設けられていることにも気付く。A区ではHr-FP下水田とHr-FA下水田のそれぞれのオオアゼが同位置に設けられている。さらに、As-C混土上水田のオオアゼと思われる畦畔も同位置で確認できた。このことは古墳時代を通じて同じ大区画が踏襲されたことを示唆している。（第58図）

①Hr-FP下水田（第55図・付図3、P.L. 26~28）

「古墳時代第1面」の全区で確認した。これは6世紀中葉のHr-FP噴火当時の水田面である。水田耕土はA区では明灰色粘土（A区10層）、B区では灰色シルト（B・C区5層）で、水田床土は確認できない。

〔A区〕 オオアゼ3条（A-1~3大畦）で4つの大区画に区切られ、小区画は推定195を数える。オオアゼのうちA-1大畦は傾斜方向に沿ったもの、またA-2大畦は等高線方向に沿ったものとなる。

各大区画内を観察すると、まずA-1大畦の南の大区画内では、各小区画（No141~195）は長径方位がN-39°~51°-W、長径1.1~1.9m、短径0.9~1.4m、面積は1.0~2.3m²前後の規模である。南東に向かい徐々に長径が長くなる傾向にあるが、他の大区画と比べ均一に造られている。長径方位がA-1大畦の走行と異なるため、このオオアゼすなわち南側では形状が台形を呈している。さらに、これらとオオアゼとの間には隙間を設けている。この隙間を配水に利用した可能性もある。

次に、A-1大畦とA-2大畦に挟まれた大区画内では、長径方位N-28°~38°-Eで小区画を設けてい

る。しかし、それぞれの規模は大きく二つの部分で異なっている。まず、中央部から東側では小区画(No30～79)の規模は一定しない。しかし、長径4.5m、短径3.5m、面積16㎡前後のものを最大に、この水田跡のなかでは最大規模の小区画を設けている。また、A-2大畦すぐ西には周囲のものよりの2倍以上の長径を持つ小区画(No31)がある。このような小区画は水路の機能を持つ事例があるが、一区画のみの確認であるため断定はできない。これに対し、西側では短径1m前後、長径2.5m～3m以上の細長い小区画(No80～140)が見られる。このうちA-1大畦すぐ北のものは特に長径が長く、大部分がこのオアゼと隙間を設けている。

以上の状況から、この大区画内にはいわば「中区画」ともいべき小区画のまとまりを設けていた可能性が高い。なお、これら二つの部分を区切る畦畔は他の小区画のものと変わらず、またこの畦畔を挟んで著しい高低差も見られない。

また、A-2大畦とA-3大畦に挟まれた大区画内では、小区画(No3～29)はA-3大畦の付近で形状が歪み、その他長径方位や規模は一定しない。この部分は、確認面積が狭いために全体像は把握できない。

一方、A-3大畦は形状が不明瞭で、その南部が台地上に高まっている。この部分に南北方向の小区画(No1・2)が見られ、この南東部には他とは異なった構造の大区画が展開する可能性もある。

A-1大畦 A区南部から西部の420-430G～430-445Gに位置する。直線的で、走向はN-59°-W。北西端は完結。確認長18.6m、底部幅60～100cm、確認面からの高さ16～18cm。

A-2大畦 A区東部の425-400G～435-390Gに位置する。直線的で、走向はN-35°-E。

確認長10.0m、底部幅118～136cm、確認面からの高さ9.5cm。

A-3大畦 A区東部の420-380G～420-385Gに位置する。走向はN-75°-E。確認長7.7m、底部幅80～336cm、確認面からの高さ10cm。不定形で、南部が台地状に高まる。

〔B・C区〕 小区画は推定48を数える。長径方位は約N-28°-Wを示し、長径1.8～2m、短径1.1～1.2m、面積2.2～2.4㎡前後の規模である。位置的にはA区のA-1大畦とA-2大畦間の大区画内に属すると考えられるが、断定はできない。

②Hr-FA下水田 (第56図・付図3、P.L. 29・30)

「古墳時代第2面」のA区で確認した。Hr-FAの残存状態が悪く、大部分でこの層と確認面の灰色粘土(以下A区12層)との土色の違いによる確認となった。この水田跡は6世紀初頭のHr-FA噴火当時の水田面であり、A区12層は水田耕土となる。オアゼ3条(A-4～6大畦)で4つの大区画に区切られており、小区画は推定67を数える。これらのオアゼの位置は上位のHr-FP下水田のものと一致している。小区画は2つの大区画内に部分的に残存するのみであるが、確認できた範囲では、それぞれの規模はHr-FP下水田とは異なっている。まず、A-4大畦とA-5大畦に挟まれた大区画内を見ると、特に東部のA-5大畦付近が残存がよい(No9～55・62)。長径方位はN-28°-Eで、長径1.5～1.7m、短径0.9～1.3m、面積2.2～2.6㎡前後である。また、南部や中央部にこれらと同一方向の小区画(No56～61)が見られる。完形ではないが、規模も同等になると推測できる。これらは、いずれもHr-FP下水田の同部分の小区画より小さいものとなる。一方、現水路以西の小区画(No63～67)は、長径方位がN-18～25°-Wを示し、前述した部分のものと90度の差異がある。Hr-FP下水田の同位置の大区画内では東部と西部で小区画の面積が異なっていたが、ここではその他に方向性も違えて小区画を設けていた可能性が考えられる。

また、A-5大畦とA-6大畦に挟まれた大区画では、小区画(No1～8)が見られるものの、完形のものも確認できなかった。

第3章 各時代の調査

A-4大畦 A-1大畦と同位置。直線的で、走向はN-61°-W。北西端は完結。確認長16.0m、底部幅66~90cm、確認面からの高さ12cm。

A-5大畦 A-2大畦と同位置。直線的で、走向はN-36°-E。確認長9.9m、底部幅100cm、確認面からの高さ1.5~5.7cm。

A-6大畦 A-3大畦と同位置。走向はN-75°-E。形状は不明瞭。

③As-C混土上水田(第56図・付図3、P.L. 31・32)

「古墳時代第3面」のA区で確認した。区画は東部で残存しており推定13を数える。完形のものはないが短径は2.4mである。また畦畔の高まりは5cm前後であるが、底部幅は15cm前後と上位二面の「小区画水田」に比べて規模は大きい。南部から西部では、上位二面の水田のオオアゼと同位置の大型畦畔を確認した。付近には区画が残存していないが、この畦畔もオオアゼである可能性が高い(A-7大畦)。一方、東側にはやはり上位二面と同位置に畦畔が見られる。しかし、これは周囲の畦畔とほぼ同規模で、オオアゼであるかは断定できない。

また、北部には一部では洪水層と思われる砂層が堆積しており、これを除去したところ連続する人の足跡を確認した。その他、残存度が低いためこの水田の全体像は不明であるが、上位二面の水田跡とは異なった構造であった様子が判る。

A-7大畦 A-1大畦、A-4大畦と同位置。直線的で、走向はN-61°-W。確認長18.5m、底部幅50~100cm、確認面からの高さ5~10cmである。

④As-C下水田(第57図・付図3、P.L. 33)

「古墳時代第4面」B・C区東部で畦畔状遺構1条を確認した。この遺構は等高線方向に沿う走行であり規模からもオオアゼ(BC-1大畦)の可能性はある。しかし、区画は見つかっておらず、さらに上位のHr-FP水田ではこの位置にオオアゼは見られなかったことから断定はできない。従って、この面で水田が営まれていたことも特定できない。なお、この面を被覆していたAs-Cは二次堆積と思われるため、この遺構の廃絶時期をこのテフラの降下年代である4世紀初頭?には求められない。

BC-1大畦 B・C区東部の465-380・385G~470-380Gに位置する。直線的で走向はN-33°-E。確認長7.5m、底部幅100cm、確認面からの高さ5cm。

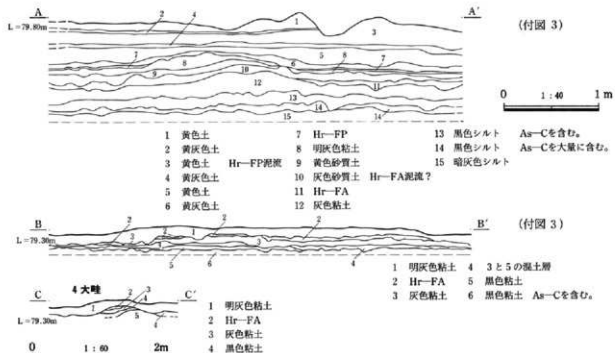
(2) 溝(第59図・付図3、P.L. 32)

溝は「古墳時代第3面」で2条を確認した。同面のAs-C混土上水田との関係は不明であるが、走向が水田区画の方向性と一致するため、用水路として機能していた可能性も否定できない。

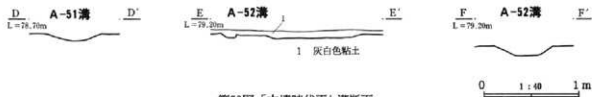
A-51溝 A区南部から北西部の425-420G~440-440Gに位置する。中央部が南西部に緩やかに張り、全体的な走向はN-40°-W。確認長4.7+13.5m、幅30~72cm、深さ1.5~8cmで、断面はごく浅い皿状。埋土は、粒子の細かい赤褐色砂。

A-52溝 A区南端から北部の420-415G~440-425Gに位置する。S字状に蛇行、南部で断続し、走向は南端部がN-12°-W、北に向かい430-419G付近からN-13°-E、436-417G付近からN-34°-W、443-423G付近からN-90°。確認長27.8m、幅60~180cm、深さ1~7cmで、断面は浅い皿状。埋土は灰褐色砂質土。

第5節 古墳時代の遺構と遺物



第58図 古墳時代水田畦断面



第59図「古墳時代面」溝断面

(古墳時代水田区画計測表)

註) * ... 面積の復元値に付す。 () ... 測定できた径が長径か短径か判断できない場合に付す。

【Hr-FP下水田・区画計測表】

1: A区

①A-3大畦以東の大区画内

番号	面積 ²	長径 ¹	短径 ¹	長径方位	番号	面積 ²	長径 ¹	短径 ¹	長径方位	番号	面積 ²	長径 ¹	短径 ¹	長径方位
1	—	—	1.74	N-0°	2	—	—	—	—					

②A-2大畦・A-3大畦に区切られた大区画内

番号	面積 ²	長径 ¹	短径 ¹	長径方位	番号	面積 ²	長径 ¹	短径 ¹	長径方位	番号	面積 ²	長径 ¹	短径 ¹	長径方位
3	—	—	—	—	4	—	1.42	—	N-12°-E	5	—	(1.92)	—	—
6	4.33	2.30	2.10	N-33°-E	7	—	(1.50)	—	—	8	1.80	1.58	1.18	N-60°-W
9	2.93	1.80	1.62	N-16°-E	10	—	(1.50)	—	—	11	2.01	1.46	1.44	N-38°-E
12	—	—	1.50	N-41°-E	13	—	—	1.10	N-36°-E	14	2.01	1.90	1.10	N-36°-E
15	—	—	1.38	N-30°-E	16	—	—	1.50	N-38°-E	17	2.67	1.94	1.48	N-38°-E
18	—	—	1.16	N-31°-E	19	—	—	1.18	N-31°-E	20	1.98	1.80	1.18	N-32°-E
21	2.66	2.28	1.20	N-32°-E	22	—	(1.66)	—	—	23	2.56	1.90	1.20	N-33°-E
24	3.59	2.82	1.25	N-38°-E	25	—	—	—	—	26	—	—	1.46	N-36°-E
27	3.54	1.92	1.85	N-36°-E	28	4.54	2.48	1.84	N-36°-E	29	—	—	1.98	N-29°-E

第3章 各時代の調査

③A-1大塚・A-2大塚に区切られた大区画内

番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位
30	—	(4.16)	—	—	31	23.30	8.56	2.66	N-30°-E	32	—	—	—	—
33	—	(2.84)	—	N-29°-E	34	14.00	3.96	3.50	N-29°-E	35	15.94	4.40	3.50	N-29°-E
36	15.73*	4.00	3.96	N-29°-E	37	—	(4.36)	—	—	38	—	—	—	—
39	—	(2.94)	—	—	40	2.21	2.28	1.02	N-32°-E	41	3.38	2.24	1.38	N-27°-E
42	12.32	4.40	2.80	N-34°-E	43	13.30	4.50	2.90	N-31°-E	44	11.38	3.92	2.88	N-31°-E
45	12.62	3.98	3.16	N-31°-E	46	—	—	3.38	N-31°-E	47	—	—	—	—
48	6.47	2.80	2.22	N-37°-E	49	8.99	3.55	2.50	N-34°-E	50	12.14	4.48	2.72	N-31°-E
51	10.21	3.62	2.68	N-31°-E	52	10.26	4.26	2.36	N-31°-E	53	7.83	3.28	2.32	N-34°-E
54	—	—	—	—	55	—	—	—	—	56	4.99	2.50	1.88	N-40°-E
57	7.08	3.18	2.34	N-34°-E	58	8.50	3.60	2.26	N-34°-E	59	10.64	4.64	2.32	N-23°-E
60	11.35	4.26	2.80	N-31°-E	61	10.29	3.54	2.88	N-31°-E	62	—	—	2.84	N-31°-E
63	—	—	—	—	64	8.34	2.85	2.80	N-38°-E	65	9.70	3.22	3.14	N-38°-E
66	9.83	3.60	2.60	N-38°-E	67	13.44	4.42	3.10	N-32°-E	68	9.93	4.14	2.32	N-32°-E
69	9.79	3.80	2.60	N-32°-E	70	—	—	2.80	N-32°-E	71	—	—	—	—
72	—	—	4.04	N-30°-E	73	16.16	4.06	3.88	N-30°-E	74	13.89	3.78	3.68	N-30°-E
75	—	—	—	—	76	—	—	3.28	N-31°-E	77	16.06*	4.40	3.52	N-31°-E
78	—	—	1.30	N-59°-W	79	—	—	—	—	80	—	—	1.12	N-30°-E
81	—	—	1.03	N-30°-E	82	—	—	0.76	N-30°-E	83	—	—	0.95	N-30°-E
84	—	—	1.12	N-30°-E	85	—	—	—	—	86	—	—	—	—
87	—	—	—	—	88	—	—	—	—	89	—	—	—	—
90	7.75*	5.28	1.56	N-30°-E	91	8.34*	8.32	1.10	N-30°-E	92	—	—	—	—
93	11.59*	9.95	1.28	N-32°-E	94	—	—	—	—	95	3.37*	2.60	1.32	N-32°-E
96	8.69	6.12	1.52	N-32°-E	97	4.76	3.72	1.32	N-32°-E	98	—	—	0.95	N-32°-E
99	2.72	2.60	1.32	N-34°-E	100	2.85	2.96	0.92	N-54°-E	101	3.14	3.16	1.08	N-54°-E
102	3.83	3.60	1.04	N-30°-E	103	—	—	—	—	104	3.69*	2.88	1.24	N-32°-E
105	2.93	2.64	1.20	N-34°-E	106	7.26	6.08	1.16	N-35°-E	107	4.55	3.72	1.24	N-29°-E
108	—	—	—	N-30°-E	109	2.59	2.24	1.08	N-30°-E	110	3.30	2.76	1.16	N-35°-E
111	2.62	2.68	1.08	N-34°-E	112	3.14	2.64	0.92	N-35°-E	113	3.61	2.96	1.20	N-35°-E
114	4.74	3.76	1.16	N-32°-E	115	—	—	1.20	N-31°-E	116	3.02	2.52	1.16	N-28°-E
117	2.79	2.52	1.12	N-31°-E	118	4.55	2.84	1.64	N-31°-E	119	3.56	2.48	1.44	N-33°-E
120	3.90	3.04	1.24	N-33°-E	121	5.05	3.84	1.40	N-32°-E	122	—	—	0.67	N-26°-E
123	1.86	2.44	0.76	N-28°-E	124	1.64	2.40	0.72	N-28°-E	125	—	—	—	N-29°-E
126	2.59*	2.56	0.96	N-29°-E	127	2.84	2.72	1.04	N-29°-E	128	2.98	2.84	1.12	N-29°-E
129	2.22	2.28	0.96	N-32°-E	130	2.77	3.00	0.96	N-32°-E	131	4.88	3.92	1.16	N-37°-E
132	—	—	—	—	133	—	2.62	—	—	134	3.38*	2.88	1.12	N-30°-E
135	2.89	2.21	0.95	N-30°-E	136	3.54	3.08	1.36	N-35°-E	137	5.52	3.72	1.44	N-38°-E
138	—	—	—	—	139	—	(3.10)	—	—	140	—	(4.40)	—	—

④A-1大塚以南の大区画内

番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位
141	—	—	1.10	N-44°-W	142	—	—	—	—	143	—	1.84	1.80	N-44°-W
144	2.07	1.84	1.04	N-41°-W	145	—	—	1.30	N-41°-W	146	—	—	—	—
147	1.88	1.80	1.12	N-41°-W	148	2.46	1.96	1.28	N-41°-W	149	2.34*	1.92	1.24	N-41°-W
150	—	—	1.02	N-47°-W	151	—	1.90	1.64	N-54°-W	152	1.86	1.84	1.00	N-41°-W
153	2.56	1.92	1.40	N-41°-W	154	1.70	1.72	1.08	N-40°-W	155	1.90*	1.80	1.04	N-39°-W
156	—	—	—	—	157	1.61	1.84	0.96	N-41°-W	158	2.26	1.84	1.40	N-41°-W
159	2.04	1.88	1.08	N-40°-W	160	1.22	1.72	1.04	N-38°-W	161	1.94	1.73	1.22	N-40°-W
162	—	—	1.00	N-40°-W	163	—	1.64	1.60	N-41°-W	164	2.14	1.52	1.44	N-41°-W
165	1.52	1.56	1.04	N-40°-W	166	1.73	1.58	1.13	N-39°-W	167	1.67	1.36	1.04	N-40°-W
168	1.49	1.40	1.04	N-40°-W	169	1.70	1.56	1.16	N-37°-W	170	—	—	—	—
171	—	1.44	1.27	N-41°-W	172	1.64	1.44	1.28	N-41°-W	173	1.30	1.41	0.94	N-40°-W
174	1.58	1.52	1.12	N-42°-W	175	1.45	1.64	0.88	N-40°-W	176	1.83	1.72	1.04	N-40°-W
177	1.59	1.64	1.04	N-44°-W	178	1.87	1.48	1.24	N-44°-W	179	—	—	—	—
180	0.97	1.04	0.96	N-47°-W	181	1.40	1.22	1.12	N-46°-W	182	1.10	1.28	0.88	N-44°-W
183	2.11	1.56	1.36	N-42°-W	184	1.32	1.52	0.92	N-40°-W	185	1.88	1.44	1.40	N-40°-W
186	1.32	1.40	1.00	N-44°-W	187	1.95	1.40	1.36	N-51°-W	188	—	—	—	—
189	—	—	2.40	N-47°-W	190	—	—	1.10	N-34°-W	191	—	—	1.40	N-42°-W
192	—	—	0.90	N-40°-W	193	—	—	1.30	N-40°-W	194	—	—	1.19	N-44°-W
195	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第5節 古墳時代の遺構と遺物

2: B・C区

番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	
1	—	—	—	N-31°E	2	—	—	1.34	N-28°E	3	—	—	1.08	N-29°E	
4	1.22	1.18	1.10	N-29°E	5	—	—	—	N-38°E	6	—	—	(1.18)	—	
7	—	(1.30)	—	—	8	2.33	2.00	1.24	N-27°E	9	2.44	2.00	1.24	N-26°E	
10	2.17	1.86	1.16	N-27°E	11	—	—	—	1.28	N-28°E	12	—	—	1.30	N-29°E
13	—	—	1.22	N-29°E	14	—	—	—	N-32°E	15	—	—	—	N-38°E	
16	2.39	2.10	1.10	N-26°E	17	2.26	1.88	1.20	N-27°E	18	2.38	2.00	1.44	N-27°E	
19	2.38	2.00	1.20	N-26°E	20	2.30	1.96	1.22	N-30°E	21	2.60	2.32	1.22	N-28°E	
22	2.59 ¹⁾	2.06	1.30	N-29°E	23	—	—	0.70	N-32°E	24	2.23	2.00	1.14	N-22°E	
25	2.36	2.02	1.16	N-26°E	26	2.18	1.88	0.94	N-27°E	27	1.98	1.78	1.10	N-27°E	
28	1.82	1.58	1.10	N-26°E	29	2.19	1.86	1.14	N-27°E	30	—	—	1.26	N-28°E	
31	1.53	1.60	1.06	N-29°E	32	—	—	0.90	N-32°E	33	—	—	—	N-33°E	
34	—	—	—	N-30°E	35	—	—	1.26	N-30°E	36	1.94	1.85	1.22	N-27°E	
37	2.13	1.50	1.36	N-27°E	38	—	—	1.10	N-26°E	39	1.71	1.46	1.14	N-27°E	
40	—	—	1.08	N-29°E	41	—	—	1.10	N-32°E	42	—	—	—	N-25°E	
43	—	—	—	—	44	—	—	—	—	45	—	—	—	—	
46	—	—	—	—	47	—	—	—	—	48	—	—	1.14	N-27°E	

【Hr-FA下木田・区画計測表】

①A-5大畦・A-6大畦に区切られた大区画

番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位
1	—	—	1.42	N-15°E	2	—	—	—	—	3	—	—	1.78	N-15°E
4	—	—	1.82	N-26°E	5	—	—	—	—	6	—	—	—	—
7	—	—	—	—	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—

②A-4大畦・A-5大畦に区切られた大区画

番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位
9	—	—	0.90	N-44°E	10	1.30	1.38	0.96	N-38°E	11	1.89	1.74	1.14	N-38°E
12	1.34	1.29	1.20	N-38°E	13	1.30	1.46	1.00	N-31°E	14	1.01	1.22	0.84	N-31°E
15	—	—	0.90	N-31°E	16	—	—	(1.14)	—	17	1.33	1.26	1.08	N-37°E
18	1.75	1.86	0.96	N-37°E	19	1.16	1.24	0.92	N-37°E	20	1.44	1.46	0.92	N-33°E
21	1.18	1.28	0.96	N-33°E	22	—	—	1.06	N-39°E	23	—	—	(1.58)	—
24	2.50	1.66	1.56	N-32°E	25	2.19	1.70	1.24	N-32°E	26	1.69	1.50	1.20	N-32°E
27	1.59	1.36	1.20	N-32°E	28	—	—	1.20	N-32°E	29	—	—	—	—
30	—	—	—	—	31	—	—	—	—	32	—	—	(1.28)	N-38°E
33	2.37	1.78	1.36	N-31°E	34	1.90	1.50	1.30	N-31°E	35	1.90	1.50	1.24	N-33°E
36	1.53	1.36	1.18	N-45°W	37	—	—	1.54	N-35°E	38	—	—	1.27	N-45°E
39	3.09	1.96	1.60	N-49°E	40	—	—	(1.86)	—	41	—	—	1.06	N-42°E
42	2.14	1.76	1.20	N-35°E	43	1.69	1.34	1.34	N-35°E	44	—	—	—	—
45	—	(1.30)	—	—	46	—	—	1.17	N-34°E	47	—	—	(1.14)	—
48	1.96	1.92	1.00	N-33°E	49	—	—	(1.26)	—	50	—	—	—	—
51	—	(1.50)	—	—	52	—	—	—	—	53	—	—	(1.97)	—
54	—	—	—	—	55	—	—	—	—	56	—	—	—	—
57	—	—	—	—	58	—	—	—	—	59	—	—	—	—
60	—	—	—	—	61	—	—	—	—	62	—	—	—	—
63	—	—	—	N-22°W	64	—	1.48	0.92	N-22°W	65	—	—	—	N-18°W
66	1.28	1.70	0.82	N-26°W	67	—	—	—	—	—	—	—	—	—

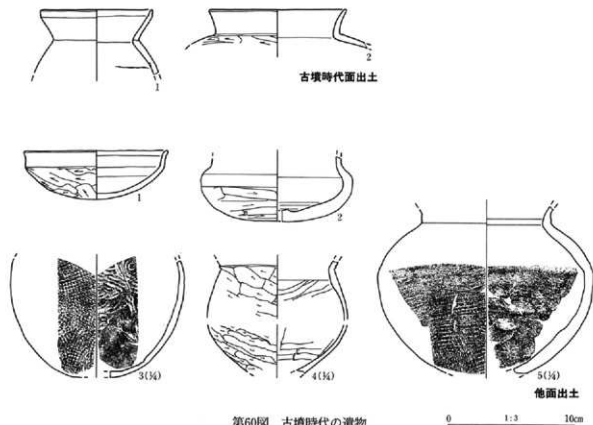
【As-C掘上土水田・区画計測表】A区

番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位	番号	面積㎡	長径m	短径m	長径方位
1	—	—	—	—	2	—	—	2.30	N-60°W	3	—	—	3.00	N-26°E
4	—	—	—	—	5	—	(2.54)	—	—	6	—	—	—	—
7	—	—	—	—	8	—	—	2.54	N-60°W	9	—	—	(2.84)	N-42°E
10	—	—	2.44	N-26°E	11	—	—	—	—	12	—	—	—	—
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

2. 遺物(第60図、P.L. 67)

古墳時代の遺物には須恵器、土師器の破片がある。しかし殆どが小破片であり、器種が特定できたものは

第3章 各時代の調査



第60図 古墳時代の遺物

ごく僅かであった。

(1) 古墳時代面出土遺物

1は「古墳時代第4面」遺構外出土。土師器壺の口縁部から上部部片である。口(12.0)cm。口縁部は直線的に開き、口唇部は短く直立する。胎土は鈍い橙色。

2は「古墳時代第3面」遺構外出土。土師器甕の口縁部から上部部片である。口(14.4)cm。口縁部はやや外反しながら立ち上がる。胎土は浅黄色。

(2) 他面出土

1は土師器環である。1/3残存で、口11.2cm、高3.8cm。口縁部は直立し、口唇部は僅かに外反する。外面は口縁部は横ナデ、体部は不定方向寛ケズリ。内面、口縁部から上部部に横ナデ、下部部にナデ。胎土は暗橙色。「古代A-1面」遺構外出土。

2は須恵器短頸壺の体部片である。外面は上部部付近に自然釉、下部部から底部は寛ケズリ。轆轤整形。「古代BC面-2」BC-10溝出土。

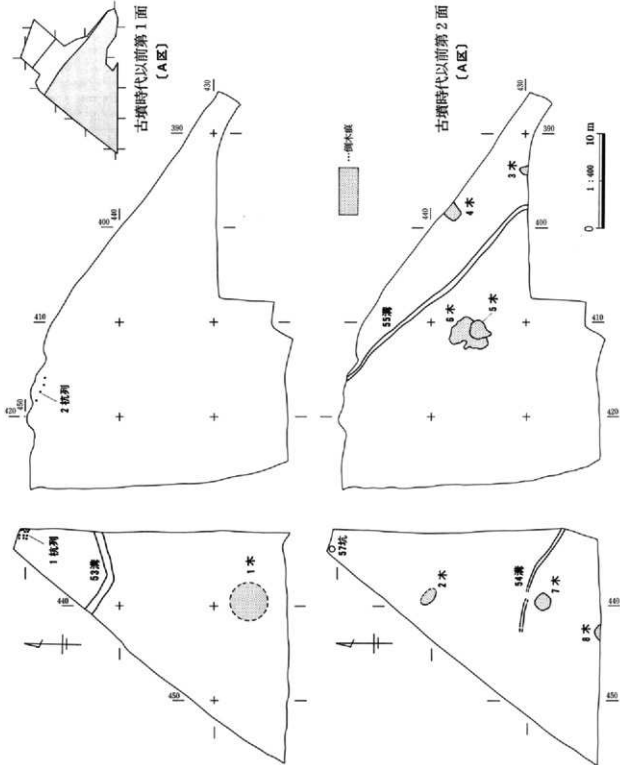
3～5は壺、甕類である。

3は須恵器壺の体部片。胴18.4cm。外面は斜格子タタキ目、内面は同心円当具痕。「中世面」A-30溝出土。

4は土師器甕の口縁部から下部部片。胴(15.0)cm。内外面とも、口縁部は横ナデ、体部は寛ケズリ。5は須恵器壺の口縁部から体部片か。胴(22.9)cm。外面に平行タタキ目。轆轤整形。4・5は「古代BC面-2」BC-11溝出土。

第6節 古墳時代以前その他の遺構と遺物

古墳時代以前のものと考えられる遺構はA区の二面で確認した。上上面の「古墳時代以前第1面」では、溝1条、杭列2カ所、その他倒木痕1基を確認した。下下面の「古墳時代以前第2面」では、溝2条、土坑1基、その他倒木痕7基を確認した。遺構の具体的な年代はいずれも不明であるが、古墳時代に本遺跡周辺が水田化される以前の環境を示唆するものである。遺物は、杭列に残存していた木製杭がある。



第61図「古墳時代以前面」遺構配置図

第3章 各時代の調査

1. 遺構

(1) 土坑(第62図、P.L. 35)

土坑は「古墳時代以前第2面」で1基を確認した。

A-57土坑 A区北端の450-430Gに位置する。径0.58m、深8cmの円形で、断面は浅い掘り鉢状。

(2) 溝(第63図・付図4、P.L. 34・35)

溝は「古墳時代以前第1面」で1条、「古墳時代第2面」で2条、計3条を確認した。

①「古墳時代以前第1面」(第63図・付図4、P.L. 34)

A-53溝 A区北西部の440-430G~440-440Gに位置する。V字状に屈曲し、走向はN-65°-E、440-437G付近でN-63°-W。確認長9.3m、幅58~96cm、深さ2.5~5cmで、断面は浅い逆台形。

②「古墳時代以前第2面」(第63図・付図4、P.L. 35)

A-54溝 A区南部から西部の425-430G~430-440Gに位置する。緩やかに蛇行し、全体の走向はN-65°-W。確認長11.4m、幅16~40cm、深さ2.0~8.5cmで、断面は逆台形。

A-55溝 A区南東部から北部の425-395G~445-415Gに位置する。走向はN-44°-W。確認長26.6m、幅16~56cm、深さ4~10cmで、断面は皿状。

(3) 杭列(第64図、P.L. 34)

杭列は「古墳時代以前第1面」で2カ所を確認した。この杭列に関わる溝などの遺構は見つかっておらず、具体的な機能は不明である。

なお、2カ所とも中世から近世の「大規模河川跡」の南岸に位置しており、特にA-2杭列はこれに沿って杭痕跡が並んでいる。そこで、これらの杭列はこの河川跡に関連して設けられたことも考えられるが、上位面で確認できなかったこともあり、あくまでも推測の域を出ない。

A-1杭列 A区北端の445-430G~450-430Gに位置する。杭の痕跡は11カ所あり、このうち8カ所で木杭が残存していた。これらの配置を見ると、東西2本×南北3本、平面規模にして30cm×70cm前後の杭列が、約40cmの間隔で距離で2カ所設けられていたものと思われる。何かの支柱や脚部であったか。

A-2杭列 A区北東端の445-415Gに位置する。杭痕は約90~100cm間隔で4カ所。全体の走向はN-70°-W。杭は残存していない。

2. 遺物

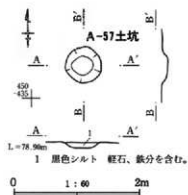
ここでは前述したA-1杭列に残存した木製杭8本を記す。なお、古墳時代を遡るものと特定できる遺物は出土しなかった。

(1) A-1杭列残存遺物(第65図、P.L. 67)

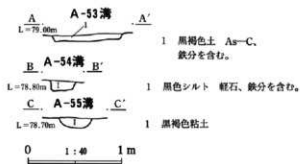
1~8は木製杭。いずれも完形ではないと思われるが、先端を尖らせたときの加工痕が残存する。具体的な時期は不明。1は径4.6cm。2は残存長19.4cm、径2.6~4.4cm。3は残存長24.0cm、径4.6cm。4は残存長24.6cm、径5.2cm。樹種はタケ。5は残存長27.0cm、径5.7cm。6は残存長31.8cm、径3.3~4.7cm。エゴノキ属。7は残存長49.1cm、径4.0~6.2cm。ハンノキ属ハンノキ節。8は残存長66.3cm、径4.0~5.6cm。

樹種同定は松葉礼子氏(株式会社 バレオ・ラボ)が行った。なお、この遺物番号は第64図中の杭痕跡に付された番号に一致する。

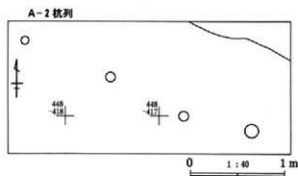
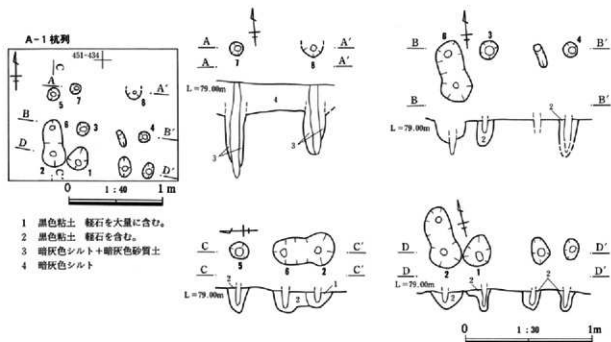
第6節 古墳時代以前その他の遺構よ遺物



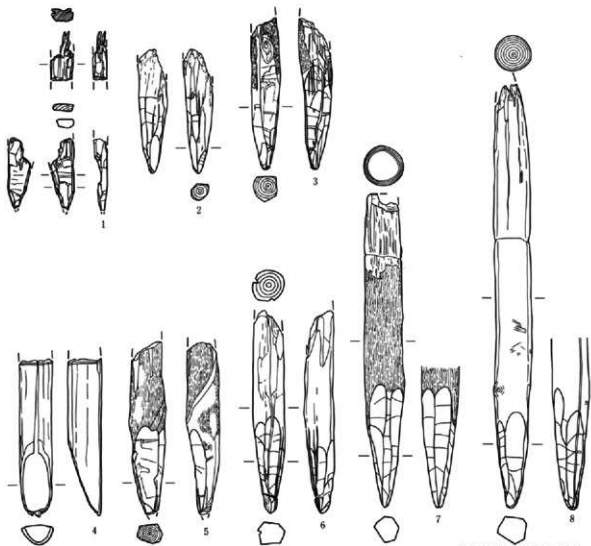
第62図 A-57土坑



第63図「古墳時代以前面」遺構断面



第64図「古墳時代以前面」坑列



古墳時代以前第1面出土

第65図 古墳時代以前の遺物

0 1:6 20cm

第4章 自然科学分析

〔自然科学分析の目的〕

本遺跡の発掘調査ではテフラ層、テフラ混入層、火山性泥流層やその他の洪水層を手掛かりに遺構確認を試み、11の確認面から様々な種類の遺構を確認した。

これらの土層のなかのテフラ層は、それぞれの調査面や遺構その他の土層の年代を推定する際の重要な要素である。特に、本遺跡では土層の堆積状態が不安定な部分が多いため客観的な判断が必要であった。そこで、土層・テフラ分析を行おうとした。資料採取箇所はA区西半の壁面の「A地点」～「C地点」の3地点である。なお、本来ならばB・C区でもこの分析を行うべきであったが、緊急の調査であったために実施できなかった。

また、見つかった遺構のなかには、古墳時代の4時期の水田跡がある。これらに対しては次のような目的、内容で分析を行った。

① 水田耕作の可否の推定

古墳時代の各水田跡および畦畔状遺構のなかには、残存度が低いために実際に水田として機能していたのかが不明なものもある。さらに、本遺跡周辺での開田の時期は、確認された遺構や遺物からは判断できなかった。そこで各土層に於ける水田耕作の存否を推定するために植物珪酸体（プラント・オパール）分析を行うことにした。試料採取箇所はA区では「A地点」～「C地点」の3地点、B・C区では「古墳時代第4面」As-C下水田のBC-1大畦から採取した「土壌a（畦畔土）」、同じく耕作面と思われる部分から採取した「土壌b」の2地点である。なお、B・C区の2地点を一括し「C区水田面」と呼ぶ。

② 栽培作物や植生の推定

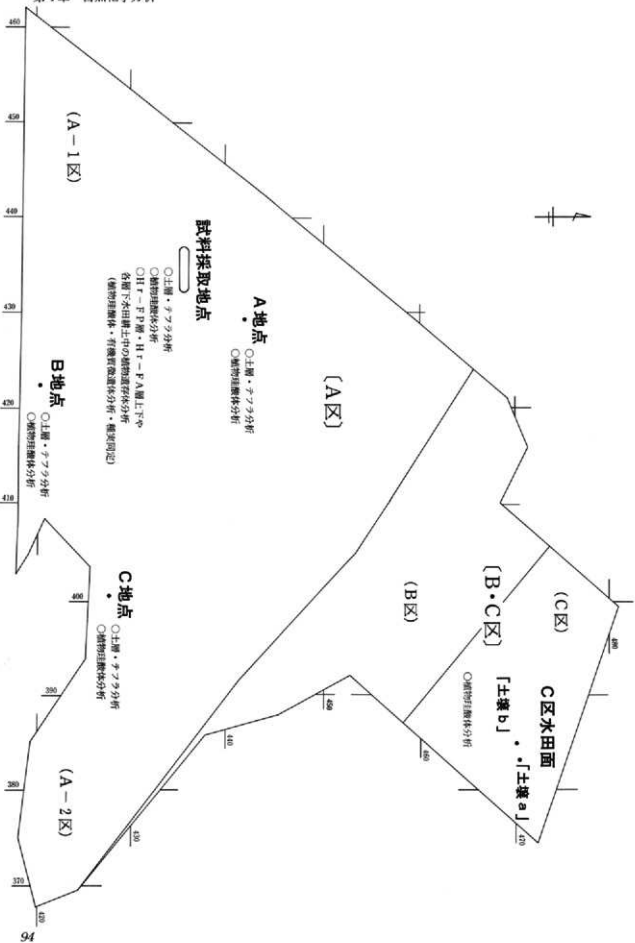
A区西半では「古墳時代第1面」Hr-FP下水田、「古墳時代第2面」Hr-FA下水田の確認作業時に、それぞれを被覆していたHr-FP、Hr-FAの上下や各水田跡の耕土中から植物の遺体（植物遺存体）が見つかっている。この植物の種類を特定することにより、栽培された作物や当時の植生を推定できると考えた。そこで、植物珪酸体（プラント・オパール）、有機質微体分析（花粉分析）、種実同定の各分析を行うことにした。

以上、各分析は株式会社 古墳境研究所に業務委託して実施した。その分析結果報告を次に記載する。

なお、分析報告内では調査時の調査区名が用いられている。その他、遺構名や土層面など、いままて本報告書で用いていた語句と若干異なる表記がなされているため、対照表に示す。

（各試料採取地点の位置は、第66図を参照されたい。）

分析報告	本報告書
Hr-FP水田	Hr-FP下水田
Hr-FA水田	Hr-FA下水田
As-C混	As-C混土



第66図 西横手遺跡群自然科学分析ポイント図

I、西横手遺跡群の土層とテフラ

1. はじめに

前橋台地とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された火山灰土や水成堆積物中には、浅間火山や榛名火山をはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の始良カルデラや鬼界カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、土層の形成年代のほか、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

西横手遺跡群の発掘調査では、起源が不明なテフラ層や形成年代の不明な土層が認められた。そこで、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行って土層の層序を記載するとともに、示標テフラの層位を把握して、土層の堆積年代などに関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、A-2区のA地点、B地点、C地点の3地点である。

2. 土層の層序

(1) A地点（図表1・図1）

A地点では、下位より灰白色粘質土（層厚4cm以上）、成層したテフラ層（層厚43cm）、若干色調の暗い灰色土（層厚16cm）、白色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚7cm）、暗灰色粘質土（層厚8cm）、暗灰色土（層厚7cm）、灰色軽石に富む黒灰褐色土（層厚6cm、軽石の最大径5mm）、灰色軽石混じり黒灰色土（層厚4cm、軽石の最大径3mm）、暗灰色粘質土（層厚4cm）、黄褐色砂層（層厚3cm）、砂混じり灰色粘質土（層厚3cm）、砂混じり灰色土（層厚8cm）、成層したテフラ層（層厚3.8cm）、灰色粘質土（層厚9cm）、黒灰色土（層厚0.3cm）、黄白色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、黒灰色土（層厚0.1cm）、黄白色シルト層（層厚11cm）、円磨された白色軽石混じりで逆級化構造の認められる黄灰色砂層（層厚21cm、軽石の最大径18mm）、層理の発達した白色シルト層（層厚6cm）、円磨された白色軽石混じりで逆級化構造の認められる黄灰色砂層（層厚26cm、軽石の最大径37mm、 α 層）、白色軽石混じり灰色砂質土（層厚10cm、軽石の最大径28mm）、若干色調の暗い灰色砂質土（層厚20cm以上）が認められる（図1）。

これらのうち、下位の成層したテフラ層は、下部の灰色粗粒火山灰層（層厚28cm）と上部の砂質の黄灰色細粒火山灰層（層厚15cm）からなる。このテフラ層は、その層相から約1.3~1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間坂鼻黄色軽石（As-YP、新井、1962、町田・新井、1992）に同定される可能性がある。黒灰褐色土中に多く含まれる灰色軽石は、その岩相から4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、新井、1979）に由来すると考えられる。上位の成層したテフラ層は、下部の桃褐色細粒火山灰層（層厚0.8cm）と上部の灰色粗粒火山灰層（層厚3cm）から構成されている。このテフラ層は、その層相から6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳沢川テフラ層（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に同定される。

さらに、その上位の黄白色細粒火山灰層は、層相から6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ層（Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に同定される。Hr-FPの上位の成層した洪水堆積物は、層位からHr-FPの堆積に伴って発生した火山泥流堆積物（早田、1989）に

第4章 自然化学分析

対比される。

(2) B地点 (図表1・図2)

B地点では、下位より層理の発達した黄灰色砂層 (層厚10cm以上)、層理の発達した灰色砂層 (層厚8cm)、A地点の α 層に対比される層理の発達した黄灰色砂層 (層厚11cm)、円磨された白色軽石混じり灰色粘質土 (層厚23cm、軽石の最大径29mm)、白色軽石混じり暗灰色土 (層厚9cm、軽石の最大径18mm)、成層したテフラ層 (層厚3.2cm)、暗灰色砂質土 (層厚11cm)、褐灰色砂層 (層厚1cm)、若干色調の暗い灰色砂質土 (層厚14cm)、灰色砂質土 (層厚55cm)、暗灰色表土 (層厚16cm) が認められる (図2)。

これらのうち、成層したテフラ層は、下部の青灰色細粒火山灰層 (層厚0.2cm) と、上部の褐色軽石混じり褐色粗粒火山灰層 (層厚3cm、軽石の最大径7mm) から構成されている。このテフラ層は、その層相から1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ (As-B, 新井, 1979) に同定される。As-Bの下位の成層した洪水堆積物は、層位からHr-FPの堆積に伴って発生した火山泥流堆積物 (早田, 1989) に対比される。

(3) C地点 (図表1・図3)

C地点では、下位より青灰色砂質土 (層厚4cm以上)、白色軽石混じり灰色砂質土 (層厚3cm、軽石の最大径3mm)、灰色粘質土 (層厚3cm)、成層したテフラ層 (層厚47cm)、若干色調の暗い灰色土 (層厚16cm)、白色粗粒火山灰混じり暗灰色土 (層厚10cm)、暗褐色灰色土 (層厚13cm)、灰色軽石に富む黒灰色土 (層厚4cm、軽石の最大径5mm)、灰色軽石混じり黒灰色土 (層厚4cm、軽石の最大径3mm)、灰色粘質土 (層厚17cm)、成層した黄褐色細粒火山灰層 (層厚3cm)、白色軽石混じり灰色砂層 (層厚9cm、軽石の最大径4mm)、灰色粘質土 (層厚8cm)、黒灰色土 (層厚0.3cm)、黄色細粒火山灰層 (層厚0.2cm)、暗灰色土 (層厚0.1cm)、黄白色シルト層 (層厚6cm)、層理の発達した灰色砂層 (層厚17cm)、層理の発達した桃白色シルト層 (層厚6cm)、A地点の α 層に対比される層理の発達した黄灰色砂層 (層厚17cm)、灰色砂質土 (層厚10cm以上) が認められる (図3)。

これらのうち、成層したテフラ層は、下部の灰色粗粒火山灰層 (層厚32cm) と上部の灰白色細粒火山灰層 (層厚15cm) から構成されている。このテフラ層は、その層相からAs-YPに同定される可能性がある。黒灰色土中に多く含まれる灰色軽石は、その岩相からAs-Cに由来すると考えられる。成層した黄褐色細粒火山灰層は、層相からHr-FAに同定される。また、黄色細粒火山灰層は、層相からHr-FPに同定される。Hr-FAおよびHr-FPの上位の洪水堆積物は、層位からHr-FAおよびHr-FPの堆積に伴って発生した火山泥流堆積物 (早田, 1989) に対比される。これらのうち、発掘調査ではHr-FAの直下およびHr-FPの上位の黄白色シルト層の直下から、畦畔が検出されている。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

起源不明のテフラ粒子が認められたA地点の4試料およびC地点の試料番号1の5試料について、示標テフラとの同定精度を向上させるために、位相差法 (新井, 1962) により屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

A地点の試料6には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.706

-1.711である。このテフラは、層相を合わせて考えると、As-YPに同定される。A地点の試料番号5には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.705-1.711(modal range: 1.708-1.710)である。このテフラは、層位を合わせて考えると、約8,200年前に浅間火山から噴出した浅間藤岡輝石(As-Fo, 早田, 1991, 1996)に由来する可能性が考えられる。

A地点の試料2には、白色の軽石が少量含まれている。軽石の最大径は4mm程度である。火山ガラスの屈折率(n)は、1.513-1.518である。また重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほかに、角閃石がごく少量含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.706-1.710である。また、A地点の試料1にも、白色の軽石が少量含まれている。軽石の最大径は5mm程度である。火山ガラスの屈折率(n)は、1.514-1.518である。また、重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほかに、角閃石がごく少量含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.706-1.710である。これらの中に含まれる軽石は、その特徴から、As-Cに由来すると考えられる。なお、重鉱物の中には、ごくわずかに角閃石が認められた。この角閃石については、5世紀に榛名火山で発生した榛名有馬火山灰(Hr-FA, 町田ほか, 1984)の噴火に由来する可能性も考えられる。ただし、積極的にこのことを支持する根拠は得られなかった。

C地点の試料1には、白色軽石が比較的多く含まれている。火山ガラスの屈折率(n)は、1.500-1.502である。また、重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.705-1.709である。このテフラは、その特徴から、約1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1, 中沢ほか, 1984)に同定される。

5. 小結

西横手道跡群A-2区において、地質調査と屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間大窪沢第1軽石(As-Ok1, 約1.7万年前)、浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 約1.3-1.4万年前)、浅間藤岡輝石(As-Fo, 8,200年前)、浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)のテフラ層あるいはテフラ粒子を検出することができた。また、As-CからAs-Bにかけての多くの層間に、洪水堆積物を検出することができた。発掘調査により検出された畦畔は、少なくともHr-FA直下とHr-FPの火山泥流堆積物の直下に層位があると考えられた。

文献

- 新井房夫(1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79。
新井房夫(1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定-テフロクロロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269。
新井房夫(1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52。
新井房夫(1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法」, p.138-149。
町田 洋・新井房夫(1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p。
町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984) テフラと日本考古学—考古学研究に關係するテフラのカタログ。古文化財科学会編「古文化財に關する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928。
中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦(1984) 浅間火山, 黒斑~前掛期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70。

第4章 自然化学分析

坂口 一 (1986) 榛名ニツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器, 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27, p.297-312.

西横手遺跡群における屈折率測定結果

調査区	地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	屈折率
A-2	A	1	1.514-1.518	opx, cpx, (ho)	opx (γ): 1.706-1.710
A-2	A	2	1.513-1.518	opx, cpx, (ho)	opx (γ): 1.706-1.710
A-2	A	5	-	opx > cpx	opx (γ): 1.705-1.711 (1.708-1.710)
A-2	A	6	-	opx > cpx	opx (γ): 1.706-1.711
A-2	C	1	1.500-1.502	opx > cpx	opx (γ): 1.705-1.709

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石, () は量の少ないことを示す。屈折率の測定は, 温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による。屈折率の () は, modal range をしめす。

II. 西横手遺跡群における植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析

1. はじめに

植物珪酸体は, 植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり, 植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は, この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり, イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 1987)。

2. 試料

(1) A-1区 (図表2 表1・図1)

試料は, Hr-FP直上の植物遺存体 (試料1), Hr-FP直下の植物遺存体 (試料2), Hr-FP水田耕作土 (試料3, 比較試料), Hr-FP直下の植物遺存体? (鉄分置換, 試料4), Hr-FA直下の植物遺存体? (鉄分置換, 試料5), Hr-FA水田耕作土中の白色植物遺存体? (一部鉄分置換, 試料6) の6点である。

(2) A-2区 (図表2 表2・図2, 図表3 表3・図3~5)

試料は, A地点, B地点, C地点, C区水田面から採取された計24点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対して直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、表2および図1～図4に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、A-2区については水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科-タケ亜科〕

クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、未分類等

〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

5. 考察

(1) A-1区から検出された植物遺存体の同定

1) Hr-FP直上の植物遺存体（試料1）

試料1からは、棒状珪酸体が比較的多く検出され、イネ、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ウシクサ族Aなども検出された。イネの密度は3,700個/gと比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを上回っている。なお、同試料から検出されたイネの多くは縦長が30 μ m前後と明らかに小型であり、形状が未熟なものや縦長に対する横長の比率が大きいものも見られた。これは生育段

第4章 自然化学分析

陪初期（苗の段階）のイネに特有のものである（杉山，1998）。

これらのことから、植物遺存体の給源植物はおもにイネ（苗）と考えられるが、比較試料のHr-FP水田耕作土（試料3）との間で植物珪酸体の組成や量にとくに大きな特徴が認められないことから断定はできない。

2) Hr-FP直下の植物遺存体（試料2）

試料2からは、棒状珪酸体が比較的多く検出され、イネ、キビ族型、ウシクサ族Aなども検出された。イネの密度は5,800個/gと高い値であり、試料1と同様にその多くが生育段階初期（苗の段階）のものである。これらのことから、植物遺存体の給源植物はおもにイネ（苗）と考えられるが、比較試料のHr-FP水田耕作土（試料3）との間で植物珪酸体の組成や量にとくに大きな特徴が認められないことから断定はできない。

3) Hr-FP直下の植物遺存体？（鉄分置換、試料4）

試料4からは、棒状珪酸体が比較的多く検出され、イネ、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Aなども検出された。イネの密度は1,200個/gと低い値であり、棒状珪酸体を除くその他の分類群も低密度である。これらのことから、植物遺存体？の給源植物を特定するのは困難である。

4) Hr-FA直下の植物遺存体？（鉄分置換、試料5）

試料5からは、棒状珪酸体が比較的多く検出され、イネ、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Aなども検出された。イネの密度は6,300個/gと高い値である。これらのことから、植物遺存体？の給源植物はおもにイネと考えられるが、比較試料との間で植物珪酸体の組成や量にとくに大きな特徴が認められないことから断定はできない。

5) Hr-FA耕作土中の白色植物遺存体？（一部鉄分置換、試料6）

試料6からは、イネ科植物の茎部起源が92,600個/gと極めて多量に検出され、棒状珪酸体も比較的多く検出された。また、イネ、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Aなども検出された。イネの密度は3,800個/gと比較的高い値である。これらのことから、白色植物遺存体？の給源植物はおもにイネ科植物の茎部と考えられる。なお、現時点では茎部起源の植物珪酸体から給源植物を特定するのは困難である。

（2）A-2区・C区における水田跡の検討

1) A地点（図表2 図2）

Hr-FP直下層（試料0）からAs-Fo直下層（試料10）までの層単について分析を行った。その結果、Hr-FP直下層（試料0）からAs-C混層（試料6）までの各層からイネが検出された。このうち、Hr-FP直下層（試料0）からAs-C直上層（試料5）までの各層では、密度がいずれも3,000個/g以上と比較的高い値であり、とくにHr-FP直下層（試料0）、Hr-FA直下層（試料2）、As-C直上層（試料5）では5,000個/g以上と高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-C混層（試料6）では、密度が1,500個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) B地点 (図表3 図3)

As-Bの上位層(試料1)からAs-Bの下層(試料5)までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、As-B直上層(試料3)とAs-B直下層(試料4)では密度が7,300個/gおよび8,700個/gと高い値であり、As-Bの下層(試料5)でも3,600個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層では、密度が700~2,200個/gと比較的低い値である。

3) C地点 (図表3 図4)

Hr-FPの火山泥流堆積物の直下層(試料1)からAs-C直下層(試料6)までの層準について分析を行った。その結果、火山泥流堆積物直下層(試料1)、Hr-FA直下層(試料3)、As-C混層(試料4、5)からイネが検出された。このうち、Hr-FA直下層(畦畔検出、試料3)とAs-C混層(試料4、5)では、密度が3,600~4,400個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。火山泥流堆積物直下層(畦畔検出、試料1)では、密度は700個/gと低い値であるが、直上を泥流堆積物層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

4) C区水田面 (図表3 図5)

As-C下の土壌bと土壌a(畦畔土)について分析を行った。その結果、土壌a(畦畔土)からイネが検出されたが、密度は800個/gと低い値である。

(3) A-2区における堆積環境の推定

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、スキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。イネ以外の分類群では、下位層準を中心にヨシ属が比較的多く検出され、スキ属型やタケ亜科は少量である。おもな分類群の推定生産量によると、As-C混層より下位ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

以上の結果から、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属が繁茂する湿地の環境であったと考えられ、As-C混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことも考えられる。

6. まとめ

(1) A-1区

植物珪酸体(プラント・オパール)分析の結果、Hr-FP直上の植物遺存体(試料1)およびHr-FP直下の植物遺存体(試料2)からはイネ(苗の段階)が多量に検出され、植物遺存体の給源植物はおもにイネ(苗)と推定された。また、Hr-FA直下の植物遺存体?(鉄分置換、試料5)の給源植物はおもにイネ(藁)、Hr-FA耕作土中の白色植物遺存体?(一部鉄分置換、試料6)の給源植物はおもにイネ科植物の茎部と推定された。Hr-FP直下の植物遺存体?(鉄分置換、試料4)の給源植物は不明である。

第4章 自然化学分析

(2) A-2区・C区

畦畔が検出された榛名二ツ岳淡川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭) 直下層からはイネが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、浅間Bテフラ (As-B, 1108年) 直下層、榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP, 6世紀中葉) 直下層、浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉) 混層などでもイネが多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属が繁茂する湿地的な環境であったと考えられ、As-C混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

文献

杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究, 第2号, p.27-37.

杉山真二 (1998) イネ苗の植物珪酸体とその応用—水田埋没の季節推定— 日本文化財科学会第15回大会研究発表要旨集, 92-93.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法— 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

III. 西横手遺跡群A-1区における有機質微遺体分析

1. はじめに

西横手遺跡群A-1区の発掘調査では、Hr-FP直下層やHr-FA直下層などから植物遺存体(一部、鉄分に置換されている)が検出された。ここでは、花粉分析の手法を用いてこれらの植物遺存体の同定を試みた。

2. 試料(図表4・5 写真2・3)

分析試料は、Hr-FP直上の植物遺存体(試料1)、Hr-FP直下の植物遺存体(試料2)、Hr-FP水田耕作土(試料3、比較試料)の3点である。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。また、Hr-FP直上面などから検出された植物遺存体についても分析を行った。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で籾などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン試液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検視はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974, 1977)を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

出現した分類群は、樹木花粉15、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉10、シダ植物胞子2形態の計26である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ、グミ属、ニワトコ属-ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、セリ亜科、アカザ科-ヒユ科、タンポポ科、キク科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

5. 考察(写真4)

Hr-FP直上の植物遺存体(試料1, 2)からは、スギ、クリーシイ属、イネ科、カヤツリグサ科などの花粉が検出されたが、いずれも少量である。これらの試料からは炭化した植物片も観察された。Hr-FP水田耕作土(試料3)では、花粉はほとんど検出されなかった。Hr-FP直上面などから検出された植物遺存体(試料1-1, 2-1, 3-1, 4-1)では、炭化した木材の細片が観察されたが、花粉はほとんど検出されなかった。以上のことから、花粉分析の結果から植物遺存体の給源植物を特定することは困難である。

Hr-FP直下の水田耕作土(試料4-2)からは、クリーシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などの樹木花粉、およびイネ属型を含むイネ科やカヤツリグサ科などの草本花粉が比較的多く検出された。これらのことから、同層の堆積当時はカヤツリグサ科などが多く生育する湿地の環境であったと考えられ、周辺地域にはナラ類、クリあるいはシイ類、カシ類を主とする森林が分布していたものと推定される。

文献

中村純(1973)花粉分析, 古今書院, p.82-110.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

第4章 自然化学分析

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

IV. 西横手遺跡群A-1区における種実同定

1. 試料

試料は、Hr-FP直上植物遺存体 (試料7) およびHr-FP直下植物遺存体 (試料8) の2点である。

2. 方法

試料 (堆積物) を0.25mm篩を用いて水洗選別し、残渣を実体顕微鏡で観察した。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行った。なお、試料7は70cc、試料8は40ccを用いた。

3. 結果と考察

分析の結果、試料7と試料8からは種実遺体は検出されなかった。おそらく、分解の著しい堆積環境下で種実遺体が分解されたものと推定される。

文献

南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.

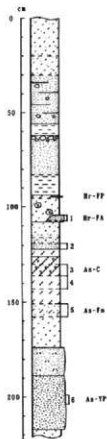


図1 A地点・土層柱状図(A-1B)

数字はテフラ分析の試料番号

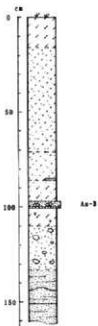


図2 B地点・土層柱状図(A-2B)

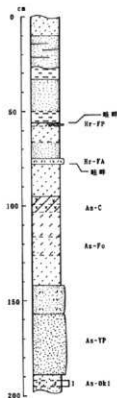


図3 C地点・土層柱状図(A-3B)

数字はテフラ分析の試料番号



図表1 西横手遺跡群土層柱状図

第4章 自然化学分析

表1 群馬県、西横手遺跡群（A-1区）における植物珪酸体分析
検出濃度（単位：×1000ppm）

分類群	学名	サンプル番号				
		1	2	3	4	5
イネ科	<i>Gramineae (Grasses)</i>					
イネ	<i>Oryza sativa (domestic rice)</i>	27	58	53	12	63
ホトケルギ	<i>Panicum type</i>	15	7		6	6
シユズガマ属	<i>Cala</i>	7			6	6
ワシ属	<i>Pipturus (rod)</i>	29			6	13
ススキ属	<i>Alvimia type</i>				6	6
ウツクサ科	<i>Andropogoneae type</i>	22	36	15	30	23
クマザサ科	<i>Bambusoideae (Bamboos)</i>					
クマザサ属	<i>Sasa (except M. bambusa)</i>				6	6
その他イネ科	<i>Others</i>	7	7			
表皮毛細胞	<i>Stalk hair origin</i>	7	51	15	17	13
葉口縁細胞	<i>Leaf-shaped</i>	235	173	53	243	196
葉口縁部	<i>Sheath origin</i>				6	6
その他	<i>Others</i>	181	233	166	272	322
植物珪酸体総量	Total	332	578	281	307	613

おもな分類群の検出濃度（単位：kg/m ² -a）	1.00	1.50	1.50	0.36	1.80	1.11	
イネ	<i>Oryza sativa (domestic rice)</i>	1.00	1.50	1.50	0.36	1.80	1.11
ワシ属	<i>Pipturus (rod)</i>	1.80			0.36	0.80	1.80
ススキ属	<i>Alvimia type</i>				0.07	0.08	0.08
クマザサ属	<i>Sasa (except M. bambusa)</i>				0.05	0.05	0.05

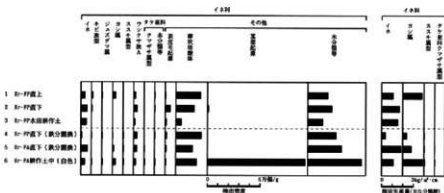


図1 西横手遺跡群A-1区から検出された植物珪酸体の植物珪酸体分析結果

表2 群馬県、西横手遺跡群（A-2区）におけるプラント・オパール分析結果

分類群/試料	A地点										
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	11
イネ	73	44	51	44	44	53	35				
ワシ属	7	7	22	44	51	51	116	50	51	36	
ススキ属			15	30	7	15					
クマザサ科			7	7	15	15					

検出濃度（単位：kg/m ² -a）	0.14	1.28	1.50	1.28	1.28	1.50	0.43				
イネ	0.48	0.48		1.28	2.76	3.21	5.10	7.34	8.39	3.21	2.39
ワシ属				0.18	0.43	0.29	0.18				
クマザサ科				0.03		0.04	0.07	0.07			

検出濃度の比は表1.2.1と仮定して算出。

分類群/試料	C地点										
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6
イネ	7	22	73	87	38	7	30	44	27		
ワシ属	7	7		7		18	18	29	102	148	
ススキ属											
クマザサ科			7	15	15	15	7	7	7	7	

検出濃度（単位：kg/m ² -a）	0.33	0.84	1.14	2.56	1.27	0.21	1.07	1.29	1.88		
イネ	0.48 <td>0.48</td> <td>0.48</td> <td>0.82</td> <td>0.82</td> <td>1.84</td> <td>3.49</td> <td>6.47</td> <td>10.38</td> <td></td> <td></td>	0.48	0.48	0.82	0.82	1.84	3.49	6.47	10.38		
ワシ属				0.09							
クマザサ科				0.03	0.07	0.07	0.07	0.04	0.04	0.04	0.04

検出濃度の比は表1.2.1と仮定して算出。

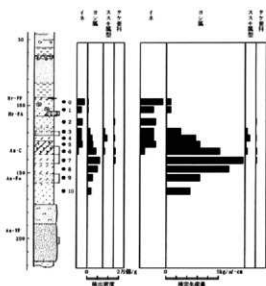


図2 西横手遺跡群（A-2区）、A地点におけるプラント・オパール分析結果

図表2 西横手遺跡群植物珪酸体分析結果（1）

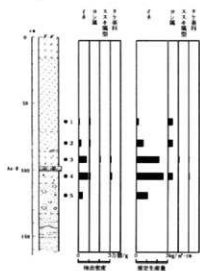


図3 西横手遺跡群 (A-2区)、目地点におけるプラント・ポールの分析結果

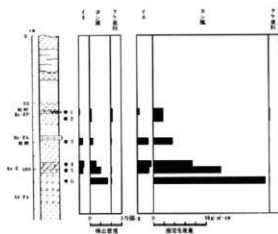


図4 西横手遺跡群 (A-2区)、C地点におけるプラント・ポールの分析結果

表3 西横手遺跡群 (C区水田面) におけるプラント・ポールの分析結果

植物群集 (単位: $\times 100$ 個/g)	
アベ	1
ヒメコノ	1
コシノ	129
スズキノ	61
アカノ	8
クサノ	1
植物多量度 (単位: $\log_{10} \mu\text{m}^2$)	
アベ	0.22
ヒメコノ	0.06
コシノ	2.35
スズキノ	0.09
アカノ	0.04

※図3の図に示すようにして表示。

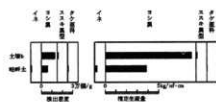
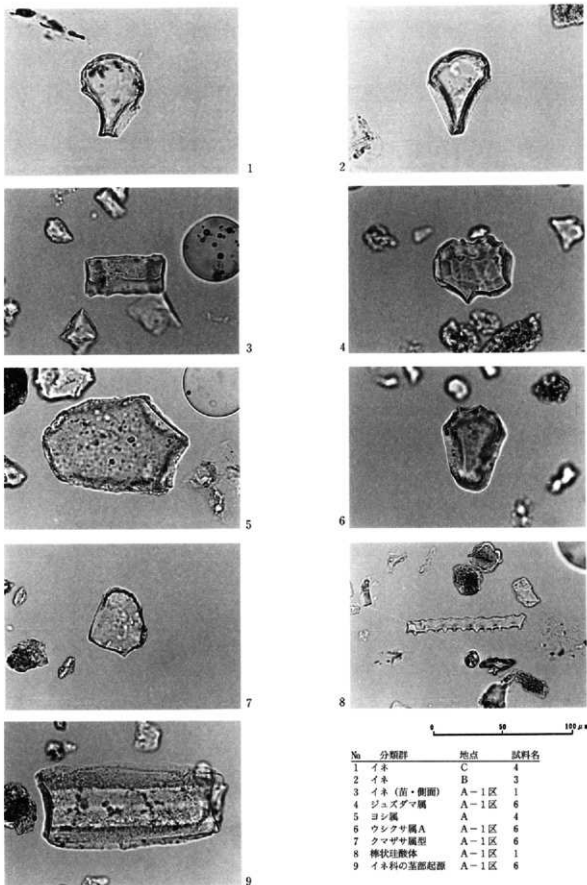


図5 西横手遺跡群、C区水田面におけるプラント・ポールの分析結果

図表3 西横手遺跡群植物珪酸体分析結果 (2)



No	分類群	地点	試料名
1	イネ	C	4
2	イネ	B	3
3	イネ (苗・側面)	A-1区	1
4	ジュズダマ属	A-1区	6
5	ヨシ属	A	4
6	ウシクサ属A	A-1区	6
7	クマザサ属型	A-1区	6
8	棒状珪酸体	A-1区	1
9	イネ科の基部起源	A-1区	6

写真1 西横手遺跡群植物珪酸体写真

表1 西横手遺跡群A-1区における微遺体(花粉)分析結果

分類群		1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2	4-1	4-2
学名	和名	直上面	Hr-FP	直上面	Hr-FP	直上面	Hr-FP	直上面	水田
Arboreal pollen	樹木花粉								
<i>Abies</i>	モミ属		1						
<i>Tsuga</i>	ツガ属		1						1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複結管束亜属								5
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		1	1		1			3
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		1						2
<i>Betula</i>	カバノキ属								4
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ								1
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属							1	13
<i>Fagus</i>	ブナ属								4
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属		1				3		30
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属				1				15
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ			1	1		1		2
<i>Elaeagnus</i>	グミ属					1			
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属			1					
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科		9		1				1
Nonarboreal pollen	草本花粉								
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属								2
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属								3
Gramineae	イネ科	6	3	2	1	1	2		21
<i>Oryza type</i>	イネ属型	1	2		1				3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2					2	1	4
Apiodeae	セリ葎科								1
Lactucoideae	タンポポ亜科			1	1	2			
Asteroidae	キク亜科					1			1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	3	1	1					7
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子					2		2	1
Trilate type spore	三条溝胞子		1						1
Arboreal pollen	樹木花粉	5	2	3	1	1	4	1	80
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	9	0	1	0	0	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	12	7	4	5	3	3	4	97
Total pollen	花粉総数	26	9	8	6	4	7	5	178
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	1	0	0	2	0	2	2	74
Charcoal	炭化物片	(+)	(+)	(++)	(+)	(++)	(+)	(++)	(+)
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

図表4 西横手遺跡群微遺体(花粉)分析結果

西横手遺跡の花粉・孢子遺体

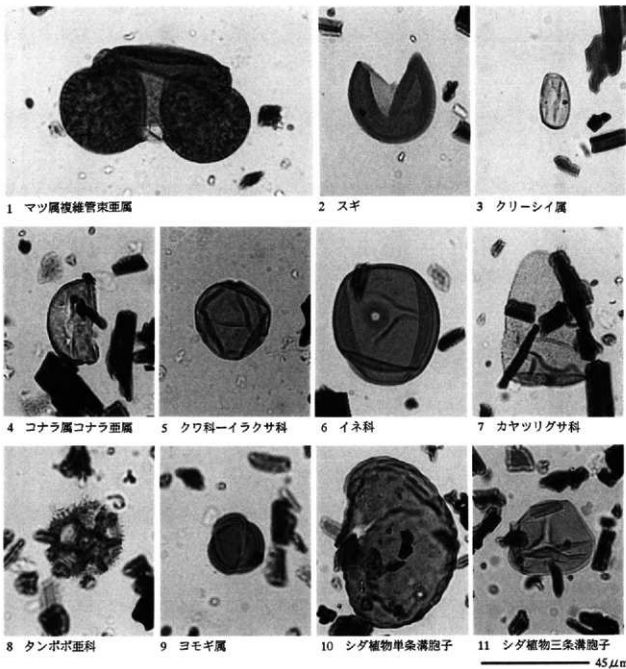


写真2 西横手遺跡群花粉・孢子遺体写真(1)

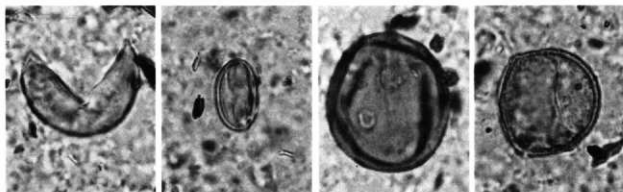
表2 西横手遺跡群A-1区における微遺体(花粉)分析結果

学名	分類群	1(Hr-FP直上) 2(Hr-FP直上) 3		
		植物遺存帯	植物遺存帯	(Hr-FP水田)
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属履維管束亜属	1	3	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	5	11	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	3	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ		1	
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリ-シイ属	6	3	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	2	3	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		2	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	2	5	1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属	1		
Gramineae	イネ科	8	26	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	6	32	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		1	
Lactucoideae	タンポポ亜科		1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	3	5	1
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	3	12	4
Trilate type spore	三条溝胞子	2	4	1
Arboreal pollen	樹木花粉	16	27	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	2	5	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	18	65	3
Total pollen	花粉総数	36	97	6
Unknown pollen	未同定花粉	1	1	0
Fern spore	シダ植物胞子	5	16	5
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)

図表5 西横手遺跡群花粉分析結果

第4章 自然化学分析

西横手遺跡の花粉・孢子遺体

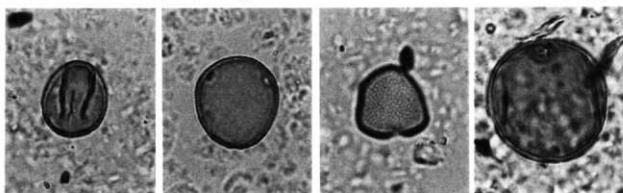


1 スギ

2 クリーシイ属

3 ブナ属

4 コナラ属コナラ亜属

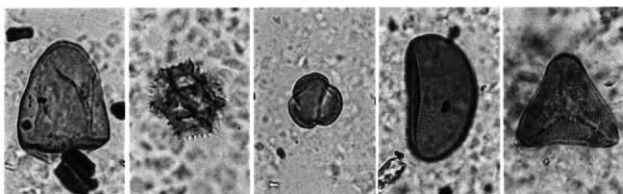


5 コナラ属アカガシ亜属

6 エノキ属ムクノキ

7 ガマ属ミクリ属

8 イネ属型



9 カヤツリグサ科

10 タンポポ亜科

11 ヨモギ属

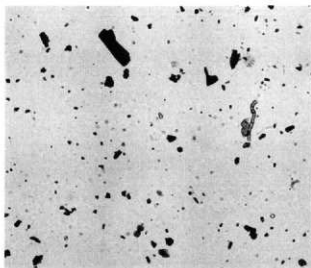
12 シダ植物単条溝胞子

13 シダ植物三条溝胞子

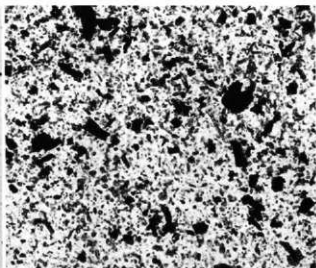
45μm

写真3 西横手遺跡群花粉・孢子遺体写真(2)

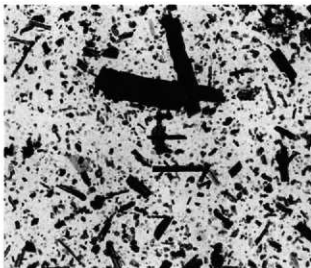
西横手遺跡の植物層（？）写真



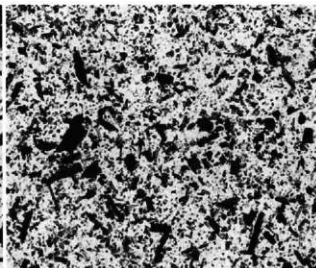
1 1-1



2 2-1



3 3-1



4 4-1

————— 180 μ m

写真4 西横手遺跡群植物層（？）写真

第5章 まとめ

第3章では、本遺跡で確認された遺構や遺物を、調査順に近世以降のものから時代を遡り記載した。本章では、これらを古い時代のものから順に簡単にまとめ直すことにする。その際に同時調査となった宿横手三波川遺跡とも関連させて考えたい。

〔古墳時代以前・その他〕

溝や倒木跡が見られる。自然科学分析の結果でも、本遺跡周辺が開発される以前は湿地や森林が展開していたことが示されている。なお、「古墳時代以前第1面」の杭列跡2ヶ所(A-1・2杭列)は、打ち込まれた面は不明であり、位置からは中世以降の大規模河川との関連も推測された。さらにこの時期の周辺環境を考えると、これらの杭列は後世のものである可能性が高くなる。

〔古墳時代〕

この時代では、水田が営まれるようになる。4時期の水田跡を確認したが、いずれも北西から南東に向かって低くなる地形の傾斜に併せて畦畔を設けている。これは、後述するAs-B下水田が南北畦畔を持つのと対比的である。しかし、一つ一つの水田区画が造成し易いこと、土地の傾斜を生かした配水ができることから考えればごく自然のことであろう。実際、残存のよいHr-FP下水田でも用水路が確認できないのは、自然の傾斜を利用した配水が可能であったことを示唆している。具体的な配水の方法は不明であるが、オオアゼは用水を堰き止めたり他の大区画に流したりする機能も持っていたと思われ、各時期を通じて配水に最適な位置に踏襲され続けたと考えられる。ただし、河川や湧水点などから用水を導いてきた水路の存在は否定されるものではない。

なお、宿横手三波川遺跡では各水田跡の小区画は傾斜方向、即ち配水方向に長径(タテアゼ)を設ける傾向にあるが、本遺跡ではこれらの長径を傾斜と直行させる大区画も見られた。ただし、この状態のみでは大区画ごとに配水方向を違えていたとは判断しきれなかった。

一方、本遺跡で最古の水田跡は「古墳時代第4面」のAs-C下水田である。オオアゼと思われる高まり1条(BC-1大畦)のみの確認であり、自然科学分析でもこの面で稲作が行われた可能性は低いとされている。従って、この高まりの性格が問題となるが、特定はできない。

〔古代〕

この時代の遺構で特徴となるのは、まず「古代BC面-1」の遺構群であろう。「L」字状に屈曲した溝は居館の周濠と思われる。また、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡も同一の方向性を持ち、この居館の敷地内に配置されていた可能性もある。ただし、これらの残存状態が良好でなく、確認範囲も狭いことで十分な考察はできない。近隣の遺跡の調査に期待したいところである。

一方、「古代A-1面」A区西半では南北畦畔(As-B下水田)が残存していた。この水田の基盤となる土層はA区東半でも一部堆積しており、この部分でも水田が営まれていたと考えてよい。

一般的にAs-Bに被覆された水田跡は、いわゆる「条里型水田」である事例が多い。本遺跡内では確認できなかったが、宿横手三波川遺跡のAs-B下水田では、約109~110cm単位の条里型割りか推定されている。その南北方向の推定ラインY₄₂₀上には、「古代A-2面」の同規模で併走するA-47・48溝が該当する。これらは、宿横手三波川遺跡と同じくHr-FP泥流の上面で確認された「古代面基底」E5-2・3溝と同一のものと考えられ、ともに「坪」を規定していた可能性が高い。また東西方向の推定ラインX₄₆₂上には、

遺構は確認できなかつたが、前述した大規模河川が位置している。この地割りを利用したものであろうか。また、このライン北側には「古代BC面-2」で重要な機能が予想されたBC-10溝（X≒471）が併走している。しかし位置に若干のずれがあり、この地割りを規定したものか断定はできない。なお、この推定ラインは西横手遺跡群Ⅰ・Ⅱ（第2章第3節参照）の「B軽石下水田跡」で推定された条里型地割りにも合致している。この周辺地域の調査がさらに進めば、この地割りについてより具体的な状態が把握できるであろう。

〔中世〕

「中世面」A区全面に大小の溝が確認されている。これらを走向や規模から4分類したが、溝群a・bについては大規模河川からの用水を水田に導く目的が想像できた。実際に宿横手遺跡には同じAs-B混土上面（「中世第2面」）で確認された中世第2面水田が展開している。しかし、この水田跡の水路との連続性は十分に把握できないため、実際に関連していたかは断定できない。

さらに、同規模の溝複数が併走する溝群cには端部が完結するものもあり、水路ではない可能性も考えた。この場合、畠のサクのようなものとも思われるが根拠は乏しい。

また、東西、南北方向の溝群dのうち、A-22溝は宿横手三波川遺跡の「中世第2面」E3-23溝と、同じくA-23・24溝は、E3-24・25溝とそれぞれ連続する可能性が高い。この宿横手三波川遺跡の溝は掘立柱建物跡や多数の柱穴が確認された部分に位置しており、これらの建物群に伴うものと思われた。なお、本遺跡のこの面では建物群は確認できなかった。

〔近世以降〕

この時代の遺構として特徴的なのは屋敷跡（A-1屋敷）、及び墓墳（A-1～18墓墳）であろう。

まず屋敷跡は、現民家の直下で確認された。柱の基礎の配列から、「田舎間」の間取りで土間を持つ構造が推定された。この土間部分に残存していた石組みの具体的な機能については、今後の課題となろう。なお、南隣の宿横手三波川E区では石組みを伴い南北走る溝（E1-1溝）があり、この北部が屋敷の内部と推定された。この溝とA-1屋敷との関連は希薄であるが、これらの部分が近世には居住域となっていたことが判る。

また、墓墳についてはA-18墓墳が屋敷跡付近にある以外は、現墓地の直下に位置している。なお、副葬品には「土人形」8個（A-7墓墳出土）も見られる。この墓墳が小規模であることから、子供を埋葬する際に供えられたと思われる。しかし一方で、死者の年齢に係わらず玩具を副葬品とする葬送儀礼があった可能性も考えねばならない。

以上、本遺跡内の土地は、古墳時代に湿地や森林を水田として開発されて以来、居館、用水路、さらに居住域や墓域と様々な利用されながら現代に至っていることが確認できた。ここに記載した以外の遺構を含めて機能が不明なものも多く、今後の課題として残る。さらに本遺跡全体としては、このように土地利用の変遷が著しい要因について検討することが最大の課題となろう。

〔参考文献〕

- 『宿横手三波川遺跡』 側道部 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998
『西横手遺跡群(Ⅰ)・『同(Ⅱ)』 高崎市教育委員会 1989・1990
(宿横手三波川遺跡本線部については同時編集の『宿横手三波川遺跡』を参照されたい。)

第5章 まとめ

〔西横手遺跡群・遺構名称対照表〕

1. 屋敷跡

記載名称	発掘調査時名称
(近世面)	
A-1屋敷	A-1区1面1号石組

2. 竪穴式住居

記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称
(古代BC面-1)		(古代BC面-2)	
BC-1住居	B区1面1号住居	BC-2住居	B区1面2号住居

3. 掘立柱建物

記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称
(古代A-2面)		(古代BC面-1)	
A-1掘立柱建物	A-2区3面1号掘立柱建物	BC-1掘立柱建物	C区1面1号掘立柱建物

4. 水田跡

記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称
(古墳時代第1面)		(古墳時代第2面)		(古墳時代第3面)	
A-1大畦	名称なし	A-4大畦	名称なし	A-7大畦	名称なし
A-2大畦	名称なし	A-5大畦	名称なし		[古墳時代第4面]
A-3大畦	名称なし	A-6大畦	名称なし	BC-1大畦	名称なし

5. 土坑 (近世面「桶埋設土坑」を含む。)

記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称
(近世面)				(古代A-2面)	
A-1土坑	A-1区1面1号土坑	A-23土坑	A-1区2面3号土坑	A-45土坑	A-1区4面1号土坑
A-2土坑	A-1区1面2号土坑	A-24土坑	A-1区2面4号土坑	A-46土坑	A-1区4面2号土坑
A-3土坑	A-1区1面3号土坑	A-25土坑	A-1区2面5号土坑	A-47土坑	A-1区4面3号土坑
A-4土坑	A-1区1面4号土坑	A-26土坑	A-1区2面6号土坑	A-48土坑	A-1区4面4号土坑
A-5土坑	A-1区1面5号土坑	A-27土坑	A-1区2面7号土坑	A-49土坑	A-1区4面5号土坑
A-6土坑	A-1区1面6号土坑	A-28土坑	A-1区2面10号土坑	A-50土坑	A-1区4面6号土坑
A-7土坑	A-1区1面7号土坑	A-29土坑	A-1区2面11号土坑	A-51土坑	A-1区4面7号土坑
A-8土坑	A-1区1面8号土坑	A-30土坑	A-2区2面2号土坑	A-52土坑	A-1区4面8号土坑
A-9土坑	A-1区1面9号土坑	A-31土坑	A-2区2面3号土坑	A-53土坑	A-2区3面1号土坑
A-10土坑	A-1区1面10号土坑	A-32土坑	A-2区2面4号土坑	A-54土坑	A-2区3面2号土坑
A-11土坑	A-1区1面11号土坑	(古代A-1面)		A-55土坑	A-2区3面3号土坑
A-12土坑	A-1区1面12号土坑	A-33土坑	A-1区3面1号土坑	A-56土坑	A-2区3面5号土坑
A-13土坑	A-1区1面13号土坑	A-34土坑	A-1区3面2号土坑		
A-14土坑	A-1区1面14号土坑	A-35土坑	A-1区3面3号土坑		
A-15土坑	A-1区1面15号土坑	A-36土坑	A-1区3面4号土坑	BC-1土坑	C区1面1号土坑
A-16土坑	A-1区1面16号土坑	A-37土坑	A-1区3面5号土坑	BC-2土坑	C区1面2号土坑
A-17土坑	A-1区1面17号土坑	A-38土坑	A-1区3面6号土坑	BC-3土坑	C区1面3号土坑
A-18土坑	A-1区1面18号土坑	A-39土坑	A-1区3面7号土坑	BC-4土坑	B区1面1号土坑
A-19土坑	A-1区1面19号土坑	A-40土坑	A-1区3面8号土坑	BC-5土坑	B区1面2号土坑
A-20土坑	A-1区1面20号土坑	A-41土坑	A-1区3面9号土坑		[古墳時代以前1面]
A-21土坑	A-2区1面1号土坑	A-42土坑	A-1区3面10号土坑	A-57土坑	A-1区9面1号土坑
(中世面)		A-43土坑	A-1区3面11号土坑		
A-22土坑	A-1区2面1号土坑	A-44土坑	A-1区3面12号土坑		

6. 井戸

記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称
(中世面)		(古代A-2面)	
A-1井戸	A-1区2面2号土坑	A-3井戸	A-2区3面4号土坑
A-2井戸	A-1区2面8号土坑		

7. 墓墳

記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称
〔近世面〕					
A-1墓墳	A-2区1面1号墓墳	A-7墓墳	A-2区1面7号墓墳	A-14墓墳	A-2区1面14号墓墳
A-2墓墳	A-2区1面2号墓墳	A-8墓墳	A-2区1面8号墓墳	A-15墓墳	A-2区1面15号墓墳
A-3墓墳	A-2区1面3号墓墳	A-9墓墳	A-2区1面9号墓墳	A-16墓墳	A-2区1面16号墓墳
A-4墓墳	A-2区1面4号墓墳	A-10墓墳	A-2区1面10号墓墳	A-17墓墳	A-2区1面17号墓墳
A-5墓墳	A-2区1面5号墓墳	A-11墓墳	A-2区1面11号墓墳	A-18墓墳	A-1区1面21号墓墳
A-6墓墳	A-2区1面6号墓墳	A-12墓墳	A-2区1面12号墓墳	〔中世面〕	
		A-13墓墳	A-2区1面13号墓墳	A-19墓墳	A-1区2面9号墓墳

8. 溝

記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称
〔近世面〕					
A-1溝	A-1区1面1号溝	A-21溝	名称なし	A-49溝	A-2区3面9号溝
A-2溝	A-1区1面2号溝	A-22溝	A-1区2面9号溝	A-50溝	A-2区3面10号溝
A-3溝	A-1区1面3号溝	A-23溝	A-1区2面10号溝	〔古代BC面-1〕	
A-4溝	A-1区1面4号溝	A-24溝	A-1区2面11号溝	BC-1溝	BC区1面1号溝
A-5溝	A-1区1面5号溝	A-25溝	A-1区2面4号溝	BC-2溝	BC区1面2号溝
A-6溝	A-2区1面2号溝	A-26溝	A-1区2面5号溝	BC-3溝	BC区1面3号溝
A-7溝	A-2区1面3号溝	A-27溝	A-1区2面6号溝	BC-4溝	BC区1面4号溝
A-8溝	A-2区1面4号溝	A-28溝	A-1区2面8号溝	BC-5溝	BC区1面5号溝
A-9溝	A-2区1面5号溝	A-29溝	A-1区2面9号溝	BC-6溝	BC区1面6号溝
A-10溝	A-2区1面6号溝	A-30溝	A-2区2面10号溝	BC-7溝	BC区1面7号溝
A-11溝	A-2区1面7号溝	A-31溝	A-2区2面12号溝	BC-8溝	BC区1面8号溝
BC-17溝	BC区1面17号溝	A-32溝	A-2区2面13号溝	BC-9溝	BC区1面9号溝
〔中世面〕					
A-12溝	A-1区2面1号溝	A-33溝	A-1区2面14号溝	BC-16溝	BC区1面16号溝
	A-2区2面11号溝	A-34溝	A-2区2面15号溝	〔古代BC面-2〕	
A-13溝	A-1区2面2号溝	A-35溝	A-2区2面16号溝	BC-10溝	BC区1面10号溝
	A-2区2面19号溝	A-36溝	A-2区2面17号溝	BC-11溝	BC区1面11号溝
		〔古代A-2面〕		BC-12溝	BC区1面12号溝
A-14溝	A-1区2面3号溝	A-37溝	A-1区4面1号溝	BC-14溝	BC区1面14号溝
	A-2区2面18号溝	A-38溝	A-1区4面2号溝	BC-15溝	BC区1面15号溝
A-15溝	A-1区2面4号溝	A-39溝	A-1区4面3号溝	BC-17溝	BC区1面17号溝
	A-2区2面7号溝	A-40溝	A-1区4面4号溝	〔古墳時代3面〕	
A-16溝	A-1区2面5号溝	A-41溝	A-2区3面1号溝	A-51溝	A-1区7面1号溝
A-17溝	A-1区2面6号溝	A-42溝	A-2区3面2号溝	A-52溝	A-1区6面1号溝
	A-2区2面3号溝	A-43溝	A-2区3面3号溝		A-1区6面2号溝
A-18溝	A-1区2面7号溝	A-44溝	A-2区3面4号溝		〔古墳時代以前第1面〕
	A-2区2面1号溝	A-45溝	A-2区3面5号溝	A-53溝	A-1区8面1号溝
A-19溝	A-1区2面8号溝	A-46溝	A-2区3面6号溝		〔古墳時代以前第2面〕
	A-2区2面2号溝	A-47溝	A-2区3面7号溝	A-54溝	A-1区9面1号溝
A-20溝	名称なし	A-48溝	A-2区3面8号溝	A-55溝	A-2区7面1号溝

9. 大規模河川・杭列・倒木痕

記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称
大規模河川	BC区1面13号	A-2杭列	A-2区7面1杭列	A-3倒木痕	A-2区7面1号風倒木
〔古墳時代以前第1面〕		A-1倒木痕	A-1区8面1号風倒木	A-4倒木痕	A-2区7面2号風倒木
A-1杭列	A-1区8面1 ～4号杭列	〔古墳時代以前第2面〕		A-5倒木痕	A-2区7面3号風倒木
		A-2倒木痕	A-1区9面1号風倒木	A-6倒木痕	A-2区7面4号風倒木

10. 欠番、その他

記載名称	発掘調査時名称	記載名称	発掘調査時名称
〔近世面〕			
〔古墳時代第1面〕			
旧A-13土坑	A-1区1面13号土坑	欠番	A-2区4面1号土坑
旧A-9溝	A-2区1面5号溝		

※〔近世面〕の二遺構名については、これらから出土した遺物を記述する欄に用いている。

発掘調査報告書抄録

フリガナ	ニシヨコテイセキゲン
書名	西横手遺跡群
副書名	北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第3集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第274集
編著者名	岩崎 琢郎 熊谷 健
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL0279 (52) 2511
発行年月日	2001年1月19日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	原因
		市町村	遺跡番号					
ニシヨコテイセキゲン 西横手遺跡群	チカサキシ 高崎市 シロコテコウマツ 宿横手町	10202		36°19'35"	139°5'50"	19961205	2,930	北関東自動車道建設工事に伴う事前調査
						}		
						19970127		
						}		
						19970401		
						}		
						19980531		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西横手遺跡群		近世	屋敷跡・溝・土坑・墓壇・農具痕	陶磁器・銭貨・金属・石製品	
		中世	井戸・土坑・墓壇・溝	陶磁器・銭貨・金属・石製品	
	館跡	古代	住居跡・掘立柱建物跡	須恵器・土師器	居館の一部か。
	水田		水田跡・溝・土坑		
	水田	古墳	水田跡・溝	須恵器・土師器	「小区画水田」
	古墳以前	溝・土坑・杭列	木杭		

写 真 图 版



1 西横手遺跡群全景（南より）



2 西横手遺跡群全景（東より）



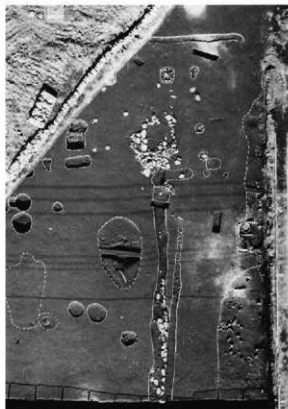
1 近世面A区西半(東より)



2 近世面A区東半(北より)



3 近世面A区東半(東より)



4 A-1 屋敷、A-1・2溝(上が北)



1 A-1 屋敷石組 (西より)



2 A-1・2 溝 (南より)



3 A-1・2 溝石組 (東より)



4 A-1・2 溝掘り形 (南より)



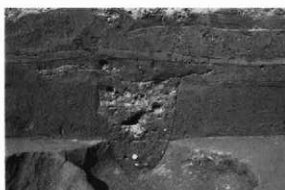
5 A-5 土坑 (西より)



6 A-6 土坑 (南より)



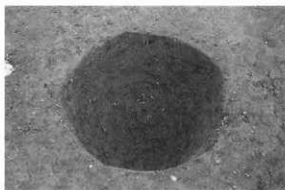
7 A-7 土坑 (西より)



8 A-7 土坑断面 (南東より)



1 A-9土坑 (南より)



2 A-10土坑 (南より)



3 A-14~16土坑 (東より)



4 A-17土坑 (南東より)



5 A-19土坑 (南より)



6 A-20土坑 (東より)



7 近世面A区東半墓壇群 (南より)



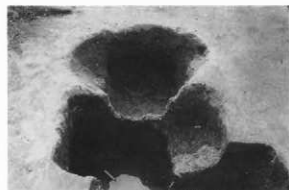
8 A-1・8墓壇 (東より)



1 A-2・3・6墓墳(東より)



2 A-6墓墳(東より)



3 A-4・5墓墳(東より)



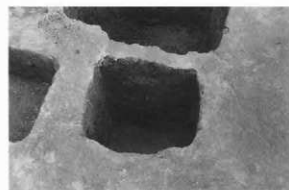
A-4・5墓墳遺物出土状態(北より)



5 A-7墓墳(東より)



6 A-10墓墳(南より)



7 A-9墓墳(南より)



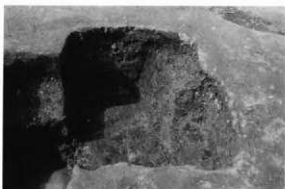
A-9墓墳木箱出土状態(東より)



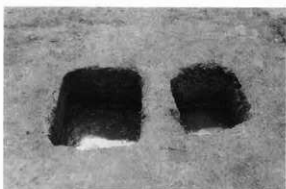
1 A-11墓墳 (東より)



2 A-11墓墳漆碗出土状態 (北より)



3 A-12・13墓墳 (南より)



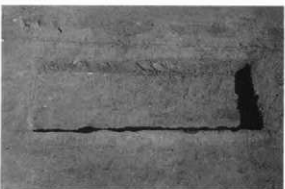
4 A-14・15墓墳 (東より)



5 A-16・17墓墳 (北より)



6 A-18墓墳 (南より)



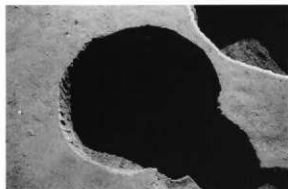
7 A-18墓墳木棺? 確認状態 (南より)



1 A-8土坑 (南より)



2 A-8土坑木片出土状態 (南より)



3 A-11・12土坑 (西より)



4 A-11・12土坑木桶等出土状態 (西より)



5 A-18土坑 (西より)



6 A-18土坑木桶出土状態 (南より)



7 A-1土坑 (南より)



8 A-2土坑 (南より)



1 A-21土坑 (北より)



2 A-3土坑 (南より)



3 A-4土坑 (南より)



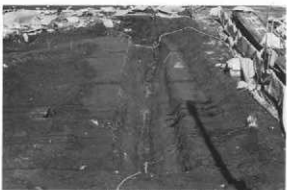
4 A-4土坑埋設物?確認状態 (南より)



5 近世面A区農具痕 (南より)



6 A-3溝 (西より)



7 A-4溝 (南より)



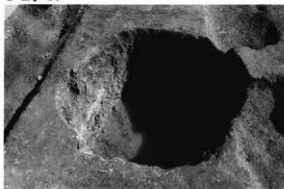
8 A-7・8溝 (北より)



1 中世面A区西半 (東より)



2 中世面A区東半 (東より)



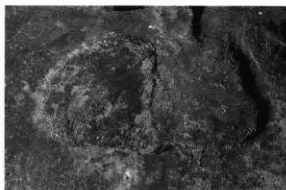
1 A-1井戸 (西より)



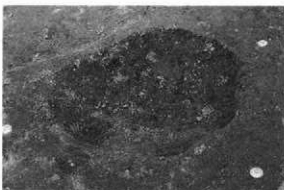
2 A-2井戸 (南東より)



3 A-22土坑 (東より)



4 A-23土坑 (西より)



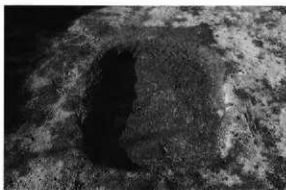
5 A-24土坑 (南より)



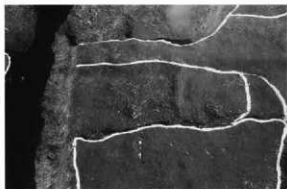
6 A-25土坑 (西より)



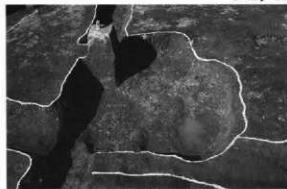
7 A-26土坑 (南より)



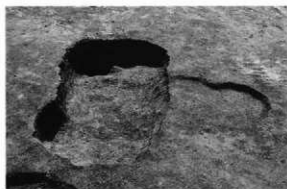
8 A-27土坑 (北より)



1 A-28土坑 (南より)



2 A-29土坑 (南より)



3 A-31・32土坑 (東より)



4 A-30土坑 (東より)



5 A-19墓壇 (東より)



6 A-19墓壇人骨等出土状態 (東より)



1 A-30溝 (東より)



2 A-30溝 (北西より)



3 A-12溝西半 (東より)



4 A-12溝東半 (東より)



5 A-35溝 (北東より)



6 A-36溝 (南西より)



7 中世面溝群b (北より)



8 A-25~27溝 (南より)



1 A-27・31溝 (西より)



2 A-28溝 (北東より)



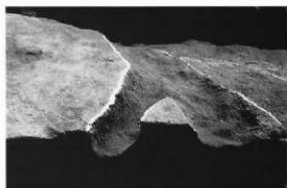
3 A-29溝 (北より)



4 A-32溝 (南東より)



5 A-33溝 (北東より)



6 A-34溝 (北より)



7 中世面溝群c・a西半 (東より)

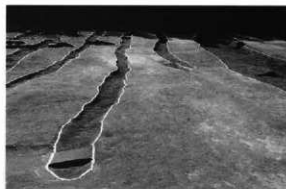


8 中世面溝群c・a東半 (右が北)

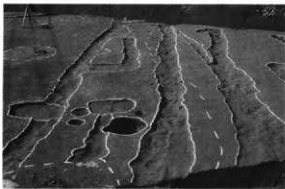
PL. 14



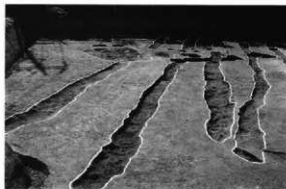
1 A-13・14溝西半 (南東より)



2 A-13・14溝東半 (南東より)



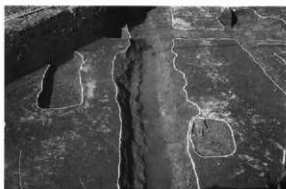
3 A-15~20溝西半 (南東より)



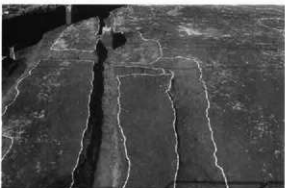
4 A-15・17~19溝東半 (南東より)



5 中世面溝群d (西より)



6 A-22溝 (南より)



7 A-23・24溝 (南より)



1 古代A-1面 (東より)



2 A-34土坑 (南より)



3 A-35土坑 (西より)



4 A-36土坑 (南西より)



5 A-37土坑 (東より)



1 A-38土坑 (南より)



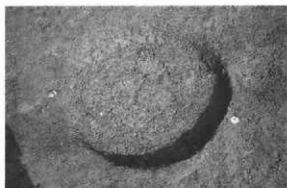
2 A-39土坑 (南より)



3 A-40土坑 (南より)



4 A-41土坑 (南西より)



5 A-42土坑 (南より)



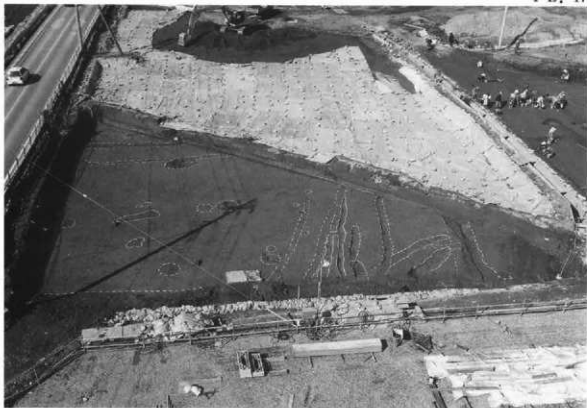
6 A-43土坑 (南より)



7 A-44土坑 (南東より)



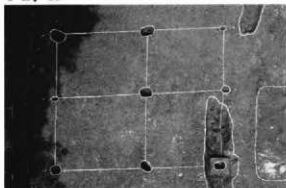
8 As-B下水田A区南西部 (南東より)



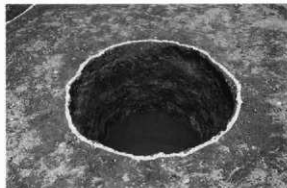
1 古代A-2面西半(東より)



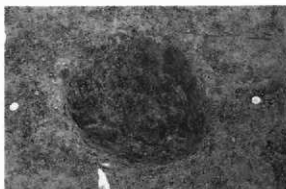
2 古代A-2面東半(下が北)



1 A-1 掘立柱建物 (上が北)



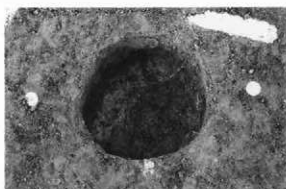
2 A-3 井戸 (南より)



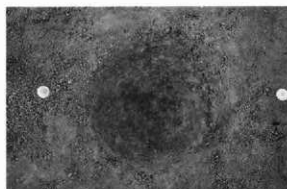
3 A-45 土坑 (西より)



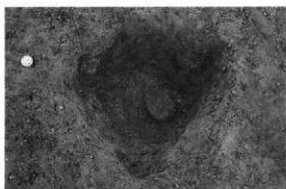
4 A-46 土坑 (南より)



5 A-47 土坑 (南より)



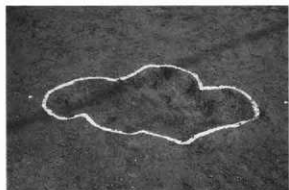
6 A-48 土坑 (南より)



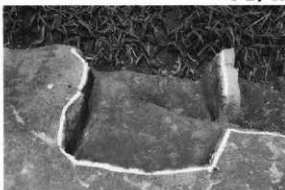
7 A-49 土坑 (南より)



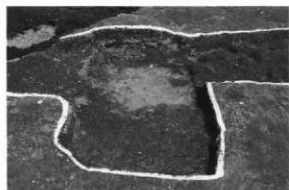
8 A-50・51 土坑 (南より)



1 A-52土坑 (南より)



2 A-53土坑 (南より)



3 A-54土坑 (西より)



4 A-55土坑 (南より)



5 A-37・38溝 (東より)



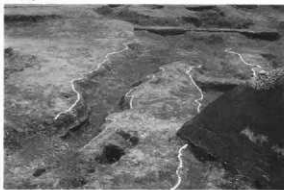
6 A-39・40溝 (東より)



7 A-41溝 (南東より)



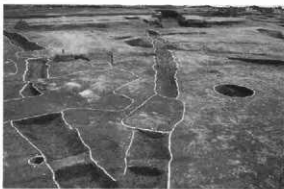
8 A-42溝 (南東より)



1 A-43・44溝 (南西より)



2 A-45溝 (南西より)



3 A-46溝 (南西より)



4 A-47・48溝、56土坑 (南より)



5 A-49溝 (西より)



6 A-50溝 (北西より)



1 古代BC面-1〔B区〕(西より)



2 古代BC面-1〔C区〕(南西より)



1 BC-1住居 (北東より)



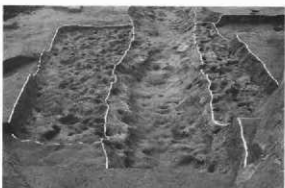
2 BC-1住居遺物出土状態 (西より)



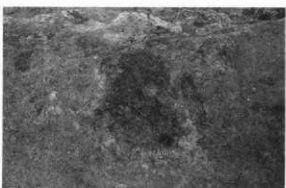
3 BC-1住居竈付近 (西より)



4 BC-1住居掘り形 (北東より)



5 BC-2住居 (東より)



6 BC-2住居炭化物確認状態 (南より)



7 BC-2住居炭化物除去状態 (北より)



8 BC-2住居掘り形 (東より)



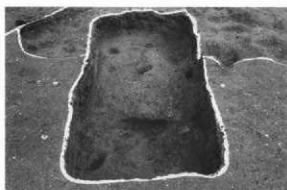
1 BC-1 掘立柱建物 (北より)



2 BC-2 土坑 (西より)



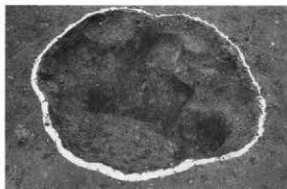
3 BC-2 土坑遺物出土状態 (東より)



4 BC-3 土坑 (西より)



5 BC-4 土坑 (東より)



6 BC-5 土坑 (南より)



7 BC-5 土坑遺物出土状態 (南より)



1 BC-1溝 (南より)



2 BC-1・2・4溝 (東より)



3 BC-3溝 (南東より)



4 BC-5溝 (北より)



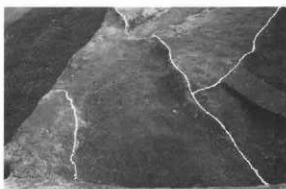
5 BC-6、7溝 (東より)



6 BC-8溝 (北西より)



7 BC-9溝 (東より)



8 BC-10溝B区部分 (西より)



1 BC-10溝C区部分 (西より)



2 BC-11溝C区部分 (北西より)



3 BC-11溝B区部分 (南東より)



4 BC-12溝 (北西より)



5 BC-14溝 (北より)



6 BC-15溝 (南より)



1 古墳時代第1面A区西半(南より)



2 古墳時代第1面A区東半(南西より)



1 Hr-FP下水田A区西部 (南東より)



2 A-1大畦水口? (南より)



3 Hr-FP下水田A区南西部 (南西より)



4 Hr-FP下水田A区北端 (北東より)



5 Hr-FP下水田A区東部 (北東より)



6 Hr-FP下水田A区東端 (南東より)



7 Hr-FP下水田A区南部 (南東より)



8 Hr-FP下水田A区中央部 (南東より)



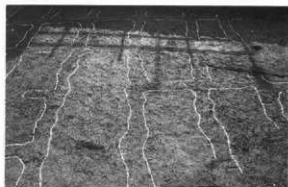
1 古墳時代第1面C区(南東より)



2 古墳時代第1面B区(南東より)



3 Hr-FP下水田B・C区中央部(北東より)



4 Hr-FP下水田B・C区北西部(北より)



1 古墳時代第2面A区西半（東より）



2 古墳時代第2面A区東半（上が北）



1 A-4大畦 (南東より)



2 Hr-FA下水田A区西部 (南東より)



3 Hr-FA下水田A区東部 (北東より)



4 Hr-FA下水田A区東部 (東より)



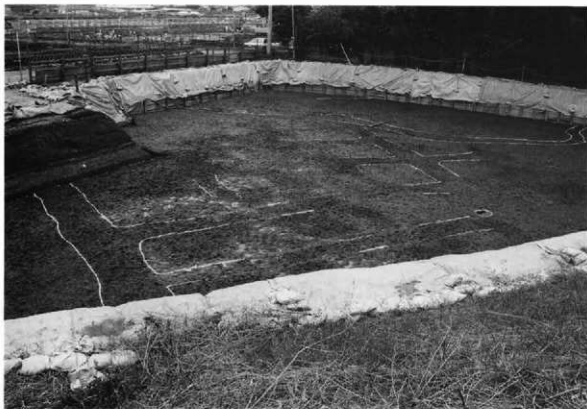
5 Hr-FA下水田A区東部 (南西より)



6 Hr-FA下水田A区南部 (南西より)



1 古墳時代第3面A区西半 (東より)



2 古墳時代第3面A区東半 (北東より)



1 A-7大畦 (南東より)



2 古墳時代第3面A区ヒト足跡 (南より)



3 As-C混土上水田A区中央部 (東北より)



4 As-C混土上水田A区東部 (北より)



5 A-51溝 (南東より)



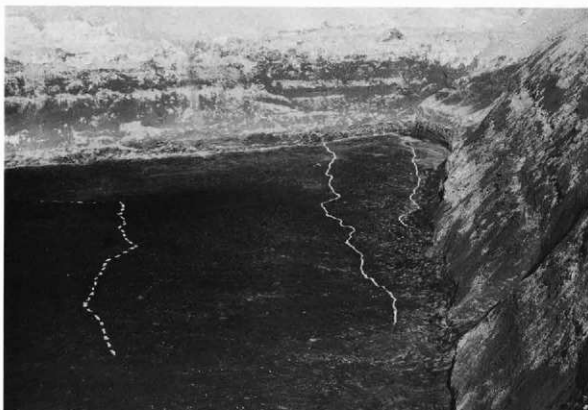
7 A-52溝 (南より)



6 A-51溝南端 (南東より)



1 古墳時代第4面B区 (南東より)



2 古墳時代第4面C区 (南より)



1 古墳時代以前第1面A区西半(東より)



2 A-53溝(東より)



3 A-1杭列木杭出土状態(南より)



5 A-2杭列(東より)



4 A-1杭列木杭出土状態(西より)



1 古墳時代以前第2面A区西半 (南より)



2 古墳時代以前第2面A区東半 (東より)



4 A-54溝 (東より)



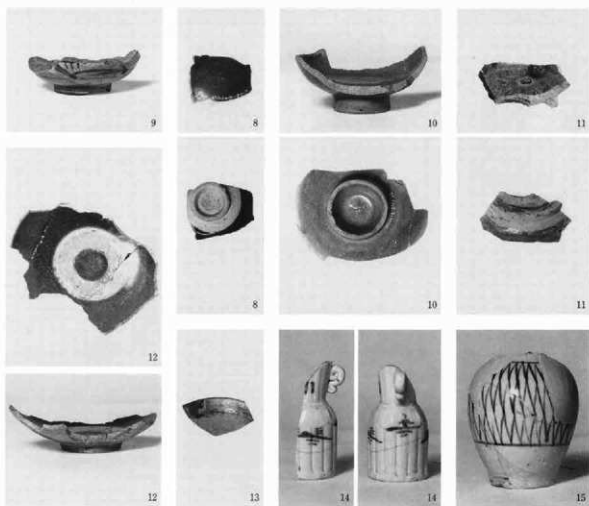
3 A-57土坑 (南より)



5 A-55溝 (南東より)



A-1 屋敷出土



A-1 溝出土



22



23



23



16



18



18



19



17



17



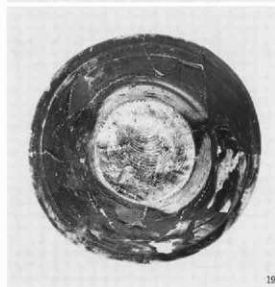
19



20



20



19

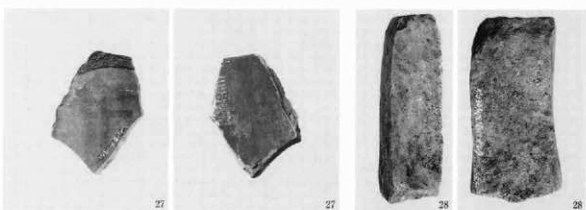
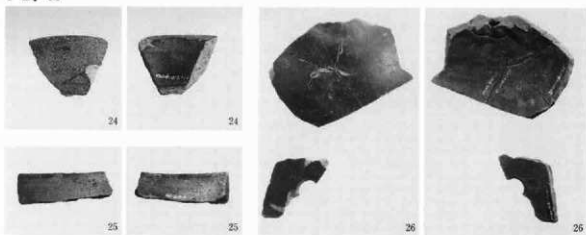


21

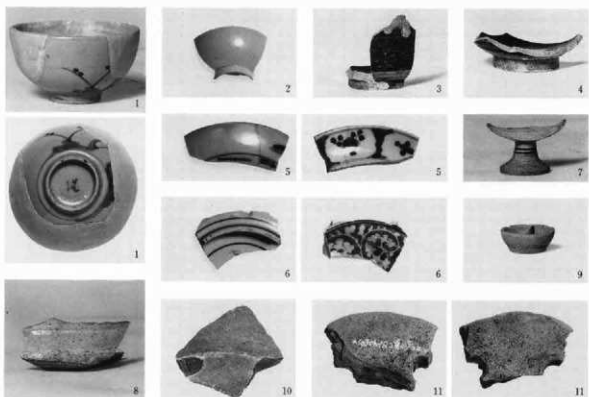


21

A-1 溝出土



A-1 清出土



A-2 清出土



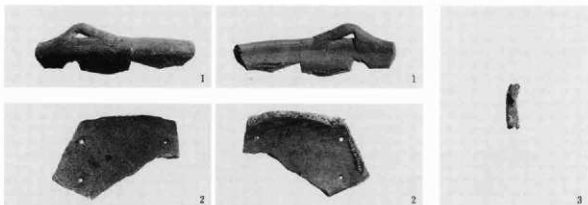
A-7 土坑出土



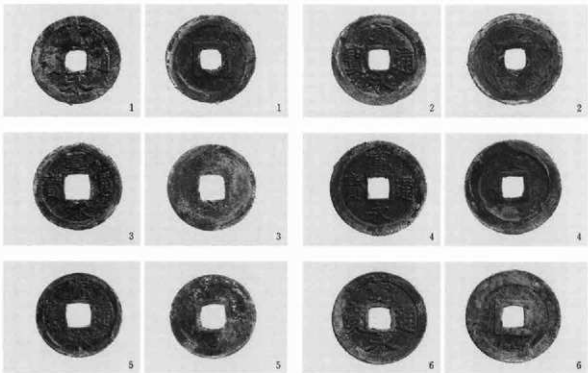
A-15 土坑出土



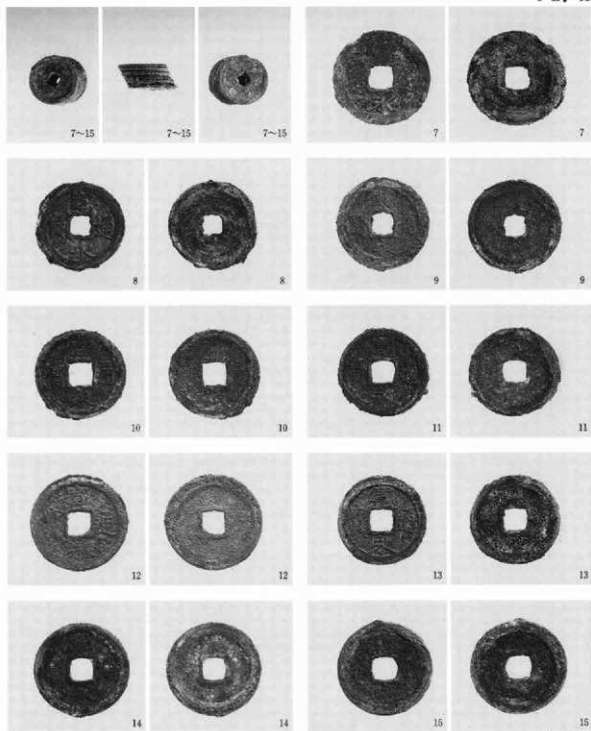
A-15土坑出土



A-16土坑出土

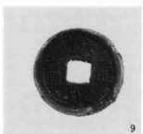


A-2墓坑出土

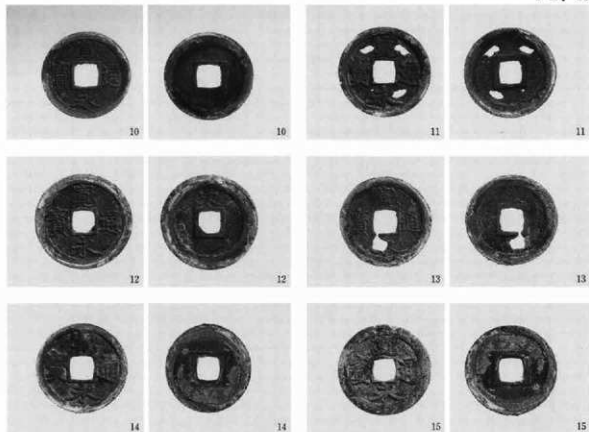


A-2 墓坑出土

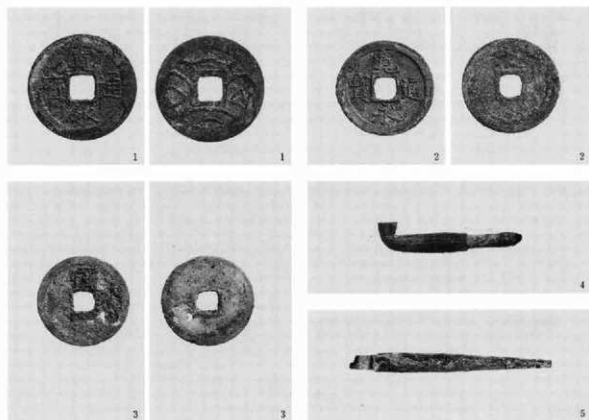
近世以降の遺物



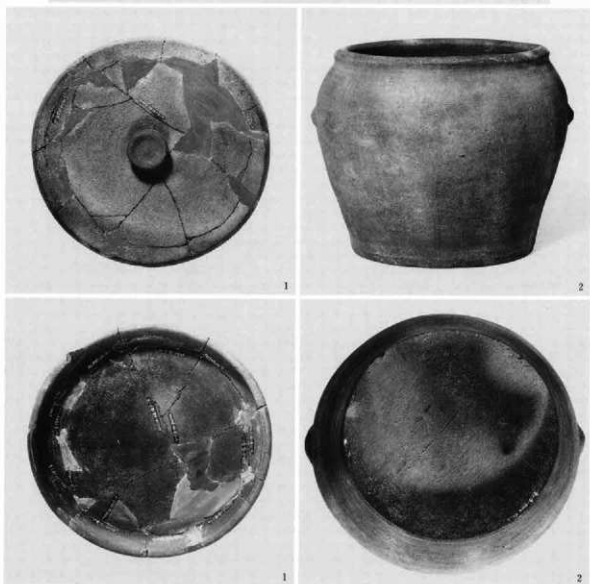
A-3 墓壙出土



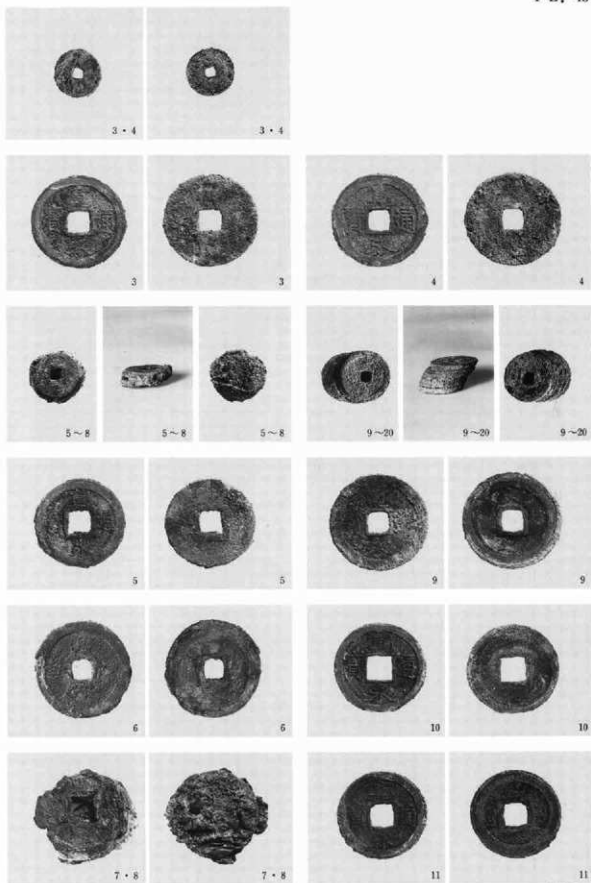
A-3 墓横出土



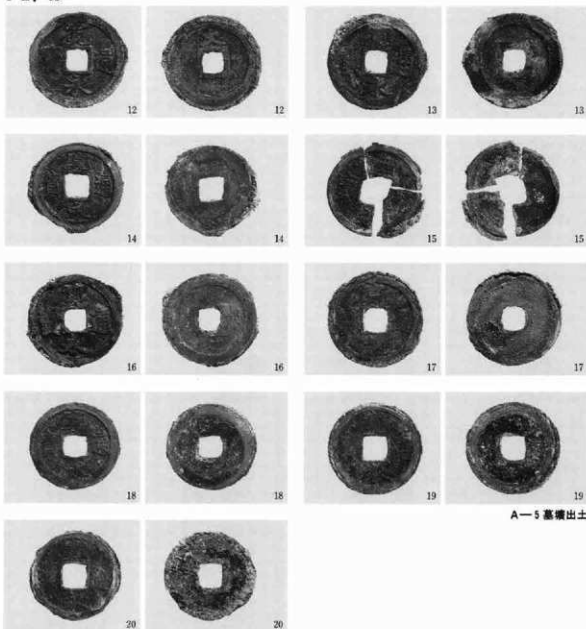
A-4 墓横出土



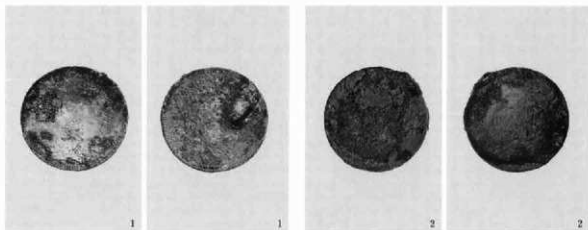
A-5 墓横出土



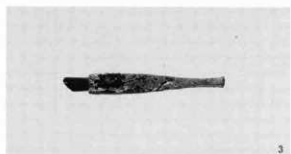
A-5 墓横出土



A-5 墓横出土



A-6 墓横出土



3



4



4

A-6 墓塚出土



1



1



2



2



3



3



4



4



5



5



6



6



7



7

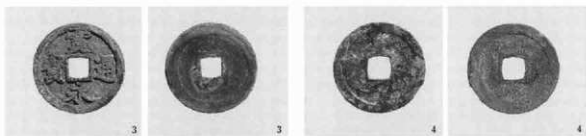


8

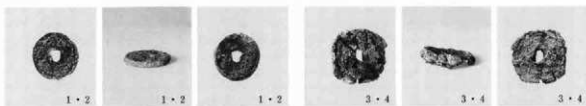


8

A-7 墓塚出土



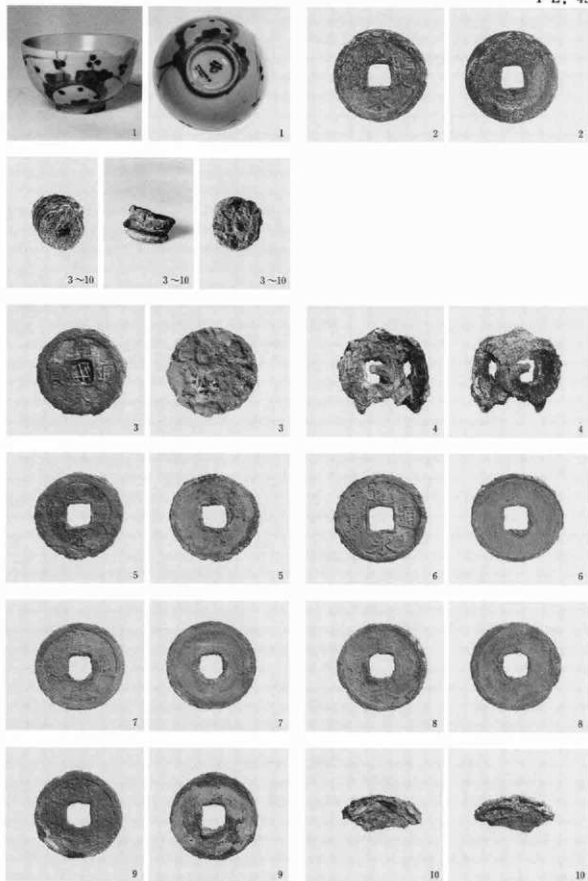
A-9 墓横出土



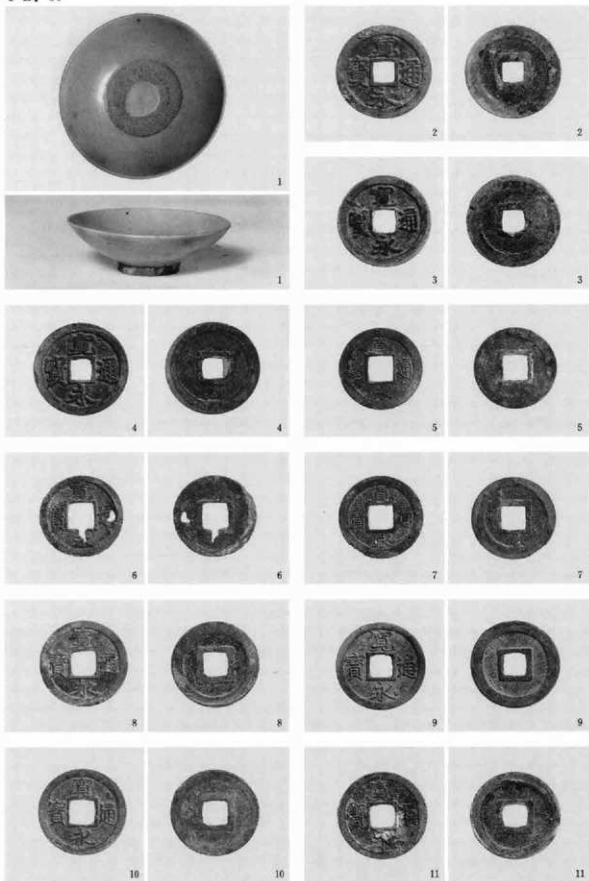
A-10 墓横出土



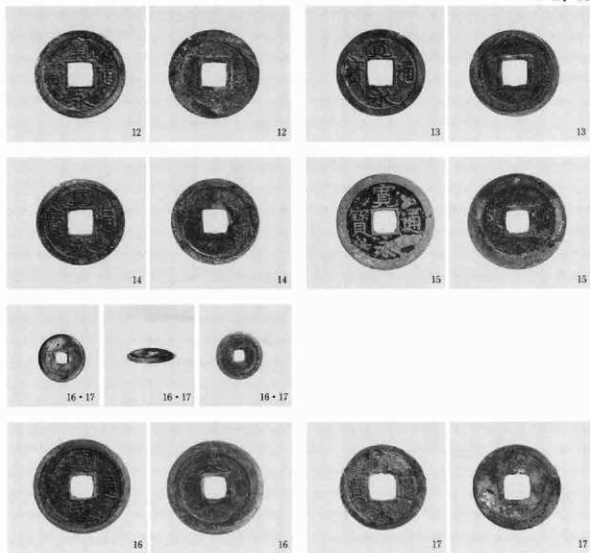
A-11 墓横出土



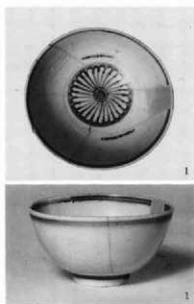
A-12墓竊出土



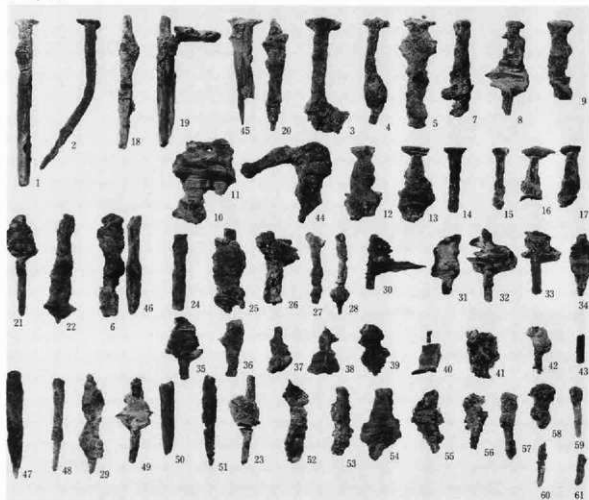
A-18 墓出土



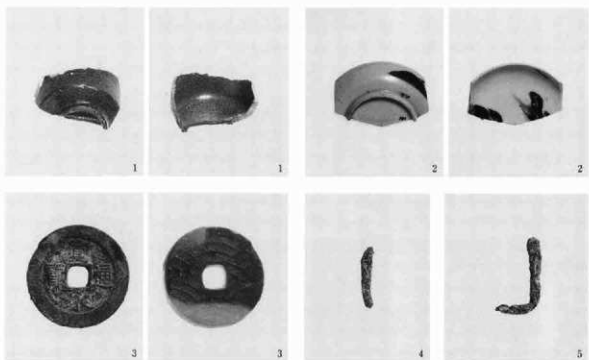
A-16墓横出土



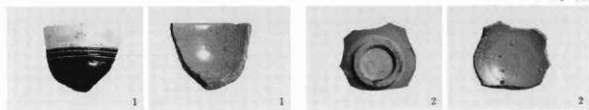
A-17墓横出土



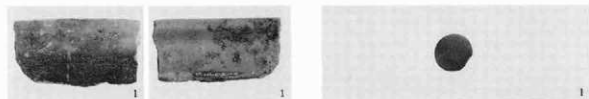
A-19墓出土



A-11土坑出土



A-18 土坑出土



A-1 土坑出土

A-4 土坑出土



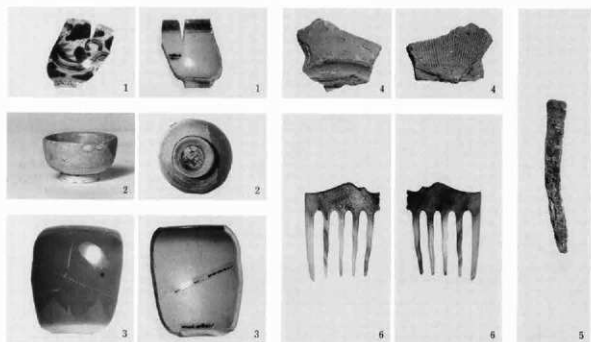
A-21 土坑出土



A-3 土坑出土



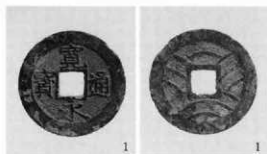
A-3 土坑出土



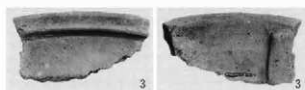
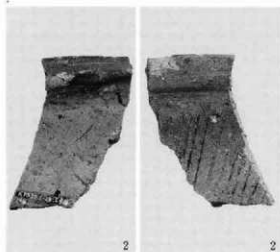
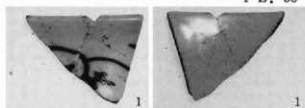
A-4 溝出土



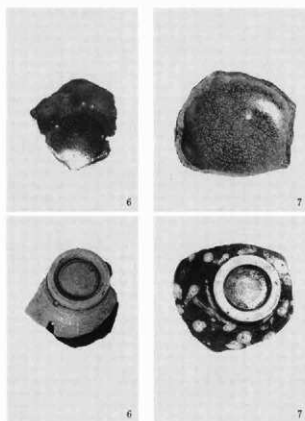
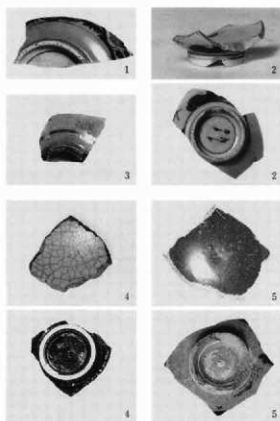
A-5 溝出土



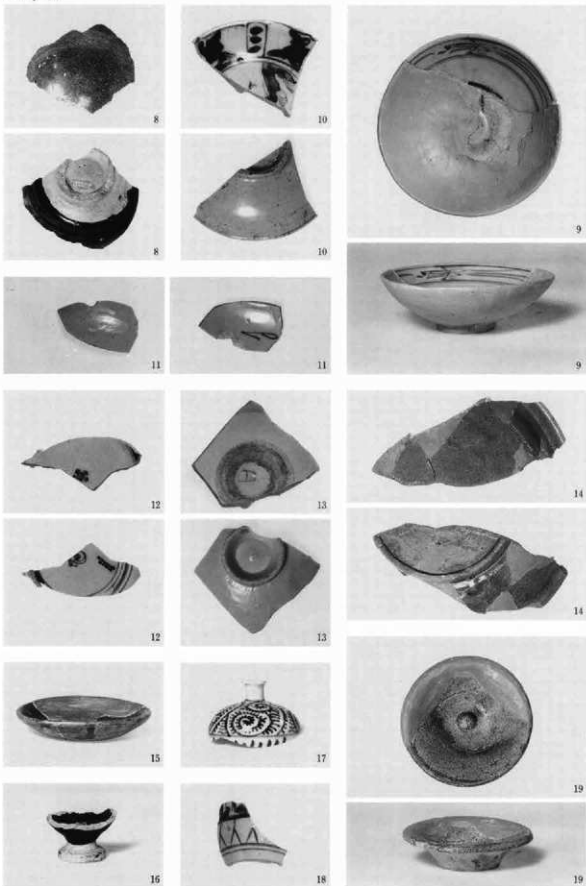
A-6 溝出土



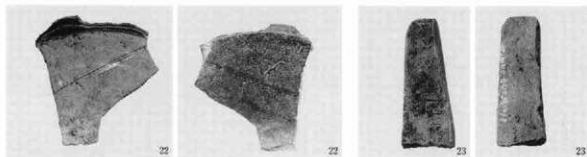
旧A-9 溝出土



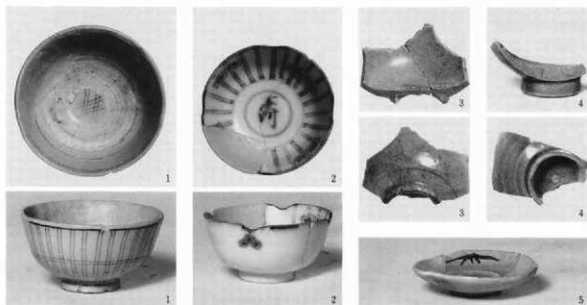
旧A-13土坑出土



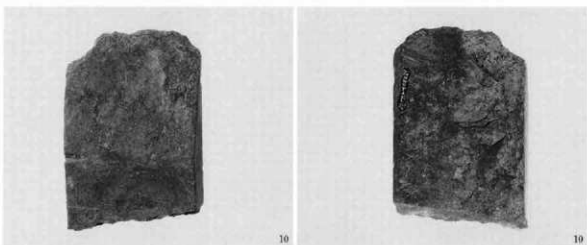
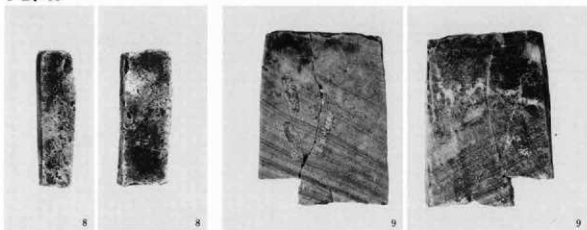
旧A-13土坑出土



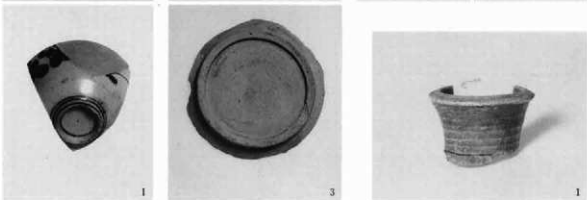
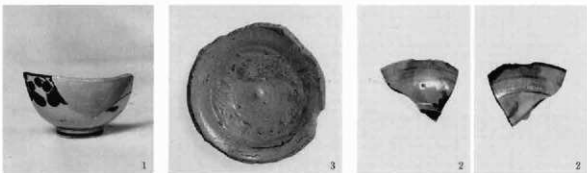
旧A-13土坑出土



近世面遺構外出土

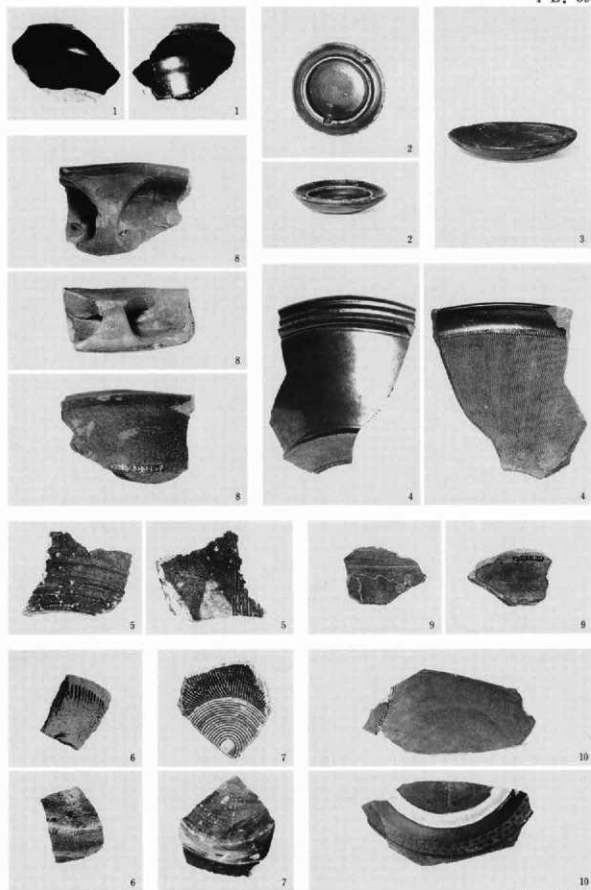


近世面遺構外出土

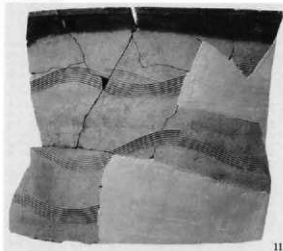


中世面出土

古墳時代第1面出土



表採・出土面不明



11



11



12



12



13



13



14



14



16



16



15



15

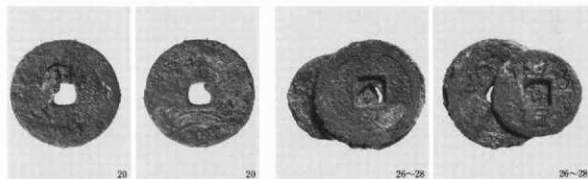
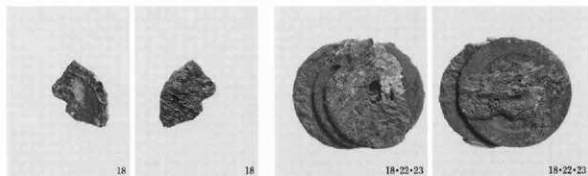


17

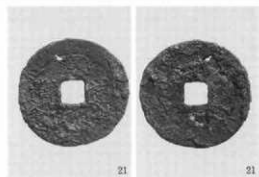


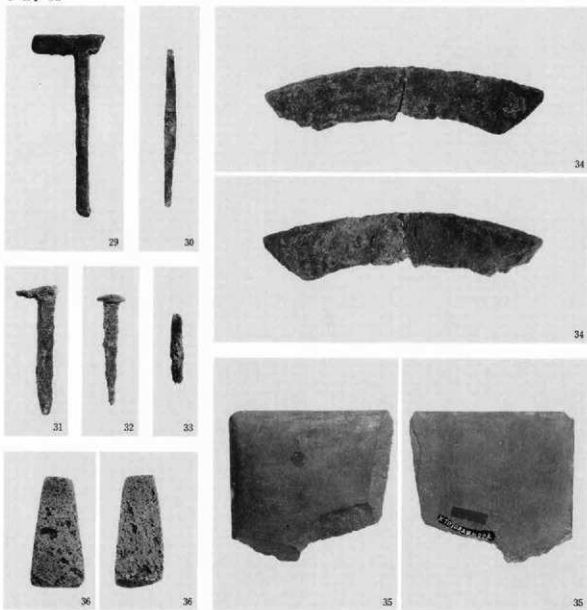
17

表採・出土面不明



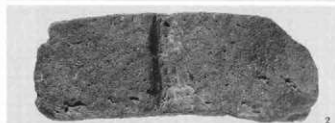
表採・出土面不明





表採・出土面不明

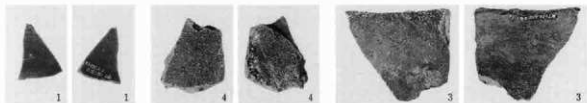
近世以降の遺物



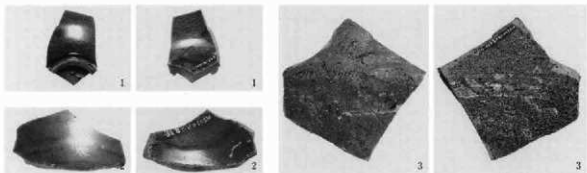
民家採取



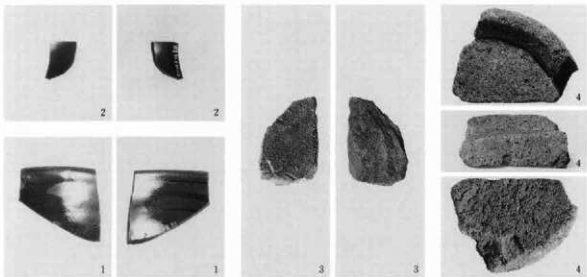
A-19墓横出土



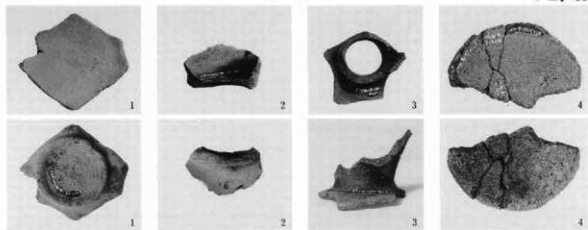
中世面清出土



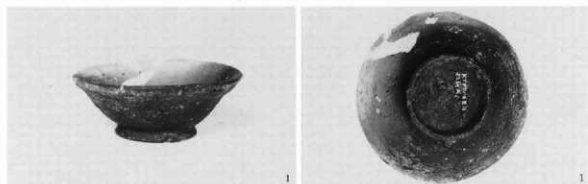
中世面遺構外出土



他面出土



BC-1 住居出土



BC-2 土坑出土



BC-5 土坑出土



BC-6 溝出土



古代A-2 面遺構外出土



BC-7 溝出土

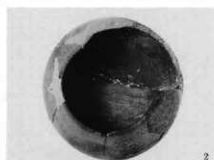


古代BC面遺構外出土



BC-9 溝出土

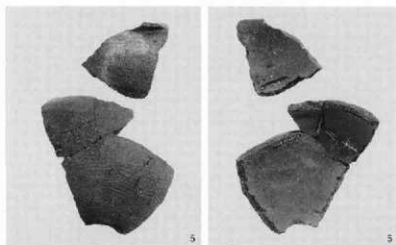
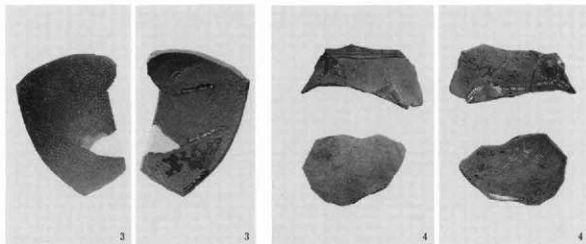
BC-10 溝出土



他面出土



古墳時代面出土



他面出土

古墳時代の遺物



古墳時代以前第1面出土

古墳時代以前の遺物

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第274集

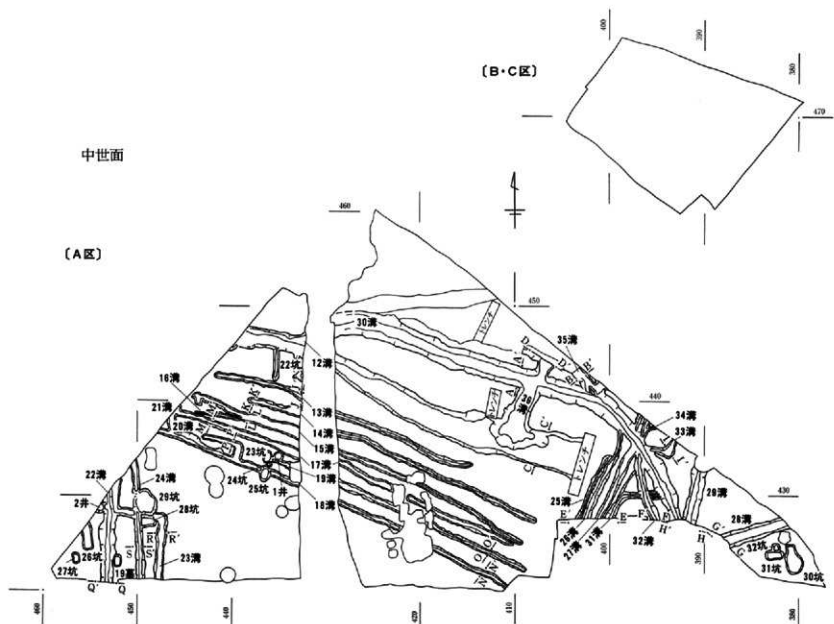
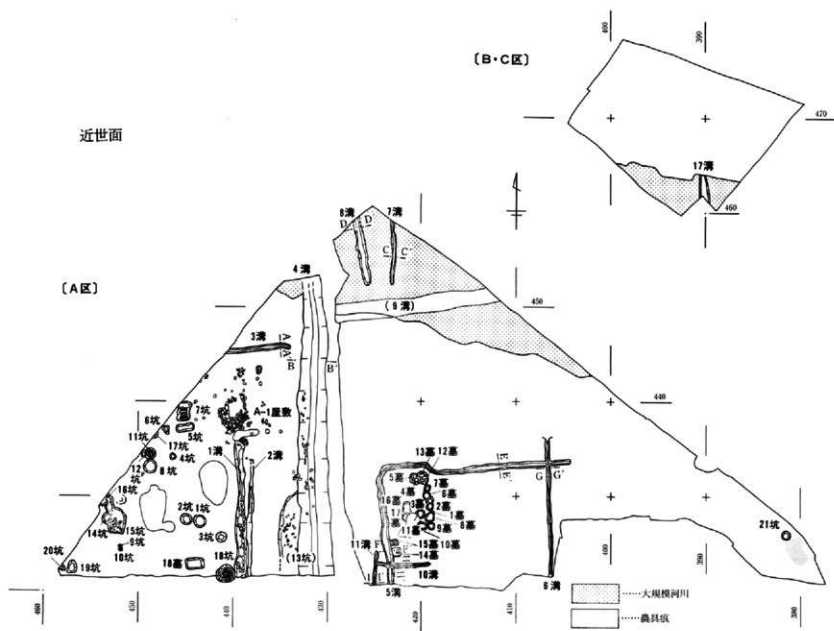
西横手遺跡群

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

平成13年(2001年)1月12日印刷

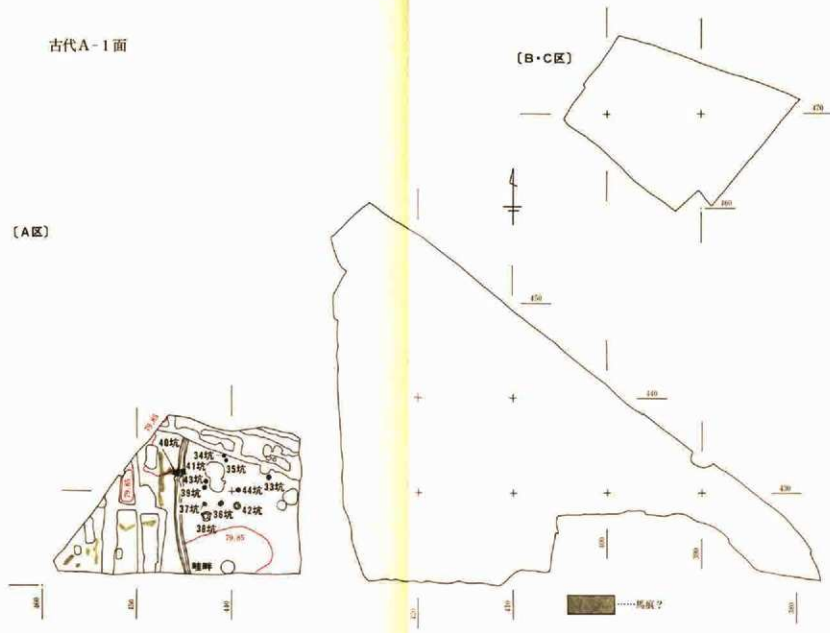
平成13年(2001年)1月19日発行

編集／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行／群馬県考古資料普及会
〒377-8555 群馬県勢多郡北横村大字下箱田784番地の2
電話 0279-52-2511(代表)
印刷／上毎印刷工業株式会社

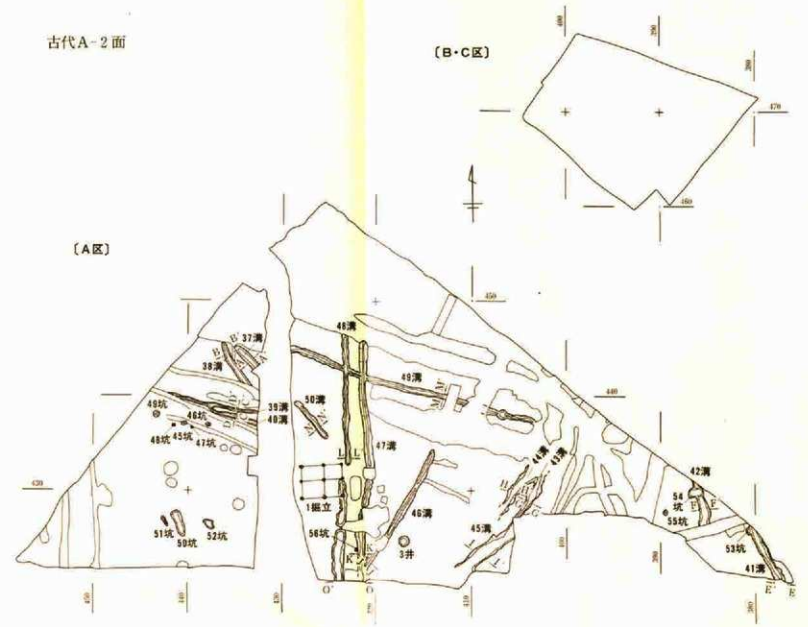


付図1 西横手遺跡群 近世・中世全体図 (1:400)

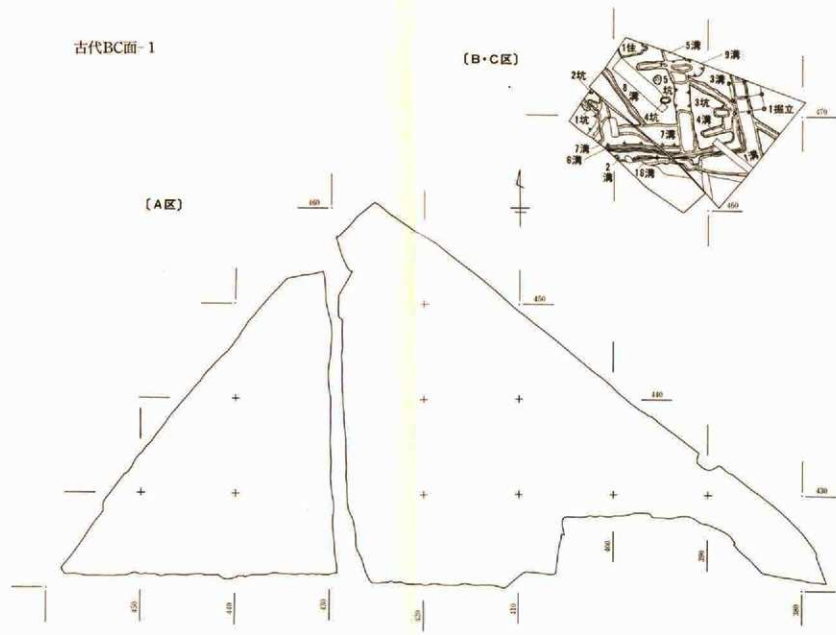
古代A-1面



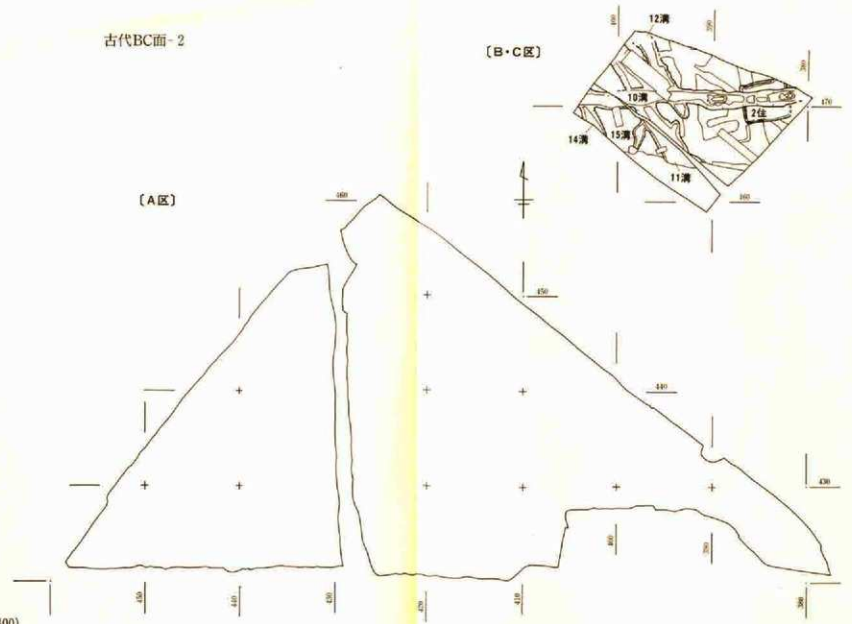
古代A-2面



古代BC面-1

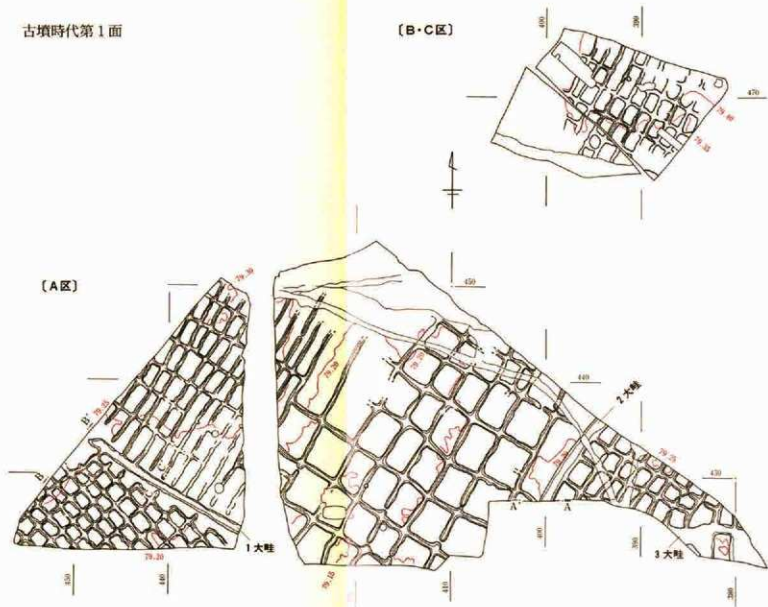


古代BC面-2

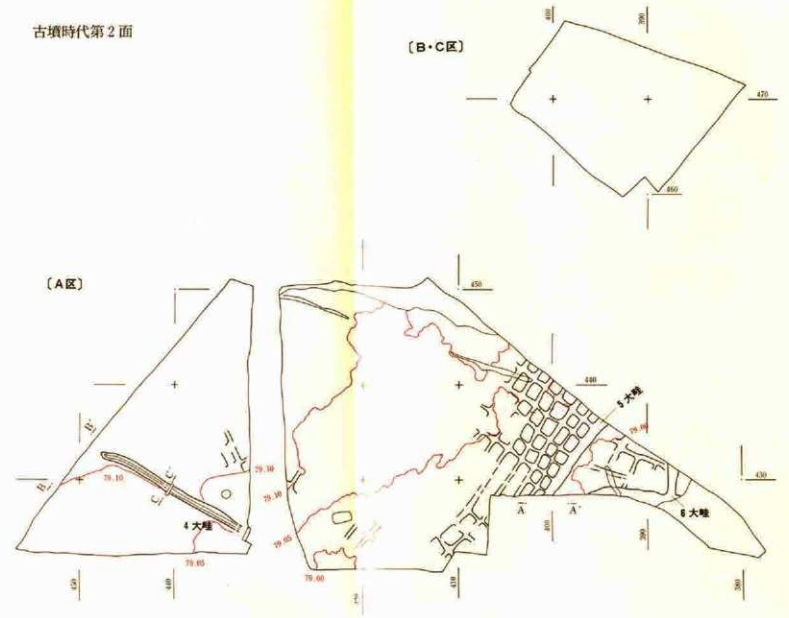


付图2 西横手遺跡群 古代全体圖 (1:400)

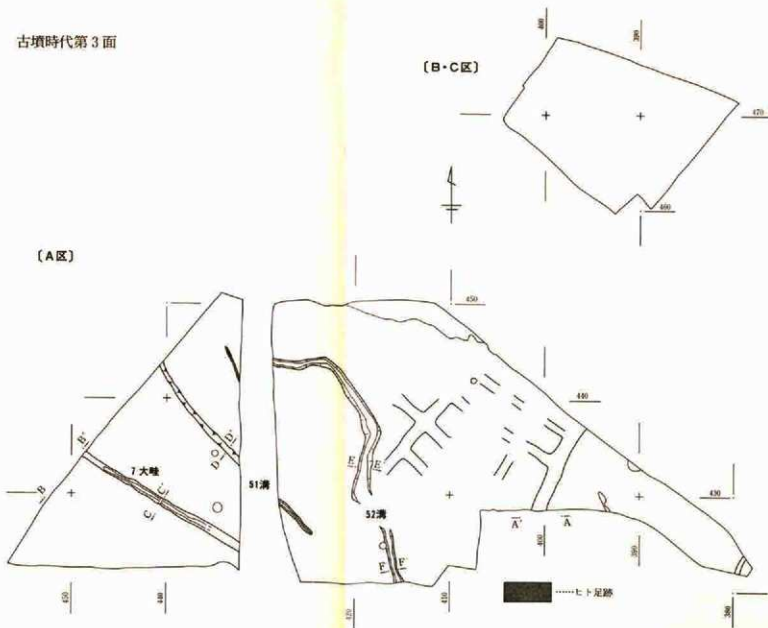
古墳時代第1面



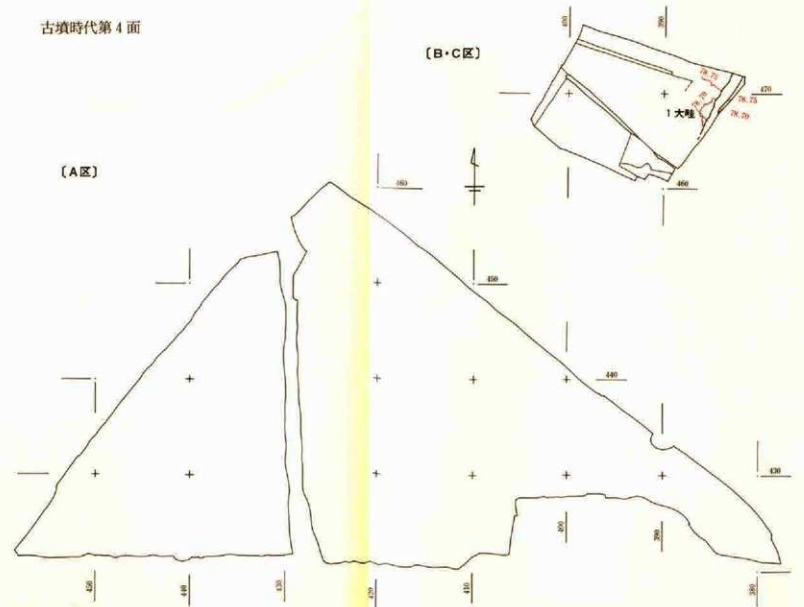
古墳時代第2面



古墳時代第3面

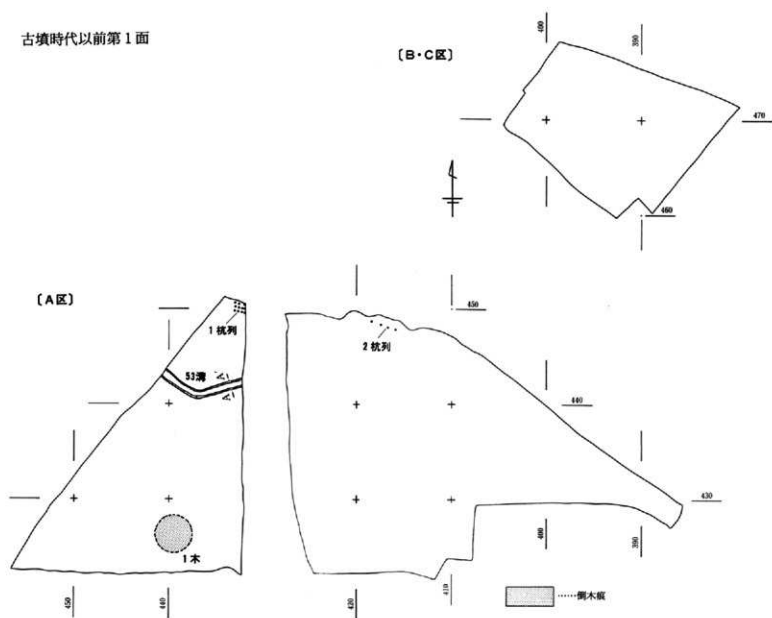


古墳時代第4面

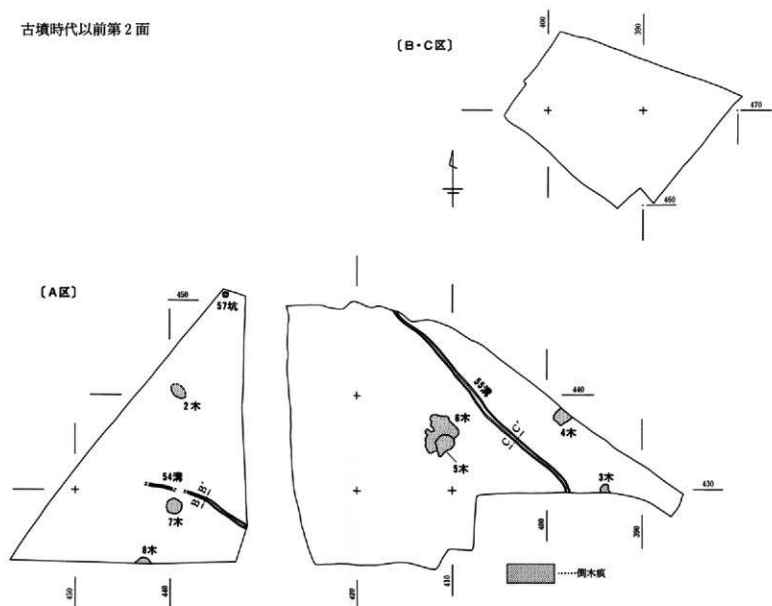


付図3 西横手遺跡群 古墳時代全体図 (1:400)

古墳時代以前第1面



古墳時代以前第2面



付図4 西横手遺跡群 古墳時代以前全体図 (1:400)